アトラがほんの少しだけ、我慢出来なかった結果

止まるんじゃねぇぞ……

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほんの些細な事が人々を破滅へ導いたり、発展へと導く。そんな蝶の羽ばたきのような些細な事が起きた世界のことをｉｆと人は呼ぶ。

これはそんなｉｆの話。

ある少年がほんの一年早く産まれた結果、様々な変化が起こった鉄華団の物語。

※短編を予定していました（過去形）

目次

【悲報】アトラさん、約一年半のフライング ―――― 1
バルバトス『オレはホテルにならなかった。イイね？』グシオン『アッハイ』 13
三代目流星号「フラウロス君、君の出番はボッシュートされました」フラウロス「えっ」 ―――― 24
火星銘酒『火星の王』、その原料であるこの謎の白い液体の正体とは……？ 37
阿頼耶識イ！何故あそこまで脳に負荷が掛かるのかぁ！何故神経が焼き切れる被害が起きるのかぁ……！その答えはただ一つぅ……!! ―――― 44
※尚団員やクーデリアさんは休暇ですが、団長はその裏で元気に働いています ―――― 52
二代目流星号「一足先に第二の生を送るわオレ」グシオン君「戦場だけが職場じゃねーさ」バルバトス「俺も長い事電源扱いされとったなぁ……」 ―――― 62
日曜洋画劇大戦、アーブラウ ―― 76
やったね暁！ママが増えるよ!!（） 90

王大人「ガンダム・フラウロス、死亡確認……」 101
厄祭の再演 115
得るものの無い戦い 130
雨降って地固まる 151
友よ 160
反撃のジャスレイ ―Operation BITTER CHOCOLATE― 172
【速報】名瀬・蛇亜瓶氏、テイワズ若頭就任【次期後継者決定か!?】 184
新たな仕事 198
鉱山採掘はじめました 210
火星の王は、カクテルにすると飲みやすい 223
ガングニールだとォッ⁉ 238
【悲報】クーデリアさん、お酒の勢いで三日月を押し倒す【火星の王ェ……】 257
これがガンダム！悪魔の力よ!! 273
『孤児』への涙 287
覚悟を決めた先に希望はある 298
圏外圏で最も酒を愛する女、来たる 307
『火星の王』と酒神の女主人 320
土建戦士グシオンリベイク（鉄華団建設

部門、鉄華組社歌）

【悲報】アトラさん、約一年半のフライング

「アリウムさんよぉ。こっちはとっくにあんたらが依頼した事に関して調べがついてるんだ。この落とし前、どうつけてくれる？」
（クソ、孤児上がりのチンピラ風情が……！）
「調べ？一体、なんのことか……」
「とぼけてんじゃねぇ」
ワインレッドのスーツの上にカーキ色のジャンバーを羽織った若い男は、テーブルのうえにタブレットを滑らせた。そこに載っていたのはこの男、アリウム・ギョウジャンが所属する活動家団体テラ・リベリオニスが宇宙海賊に対して要人暗殺を依頼した紛れもない証拠書類のデータである。
治安維持組織であるギャラルホルンと協力し拿捕した宇宙海賊「夜明けの地平線団」の船から見つかったそれには他ならぬアリウムの名前とテラ・リベリオニスから引き出された依頼料の事が詳細に記されていた。
「いっただろ。こっちはとっくに調べがついていると。同じことを二回言わせるんじゃ

ない」
「今回、あんたらが企んだ事に巻き込まれた結果俺達は少なくない不利益を被った。それに対する落とし前として……これを支払ってもらう」
懐から取り出した一枚の用紙を、後ろに待機させた少年に渡し、アリウムに手渡させた。
手渡された用紙を見て、アリウムは目を見開いた。それは恐ろしいほどの金額の賠償金であったのである。かつての勢いがあった頃のテラ・リベリオニスですら支払えるかさえ分からない程の金額が、その理由とともに事細かに書かれていたのである。
「こ、こんなもの払えるか!?」
「払えない?……フザケてんじゃねえ!!なあ、アリウムさんよ、こっちはこれでも譲歩しているんだぞ……?破壊された施設の修理費、動かさなければならなくなったＭＳの稼働費……そして何より、今回の一件でこっちに少なくない重傷者が出た。全部あんたらがふざけた事をしなければ起きなかった事だ……それを、払えないだと……?」
（こ、このチンピラ風情がァァ!殺してやる……）
「しよ、少々お待ちください。今、確認を……」

そう言って、アリウムは備え付けられた受話器を取る。そして、配置していた私兵に対して指示を行おうとするが……

（おい……今すぐこの目の前の男を……何?!）

『こちらは今、攻撃を受けている!こ、こいつら、恐れがないのか……!?う、うわあああ!?』

連絡した相手はすぐに銃声と共に悲鳴をあげて声を消した。あり得ない。たかが孤児上がりの私兵団にこのような……アリウムの思考はそれ一色に支配された。

「おい、金は出せるのか?出せないのか？　早く答えろ」

「う……今、連絡先が立て込んでいるようで……」

取り留めもない言い訳をしつつ、テーブルに隠した拳銃をアリウムは引き抜き――次の瞬間、銃声は鳴り響いた

撃ち抜かれたのは、アリウムの拳銃を引き抜いた方の腕だ。

「あ、あああああああああ!?う、腕が、わだじのうでがあああああ!!」

「……ミカ、よくやった。指示通りだ」

「うん。ちゃんとオルガの言う通り殺さないように撃ったよ」

そう言って、少年は硝煙の残る拳銃をそのまま片手でアリウムに構えた。先ほどアリウムに対して請求書を渡した少年である。

「ああ、こんなクズ、お前の手を汚す価値も無いからな……だが、支払ってもらわなきゃならねぇ物が山ほどあるのは事実だ。そして、今は支払えねぇという……なら話は早い。おい昭弘、どれくらい無力化出来た？」

「ああ、今全員制圧したぞ。生き残ったのは虫の息の奴含めて八割。まあ、上々だろうさ」

「よし、ミカ！アレを拘束しろ」

「分かった」

「な、何をする！やめ……ぎゃぁぁぁあああああ!!」

オルガが指示を出した次の瞬間、少年は銃と一緒に持っていたスタンガンをアリウムに使用した。ある出来事をきっかけに片手しか使えなくなった彼が拳銃と共に引き抜けるようにベルトに装備していた軍用のそれは、あっさりとアリウムを気絶へと追い込んだ。

意識を失ったアリウムの腕を後ろで組ませ、少年は手錠を掛けた。

「きっちり、テイワズが経営する地下採掘施設で働いて返済してもらおうじゃないか。

何年かかるか分からねぇが……二度と日の光を拝めるとは思わねぇこったな」
「……いいの？コイツら、仲間を傷つけたのに」
「いいんだミカ。殺すか、殺されるかなんざ戦場だけでな。無駄に殺すと余計な恨みを買う……そんなもん、背負わなくてもいい」
それに、そう言いきってオルガは言う。目の前の少年の帰りを待つ二人の事を。
「お前には帰りを待つ子供がいるんだからな、ミカ。余計な返り血なんて浴びてみろ。アトラに……お前のカミさんに叱られるぞ」
「それは……そうだね。アトラに汚したって怒られたくはないな」
「だろ？……さあ、コイツらふんじばって、とっとと撤収するぞ皆!!帰るまでが仕事だ!!気を抜くんじゃねぇぞ!!」

「「「応!!」」」
そう言って、彼らは鮮やかに制圧した者たちを拘束し、トラックへと詰め込んでいった。
彼らの名は鉄華団。この火星で今最も勢いのある新進気鋭の組織である。
かつては孤児から成り上がった身故に生か死か、二択を選びがちな者たちであったが一年前のとある出来事をきっかけに命以外の選択を選ぶべきであると気が付き、かつて

の苛烈さはほんの少しだけ鳴りを潜めている若い組織であった。
しかし、その分弱くなった訳ではない。むしろ硬いだけの刃物が脆いようにどこか綻びのあったかつての鉄華団とは違い、粘りというべきしなやかさを得てそうそう揺るがない芯ある頑丈さを得たのが、今の鉄華団であった。

そのある出来事によって団長であるオルガやその側近で当事者である三日月、その他の団員達は良く話し合うことと、悩みがあれば相談する事の大切さを思い知り、環境故にすぐとは言えないが若さ特有の柔軟さからその経験を取り入れて大きく成長したのであった。

「ただいま、アト……」
「しー……今、暁ようやく寝た所だから」
消えるような声で、しかししっかりとその少女は少年に声を伝えた。彼女の名前はアトラ。アトラ・オーガス。

この少年、三日月・オーガスの妻である。

そして、そんな彼女が大切そうに抱えている赤ん坊こそが鉄華団に自らの危うさを省みさせるに至った原因にして、この二人の息子である暁・オーガスであった。

今から約1年前、三日月が何処か遠くに行ってしまう事を危惧したアトラは三日月を押し倒した。子供という、親子という繋がりについて憧れを抱いていたアトラはそれを三日月に求めたのである。

アトラの事を大切に思っていた三日月は、アトラが求めるならと、彼女のことを受け入れてしまった。お互いそういった行為については知っていたものの、正しい性教育や道徳など受けていないが故の事故であった。

結果、こうしてそれは結実しアトラは妊娠してしまい鉄華団全体を巻き込んだ騒動へと発展。知り合いで子持ちである兄弟分の名瀬やその妻たちにオルガが恥も外聞も無く助けを乞い、妊娠や出産などの正しい知識を知る人物を紹介してもらおうとしたところで名瀬は兄弟分の一大事と気前よく妻達を派遣させ、アトラはその小さい身体ながら無事出産する事ができた。

が、それは騒動のほんの始まりに過ぎなかった。赤ん坊を育てるというのは大変であるが、何時までも名瀬の奥さんたちの手を借りるわけにはいかず彼女らを帰らせると、育児書などとにらめっこしながらの団員達とアトラと三日月による育児が始まったの

である。無論、あの鉄火場を乗り越え発展し始めた鉄華団の仕事をしながらだ。
そうして全員で苦労しているうちに、団員たちや団長であるオルガ、父親である三日月の間にある意識が芽生え始めてきていた。
何がなんでも、皆生きてこの場所に帰って来るという意識であった。執着と言い換えてもいい。
無論、彼らがそれをもともと持っていなかったと言うわけではない。だが、過酷な戦場での命の奪い合いが彼らに一種の達観のようなものを染み込ませていた。たとえ自分が死んでも、仲間たちがいつか目指す場所にたどり着けるなら……そんな考えを持つものも少なくなかったのである。
しかしそこに待ったを掛けたのが暁の存在である。暁は彼ら全員に大小差あれど愛されていた。自分たちが親を持たない存在であるがゆえに、この子にはそういった思いだけはさせたくないと皆強く思ったのである。
そうして生にしがみついて、彼らは自らの行いによる因果について思うようになった。別に罪の意識に苛まれたというわけではない。恨みを多く買っている事をほんの少し自覚しただけである。ほんの少しだけ彼らは慎重になった。
その慎重さは、彼ら鉄華団への周囲からの印象にまで影響を与えつつある。『成り上がりの孤児の集まり』から、『不器用ながらも世渡りを覚えようとする若者達』と言った

具合に。

まず彼らは盃を交したものの名瀬以外とはあまり関わりを持っていなかったテイワズ系の組織と交流を持つようになった。よくよく考えなくても自分達は新参者で、敵だけではなく味方側の組織からも睨まれるとオルガだけでなく団員達が気が付き始めたからである。

火星で活動するのは問題ないが、自分達が睨まれるということは散々世話になり続けている兄貴分の名瀬達にも迷惑が掛かる。

これはまずいと思い始めた年長組の面々が行った行動は、簡単に言えば挨拶回りであった。

まず名瀬に相談し、テイワズにおいて差し障りのない贈り物がどういうものなのかを学ぶ所から始まり、団員間で話し合ってどんなものを贈るか等、拙いながらも誠意を見せようと努力して……オルガは団長自ら足を運んで彼らにアポを取り、頭を下げて自分達はこういう者であると挨拶して回ったのである。

確かに手間も資金も時間も掛かる。だが睨まれて背中から刺されるのだけは避けたい。ならば避けられない出費だった。

たった一度の挨拶回りをしただけと思うからもしれないが、その挨拶を欠かすだけで相手の心情は確実に悪くなる。言葉すら交わさない相手の事など、アジア系マフィアの

文化が根強いテイワズにおいて考慮する訳がないからである。
結果として、オルガや年長組が多少気疲れでやつれたものの悪くない印象をテイワズ側に与えることに成功していた。
今までろくな挨拶も無かったことに腹を立てて礼儀知らずと思っていた者達は『今までそんな余裕も落ち着きもなかった』のだと理解した結果、世渡りを行おうとする若者に対して先達として寛大さを見せようと考え直す者が多数現れ、彼らの事を警戒していた者達は『少なくとも自分達に対して噛み付くような狂犬ではない』と多少なりとも警戒を解いた。
何より、若い組織とはいえトップ自らが頭を下げて菓子折りを持ってやって来たのである。その度胸と誠意は確かに認められたのであった。
誠意と任侠をテイワズは重んじる。トップであるマグマードの主張もあるが、ルーツであるアジア系マフィアの文化でもあった。それゆえに、今まで鉄華団に懐疑的であった面々もある程度は話がわかる相手であると態度を緩めるに至ったのだ。
今はまだ小さい組織だが、将来性のある新参者であると鉄華団はタービンズ以外にも認められたのである。故に、ほんの少しだけ、些細な違いが彼らの行く末を変えつつある。
だが今はまだ、その先に何があるかは先の話である。

「今日も、夜泣きが酷くて……ようやく泣きやんでくれたの。三日月が……お父さんが居ない夜はいつもこうで……」

「……お母さんがいるのに、贅沢な奴だな暁は。いつもごめん、アトラ」

「ううん、三日月、いつも団長さんの護衛で忙しいもの。仕事だから仕方ないよ……暁が泣くのも、仕方ない事なんだってタービンズのお姉さん達に教えてもらったから。……なんで赤ちゃんが泣くんだって、三日月は知ってる?」

「……ん、分からないや」

「赤ちゃんが泣くのは、必要なことなんだよ。おしめを変えてほしい時と、眠くて不機嫌になった時と、お腹が空いた時と……愛情を欲してる時に、泣くんだってお姉さん達言ってた」

「……アトラや皆に、あんなに構って貰っても足らないのか」

そう言いつつも、三日月は穏やかに笑った。

そう、笑ったのだ。あの日、初めて三日月がバルバトスを動かし、鉄華団が成立したあの日から固まりつつあった三日月の表情が、暁が産まれてからまるで呪いが溶けたかのように穏やかさを取り戻すようになっていた。

付き合いの長いオルガを含む古参の団員達は『三日月も無理をしていた』のだとそこ

でようやく気がついた。昔の三日月と今の三日月を思い返してみれば、段々と余裕がなくなっていたのだと。そう思い至った者達は、かつてのように仕事の話だけでなく、未来のことややりたいこと、暁の事やようやくできるようになった趣味の話など、様々なことを三日月と話すようになりつつある。

その結果、今の三日月は普段は無表情ながらも、少しずつ笑うように戻りつつあった。

静かに眠る暁の頭を、動く方の腕で起こさないよう優しく三日月は撫でた。

アトラはその様子を微笑ましく思い、自然と笑顔が溢れた。

何気ない一時。それは確かに、かつて自分達が求めて止まなかった物の一つである。

（やっぱり、オルガが……いや、皆が進んでる先が）

俺達の目指している場所なのだと、三日月は強く思った。

バルバトス『オレはホテルにならなかった。イイね？』グシオン『アッハイ』

鉄華団本部。かつてＣＧＳ時代に社長室……前社長の部屋として使われていたその場所は、今では鉄華団の応接室として扱われていた。かつての成金めいた雰囲気の調度品は多少売り払われ、しかし賓客に対して失礼ではない程度に整えられたその部屋に、彼らは集まっていた。

現在鉄華団を主導している者達。いわば年長組とかつて言われていた者達だ。

三日月・オーガス。

ユージン・セブンスターク。

昭弘・アルトランド。

ノルバ・シノ。

ダンテ・モグロ。

チャド・チャダーン。

そしてオルガ・イツカ。

多忙の中にある彼らが一同に集まる理由。それは、鉄華団と言う組織が組み上がりつつある今だからこそ外せない事が理由であった。

「皆、多忙の中集まってくれて感謝する。今日、このメンバーが集まらなければいけない重要性については先に言ってあるが、理由については今言わせてもらう」

団長であるオルガは一息置いてから、その事を語った。

「鉄華団の今後について。もっと簡単に言うなら、資金の稼ぎ方についてだ。ユージン、今ウチの資金源の大半が何で賄われてるかは知ってるよな?」

「ああ。基本は護衛や犯罪者の討伐依頼の報酬金と、海賊のMSから拿捕したエイハブリアクターをテイワズに卸した金で回ってる。勿論コレは一番大きな収入源で、他にはテイワズから火星、もしくは地球への輸入品の搬入費なんかの細々とした物もあるな。それがどうかしたのか?」

「……多分、このままそれをやってるだけじゃ上手く回らなくなるって話さ」

オルガがそう言うと、シノがそれに対して疑問をぶつけた。

「なんでだ?ここの所、きな臭い空気が火星にあるせいでその手の依頼も増えてきてるし、前だって拿捕したMSから得られた収入額が過去最高になったって言ってたじゃんか」

「シノ、いくらそういう輩が沢山居たってな、MSや船まで動かせるような規模の輩が無

限にいるわけじゃねーんだぞ？」

「……あー、そういう事か！実際、クリュセ周辺だとそういう輩があんま見なくなったって話を店のネーチャンから最近聞いたわ。それで感謝されたっけ……『狩り尽くしちまった』って事か？」

「流石に、火星やその周辺にいる海賊全員をって訳じゃないが、少なくとも悪名を轟かせてる奴の筆頭だったのが前の夜明けの地平線団のボスだったんだよシノ。これで、鉄華団の勇名が更に響くのは間違いないだろうけど……これからそれを続けていくのも、危険って事だろオルガ？」

チャドがそうシノに対して補足すると、オルガはチャドの問に対して答える。

「ああ。今までは一発当てただけのまぐれと思われてもおかしくなかったが、アイツらをギャラルホルンと共同とはいえ捕まえた事が知られた今、海賊共は俺達の事をこれまで以上に警戒するだろうな。我先にと襲い掛かってくるようなのは救いようのない阿呆共か、余程後の無い奴ら位になって、そうじゃない奴は勝てると思える何かを待つようになるだろう。となれば、今までみたいに依頼で得られた少なくない額の追加報酬を期待するのは難しくなるだろうな。こちらの被害も大きくなるだろうしな」

オルガがそういった後、頭に指を置いてユージンが何かを計算し始めた。ここ最近ユージンは会計等の仕事も手伝うようになっていた為、このメンバーの中ではオルガの

次に鉄華団の財布事情をよく知っていた。
「てぇなると……あの収入がだいぶ減る事になるから……うげ、ま、まじかよ……」
　CGS時代から付いてきてもらっている数少ない大人の1人であり、会計役のデグスターから経理の仕事を教わり段々とそれが身についてきたユージンは脳内で大まかな金額を計算し、そして青ざめた。今はいい。これまで貯めてきた資金がある。しかしそれは確実に消えていく金であった。MSや船の整備維持。団員達の食費や人件費。その他諸々。人間、生きていれば金は幾らでも掛かるのだ。
「そこでだ。今ある元手を使ってでも今のうちに俺達が出来る商売に投資したいんだ。これは、俺達の夢の第一歩でもある。今はまだ鉄火場から離れられない俺達だが……いや、俺達はまあ、最悪離れきれなくても仕方ないかもしれんが、年少組の奴らやこれから新しく鉄華団に入ってくる団員だけでもそういう、命のやり取りで日銭を稼がなきゃ食ってけないような現状を変える為の第一歩になりゃいいと思うんだ。お前たち、どう思う?」
　オルガのその問いに、初めに答えたのは昭弘だった。
「……なあ、オルガ。俺達、そんな所まで来れたのか?」
「ああ。まだ始まってもいないが間違いなく、お前たちのおかげでここまでこれたんだ」
　昭弘は静かに、しかし喜びを噛み締めながら次の言葉を出した。

「そうか……思ったよりも、早かったな。最高な考えだと思うぜ、俺は」
「俺もだ！ヒューマンデブリだった俺達が……行き場もない、昔の俺達みたいな奴らに対して仕事と食い扶持を用意する側になるなんて、考えても無かったぜ……っ」
　昭弘がオルガの考えに賛同すると同時にダンテもそれに同意する。
「俺も。いい考えだと思うよ。でも、具体的には何をしようか……火星じゃ土が痩せてるから作物の価格はかなり安いし……売るものなんて思いつかないよね」
「チャドの言う通りだよ。桜ちゃんの農家のトウモロコシも、大部分はバイオ燃料になるって。勿体無いけど、そうでもしないと売れないんだって桜ちゃんボヤいてたな……」
　チャドの意見に、三日月が反応し答えた。それに対して、大体の資金の仮の計算を終えたユージンが話す。
「まあ、確かに今ならそういう事も出来る余地があるけどな。テイワズからの新しいMSの導入も元々決まってたもんだから、既に代金は用意してあって今回の臨時収入とは別物だからなんとかなるだろうぜ。だがなぁ……成功するとは限らないんだぜ？もう少し、備蓄を増やしてからのが良いんじゃねーか？」
「なんだよユージン、怖ええのか？」
「そりゃ怖ええよシノ!?　下手したらだいぶ鉄華団が傾くんだぞ!!」

「まあそうだけどよぉ……二年前の時に比べたら、自分達でやろうとする事ができるだけでも大違いなんじゃねーかなって俺は思うぜ。こういう事は、思いついた時にやった方が後悔しないってもんだ。だから俺はオルガの提案に賛成だ」

　シノは、飄々としながらも芯の通った声でそうオルガに賛同した。いつかやりたいというだけではやれなかった時に後悔する事を彼は知っていた。

「……そうだな。確かに、二年前に比べたらそこまで大きくない博打だな。どの道やらなきゃならない事だし、コケたとしても今なら取り返しがつく。いや、絶対取り返してやる。……よし、覚悟が決まった。やろうぜオルガ!!」

　各々、それぞれが自身の疑問や意見を言って纏まった所でオルガは再び問いただした。

「よし、何かを新しく始める事は確定だな。こっからは何を始めるかを話し合うとするか……んじゃ早速だが、ユージン、なんか考えは無いか?」

「え、俺から!?オルガもなんかあるんじゃねーのか?」

「ざっとにはあるにはあるが、忙しくて中々考えが纏まらなくてな。皆からの案を聞いてから話そうと思うんだが」

「お前はもっと休んでも良いと思うんだがなー……ま、そういうことなら先に言わせてもらうぜ。まず、俺からの案は……これから火星でドンパチする以外で稼ぐんなら建設

業が儲かるんじゃねーかって思うんだが」

そう切り出して、ユージンは説明していく。まず、二年前の地球との交渉で火星ハーフメタルの輸出規制の緩和によって火星のハーフメタル鉱山の事業は賑わいつつあるという。

しかし、それを遮るあるものが問題になりつつあるらしい。設備の老朽化である。

「お嬢から聞いた話だと、なんでも建物の水道とか電気とかガスとかのライフラインが老朽化してるせいであちこちで問題になってるらしいんだ。それを整備する建設や工事の会社も不足気味で、火星の建築業や土木業はどこも手が足りてないらしい」

そもそも火星の土木業というのは、所謂上流層が住む場所やその設備を整える為だったり、それなりに大きな勢力の建物を拵えるに細々と存在しているものだ。それ以外の者達は廃墟を自分たちで整備して使えるように直したり、掘っ立て小屋を立てて作るなり、仮屋を借りたりしてなんとかしているのである。

厄祭戦以前からある建物はかなり頑丈でそれでも人の手さえ入れれば使えてしまうため、今まではそれでも問題が無かった。が、いざ本格的に鉱石の採掘を行うとなるとそういったジャンク品の再利用だけでは成り立たなくなりつつあるそうだ。

「だから、今後を見据えてそういう建築業を行う部門を鉄華団に作るって提案をさせてもらうぜ。こういう事業なら、体さえ元気ならここ以外行き場の無い奴らだって真っ当

に働かせられるだろうしな。……問題は、重機は今あるＭＷやＭＳである程度代用出来てもそれ以外のもんを揃えるのに結構色々掛かるだろうなって事だな。それと、建設関連の知識がいる事だが……その辺はトレーニングの合間におやっさんに勉強教えてもらってるだろ昭弘?」

「ああ。俺もだが、俺以外のそういうのに興味ある面子もたまにおやっさんに見てもらいながら図面引いたりする基本や基礎の組み方なんかを教えてもらってる……あの人には、頭上がらねぇな」

おやっさん……鉄華団のメカニック長であるナディ・雪之丞・カッサパは二年前のＣＧＳ襲撃の際に初めから彼らの味方であった数少ない大人であった。

本業であったＭＷの整備だけでなく趣味の過去の機械の知識の収集からＭＳの整備まで出来た彼の経験がなければ鉄華団は今頃ここには居ない。そして、過去に建設関係の仕事もしていた経験もあった事から暇な時にそういった事に興味のある団員に対してたまにその知識を教えていた。

『手に職をつければ早々食いっぱぐれない』と彼はよく言う。古い両足の義足を着けた彼がそういうのだから、それはきっと事実なのだろう。そう思ったのか彼の助手役をしているメカニック担当の団員達は勿論、他の面々も彼の教えはよく聞いていた。

多芸で経験豊富な、彼らにとって尊敬できる数少ない大人の一人だ。

「今のままじゃ戦いとか、たまに農場の手伝いする位しか役に立てないからな。それだけじゃいけねぇって考える機会もあって……今じゃ皆、自分なりに考えて勉強とかしてるんだよな。俺は建設についてだが三日月は栄養とか農業の勉強してるんだっけか？」

昭弘は、火星ヤシをひと粒齧っていた三日月にそう尋ねた。

「……ん？ああ、最近たまにやってる。暁をあやしながらだけど……最初は、自分には勉強って必要ないかなって思ってたけど、そうじゃなかったから」

三日月が文字の必要性を感じたのは、暁の出産時に手助けしてくれたタービンズの女性陣が帰った後に残してくれた育児書等が理由であった。かつてクーデリアから教わった文字のおかげでなんとかそれを読めた三日月は文字が読めない団員達にそれを朗読して赤ん坊の世話の仕方を教えながら暁の面倒を見ていた。

勿論アトラも暁の面倒を見ているが、彼女も鉄華団の厨房を担当する立派な団員である。食事を作る時は暁を抱えて料理するわけにも行かないのでそういった時間帯は他の面子で暁の面倒をみていたのである。

片手が使えない三日月の補助として暇な団員が三日月が読んでいる育児書の内容を実践している姿は、今では鉄華団内でよく見る光景だ。ああでもない、こうでもないと四苦八苦しながら暁をあやし、おしめを変え、ミルクを与えて……手が空いた団員達や

親である三日月、そしてアトラの手で暁の世話をしていたこの数ヶ月は彼の考え方を改めさせるに十分な経験であった。

知識を学べばやれる事の選択肢が沢山増える。当たり前の事であるがそれを行える程の余裕がなかった彼らは、その余裕というものが出来た後もその使い方も何が出来るかも実感できずに愚直にそのまま働き続けていたが……赤ん坊を育てるという経験から、今のままでは駄目だと暁の面倒を見た多くの団員たちが思った。

壊すことしかできない者達が辿る末路など、嫌になるほど彼らは見てきたのだから。そうはならない為の手段として知識が必要だと彼らは知った。

結果として、自主的に勉強をするものが増えたという訳である。

「……まあ、まだ拙いかもしれねーけどよぉ、昭弘達だったらちゃんと身につけてくれるだろうさ。そんな訳で、俺からは建設業に手を伸ばす事を提案しようと思うぜ。俺からの案は以上だ。次は誰が言う?」

ユージンからの案が終わると、じゃあ次は自分と和気あいあいと手が上がる。そうして自分なりに考えた案を皆の前で言っていく。

その様子を見ているオルガは、とても嬉しそうに微笑んでいた。

(見てるか、ビスケット。多分、こういう光景だったんだろうな……お前が見たかったモ

ンは）

白紙のメモのアプリを起動させたタブレットに、皆が出した案を書き纏めながらオルガは思った。

まだ始まってすらいない。それでも、ここからどうなるのかがオルガには楽しみで仕方がなかった。何故なら今こうやって書いているそれらは、オルガにとってたどり着きたいと思う夢の地図の断片であったからだ。

みんなが考えてくれた夢の地図の断片を見ながら、オルガはその断片を地図へと変える為の道筋を軽く頭の中で組み立て始めた。

三代目流星号「フラウロス君、君の出番はボッシュートされました」フラウロス「えっ」

大型惑星間巡航船『歳星』、その最も警備が厳重な場所に企業複合体テイワズの代表の住居はある。そこへ呼び出されたのは彼のトレードマークである白スーツを着こなす伊達男。テイワズの輸送部門を担当する企業『タービンズ』のリーダーである名瀬・タービンである。

「来たか名瀬。急に呼び出して悪かったな。調子はどうだ?」
「ぼちぼちうまくやってますよ。前言ってた商談も上手くいきました。これで、アーヴラウ連邦とテイワズの新しい交易ルートは確立したと言っていいでしょう」
「流石だな。それに関してはお前に任せた以上心配はしてなかった。……まあ、この話をお前達タービンズの弟分が持ってきた時は驚いたもんだがな。まだまだ儲けを持ってくるには時間がかかると思ったが、こういう形で利益を与えてくれるとは思わなん

だ」

「ええ、鉄華団もいい方向に成長してるようでして。最近、次会う時が楽しみで仕方がないと思ってるのがカミさん達にバレたようでして、妬かれてしまいましたよ」

「お前ほどの色男がお熱とは、あいつらも隅に置けないな。少し見ない間に随分面白い連中になったみたいじゃないか。何、今回お前を呼び出したのはな、あいつら鉄華団の事を聞きたかったんだ。火星で海賊退治に精を出しているようで、最近中々こちらには来ないからな。よく会っているお前に話を聞きたかった」

『圏外圏で最も恐ろしい男』、企業複合体テイワズの代表であるマクマード・バリストンは愉快そうに笑った。

手元にある紙触媒の資料を見て、マクマードは上機嫌だった。

「鉄華団へ送られてきたアーブラウの軍事顧問としてのオファーを交渉の末こちらに回す事で、鉄華団はテイワズとアーブラウの顔繋ぎ役となった。技量的には問題なくてもメンバーが若い面子ばかりなのは変わらない事を考え、こちらに回したほうが良いと判断したらしいが……その判断は大当たりだった訳だ」

この時代で紙触媒で印刷されるというのは基本的に紙にしか残せないよほどの重要情報位である。そこに書かれているのはテイワズとアーブラウ連邦との交易によって得られた利益。そして売れた商品のリストである。

「軍事顧問としてテイワズの兵器運用部門のＰＭＣでもトップの奴らを送った事で俺達テイワズはアーブラウ連邦との信頼を勝ち取り、今では表立って交易を行えるほどの太い交易ルートを得た。だがそもそも俺達みたいな圏外圏の人間が、地球と堂々と交易を行えるほど信頼を得る機会なんざそうそう無い。その機会を持ってきてくれたアイツらは今やテイワズでも注目されるに値する期待の若手だ」

マクマードがここまで手放しに褒める事など早々無い。それほどまでに、この話がテイワズにとって非常に儲けになる可能性を秘めているとマクマードは確信しているのであろう。

「だが、腑に落ちない点がある。何があればアレが、あの愚直と言えるほど真っ直ぐ走り続けてた奴らがこうも化けるか。あいつらが変わり始めたのはあの挨拶回りがあった位の頃からだったな。何があったのか知りたい所だが、なんかあったか知らねぇか？」

マクマードは問いかけるように、机の前に立つ名瀬に視線を向けた。

その視線に答えるように名瀬は手に取っていたトレードマークの帽子を胸に抱え、答

えた。

「オヤジが気にいっていた、鉄華団のメンバーが居ましたよね？ガンダムフレームに乗っていた。どうやら、アイツに子供が出来たみたいでして……そこからですね、アイツらが変わり始めたのは」

「……くく、くくくっ、はは、アーハッハッハ!!あーそうか、そうか!!　そんな所まで似るのかお前らは!!」

　マクマードは愉快そうに大笑いした。

「お前そっくりだよ名瀬。お前が、少人数だったタービンズをここまで大きくするよう方向転換したのは、初めてのガキが出来たからだったな。兄弟分だからってそんな所まで普通似るか？まあ、納得したよ」

「勘弁してくださいよ……変化のきっかけに、因果を感じたのは俺も同じですが」

　気恥ずかしそうに、名瀬は帽子を持っていない方の手を頭に置いた。

　名瀬自身が覚悟を決めた理由、そのきっかけはとても単純な物だった。

　名瀬に第一子が出来たという変化が、彼に覚悟と決意を与えたのである。どうせ抱えるなら、自分の手の届く限り抱え込んでしまおうと新たな交易ルートを探索し、開拓し……今ではテイワズの輸送部門を一手に担う程、タービンズの規模は大きくなった。そ

うした努力により、今のタービンズは存在している。
　マクマードが似ているといったのは、そういう事である。

「それが、アイツらが一皮剥けた理由か。理由としては納得がいくもんだった。教えてくれてありがとよ。だったらあいつらにやる報酬はもう少し練った方がいいかもしれんな。あの鉱山はジャスレイにでも任せてやるか」
「鉱山というと、例の火星のハーフメタル採掘現場の事で？」
「ああ、もう少し経ったら何かの恩賞でアイツらに任せてもいいと思ってたんだが……そんなもん任せるよりも、今はあいつらの自由にさせた方が面白い事になると思ってな。かつてテイワズに輸送部門を築き上げたお前達みたいに、あいつらはあいつらなりの大きな何かを自分で築き上げるだろうよ」

　そう言って、マクマードは机に置かれたシガーケースから葉巻を取った。

「まあ、鉄華団についての話は以上だ。思ったよりも愉快な話が聞けて何よりだった。ここから先はお前への話だ。なぁ、名瀬よぉ……テイワズの表の看板、いい加減引き継ぐ気はねーか？」

「……っ、オヤジそれは……って待ってください、表の看板というと」
「ようは、御輿にならんかって話よ。まだまだ俺も引退する気なんぞ起きんが、俺が顔役のままだとテイワズの発展は圏外圏の枠で終わっちまう。無論、今の時勢を顧みれば圏外圏も地球圏ものし上がるには極論どこかで暴力が必要になるが……俺が顔役のままじゃせっかく新しく開拓した地球圏の交易ルートの方々にゃ物騒過ぎると捉えられるだろうからな。その点、お前はいい。女衒紛いと言われてはいるが、弱者側であった女達をあまで纏め上げ、食っていく為の術を与えたお前に悪い風評は少ないからな」
「……俺としては、今の立場に満足してるんですがね。テイワズ全てを纏め上げるなんて、とてもとても……」
「まあすぐにとは言わねぇが、可能な限り考えてくれると俺も安心して圏外圏の事に専念出来る。忘れずに覚えておいてくれよ、名瀬」

紫煙を燻らせ、マクマードは葉巻を吸った。名瀬は、とうとうこの時が来てしまったかと内心焦りながらも頭を下げ、マクマードの自室から去っていった。

（こりゃ俺もいい加減覚悟を決める時なのかもしれんな……テイワズ全てを纏め上げる代表なんざ、オヤジ以外に務まるとは思えんが……帰ったらアミダと飲みながらでも話

してみるかねぇ……）

そんなことを考えながら名瀬は嫁達のいる自身の艦であるハンマーヘッドへの帰路へついた。

番外編『オルガの一日』

鉄華団団長、オルガ・イツカの朝は早い。二年たったにも関わらずＣＧＳ時代の感覚が抜けきっておらず、時間になるとかっちりと目を覚ましてしまう。

起きるとすぐにシャワーなどの朝の支度を済ませ、背広はまだ着ないものの最近よく着ている臙脂色のスーツに着替える。

そうして背広片手にいつもデスクワークをしている社長室へ。そこでハンガーに背広をかけた後、情報端末から昨日から残した仕事と今日入る予定を確認し新しく入ったアリアドネ経由のメール等を確認する。

そうして大体の確認が終わると、食堂での朝食の準備が出来ている時間になるのでオ

ルガは社長室を出て早朝の自主トレーニングを終えた者達や起きてきた者達と一緒に食事を取る。
「ぱー、まんまー」
「ほら暁、スプーンちゃんと持って……よし、良い子だ。はい、あーん」
「ううー……」モチャモチャ
「とと、溢さないで……よし、ちゃんと食べたね暁。良い子だ」

この時間帯は職場復帰したアトラが食堂で料理をしている為、主に暁の面倒は三日月が見ているのをよく見る事が出来る。戦場での彼を良く知る者からすれば驚愕するかもしれないが、暁が生まれて六～七ヶ月が経った今では団員たちにとって見慣れつつある光景であった。

「お、暁離乳食始めたのか。何を食わせてるんだ？」
「あ、おはようオルガ。薄味のポレンタだよ。味が薄くて癖の無いものをはじめは食べさせた方が良いんだってさ。まあ、今はまだ慣れさせてる段階だからこの後アトラが母乳あげるけどね」
「……赤ん坊が大きくなるのって、早いな。まだ暁が生まれて半年ちょっとしか立って

ないっていうのに、随分大きくなった」
「そうだね。段々、重くなってきたから片手じゃ抱えるの大変になってきたよ」
「ぱーぱ、まんま」
「はいはい、スプーン持って……どうやら、ママの作ったポレンタは気に入ってくれたみたいだね」
「そうだな。ちゃんと食べて、大きく育てよー、暁」
「うー！」
オルガは暁の頭を撫でた後、食べ終わったトレーを持って厨房へ返却しにいった。

そうして朝食を終えると背広を肩に通し、鉄華団のジャケットを羽織ってから朝のミーティングを各班の隊長やリーダーと共に行う。ＭＳの稼働状態の情報共有。火星各地から寄せられた依頼の取捨選択。今日の予定の打ち合わせ等を行って、それが終わったら団長として把握しなければならない情報を確認し判断して指示を出す為に社長室へ戻りデスクワークを開始する。
その仕事内容は日によって変わるが鉄華団本部に居るときは基本的には会計も担当しているユージンが必要な書類を持ってきたり、整備に必要な資材を要請しようとおやっさんがその届け出を持ってきたりする事が多い。

依頼人が来る場合はオルガが直接対応する事もあれば、副団長のユージンが行うこともある。

そうして昼時になり、オルガの普段の一日で一番忙しい時間帯が始まる。各部署に直接足を運んで指示を出し、用事があるならイサリビに乗って団員たちと共に出撃する時もあれば、依頼の交渉を行う事など行う事は多岐にわたるものの、基本的にこの時間帯が一番忙しい。

最近他の団員たちも『考える事』に関しては自分から学び、勉強する事で以前のようなオルガに負担が全てかかるような状況から改善されつつあるものの、最終的に鉄華団の行動を確定させるのは団長であるオルガの役割である。

その為、食事は本部に居るときは社長室にサンドイッチのような簡単なものを運んでもらう事が多いようだ。イサリビで活動している時は食堂で皆と一緒に食事を取る。

そうしてその日のうちに終わらせなければならない仕事を片付けると、辺りは真っ暗になっている事が多い。少し前まではそれでも気にせず仕事をしていることも多かったが他の団員たちに心配され、休めという意見が多くあった事からここ最近は仕事を切り上げて明日に回せるものは残すようにしているようだ。

「すまんなアトラ、こんな時間に食事用意して貰って」
「いえ、いつも遅くまでお疲れ様です団長さん」
「ｚｚｚ……」

アトラはエプロンと三角巾をたたみながらそういった。背中にはおんぶ紐に抱えられた暁が寝ている。

朝や昼時等、忙しくてどうしても世話を出来ない時以外、アトラはこうやって暁をおんぶしたり、腕に抱いたりしながらその面倒を見ながら掃除や洗濯、料理などの家事をしているようだ。産後の経過も良好で、暁の首が座ってからは職場に復帰して元気に働いている。

アトラがオルガにトレーを渡すと、食堂の扉が開いた。
「あ、オルガ。またこんな時間にご飯？」
「ミカか。ああ、どうしても今日中に終わらせなきゃならない仕事があってな……飯を後回しにしてたらこんな時間になっちまった。ミカは何しに来たんだ？」
「火星ヤシの補充に。ハッシュの特訓に付き合ってたら切れちゃったから……アトラ、悪いけど分けてもらっても良いかな？」

「うん。いつもの所に置いてあるから、好きなだけ持っていって」

アトラにお礼を言うと、三日月は食堂の貯蔵庫へ入っていった。

火星ヤシは火星で最も安く手に入る甘味である。中にはとんでもないハズレがあり、一見見分けがつかない事からそのまま食べるというよりは水に戻して種を取ってからパンやクッキーのような物に混ぜて焼いたり、酵母の元にする調味料のような扱いを受けていた。火星では砂糖より安いので、火星ぐらしの住人ならよほどのお金持ちでない限りは一度は口にする食材である。その為、鉄華団の食堂にも一定量備蓄があった。

そうして貯蔵庫から帰ってきた三日月は、たんまりと火星ヤシをポケットにつめて戻ってきた。

「しかし、ハッシュだったか。あの新入りも随分頑張ってるじゃねぇか……いっそミカの直属の部下にするか？」

「ハッシュを？うーん……考えとく。なんか必死だったから、つい訓練に付き合ってあげてたけど……あのまま戦場に出すのはちょっと怖いね。ただ、伸びると思うよ。ハッシュは」

「ハッシュ君、頑張ってるもんね。前は倒れそうになるまで三日月とシミュレーターしてたの見たよ？」

そんなふうに会話に花を咲かせながら食事を終えると、オルガは寝室へと向かう。スーツを脱ぎ、シャツを洗濯かごにいれると今は室内着として着ているかつての団員服に着替えて就寝する。

これがここ最近のオルガの一日のサイクルである。尚これでも改善された方ではあるが、本人が中々休暇を取らない為、親しい団員たちが仕事の予定のない日を見繕って休ませる為に遊びに誘ったりする。

ワーカーホリック気味ではあるものの、オルガは今とても充実した日々を送っていた。

火星銘酒『火星の王』、その原料であるこの謎の白い液体の正体とは……？

文字が読めれば、自ずとできる事も変わる。それを実感してなかったが為に三日月は『自分には必要性の薄いもの』として勉学を捉えていた。少なくとも、アトラが暁を妊娠するまでは。

三日月やアトラも出自故にそれが子供を作る行為と知ってはいた。アトラは三日月が知らないうちに何処かへと居なくなってしまう事を恐れ、形としての繋がりを求めて三日月を押し倒した。三日月はアトラの恐れを察してか、拒否することはアトラを傷つける事に繋がるのでは無いかと思いそれを受け入れた。結局の所、『これはいつか起こった顛末だった』のだろう。遅いか早いかの差に過ぎない。鉄華団のメンバーも面を食らった様子で驚いたものの、アトラと三日月の関係からそれを受け入れるのは容易な事であった。

問題はそこからだ。彼らは子供の作り方は知っていても『その先』についてなんて誰

も知っていなかったのだ。

そもそもここは男所帯で、その上に孤児であった者達が多くを占める。皆親の顔も覚えてないことなんてよくある話だ。

詰まるところ彼らは赤子の育て方なんて知らなかった。それ以前に、妊婦がしてはならないことに関してもほとんど分からなかった。徐々にアトラのお腹が大きくなると同時に始まる悪阻や体調の変化など、対応しようにもその方法が分かる筈も無く。

事情を知ったクーデリアやメリビット達女性陣が用意してくれた資料には育児書はあったものの妊婦側の体の変化に関してはあまり良い資料が見つからず。加えてその時の鉄華団にはまだ良い医者の伝手は無かった。

そうしてこれは本格的に不味いと頭を抱えたオルガとアトラが体調を崩す様を深刻に捉えた三日月が直接テイワズに出向いてまで名瀬に深く頭を下げて力を借りに行った訳である。アーブラウの一件以来、連絡は取り合っていたもののここまで露骨に力を借りに来たのはこの件が初であったために前回力を借りに来たときの状況の落差からくるその滑稽さと弟分の当時と変わらぬ必死さに名瀬は笑いをこらえつつ、横にいたアミダは苦笑いで迎え入れた。

こうした経緯があり、名瀬は自分の嫁さんたちの中でも医療に関する知識と経験や資格――特に産婦人科としての――を持った方やその助手やらを景気良く鉄華団に送り。

名瀬の嫁さん達、特にアトラを気にしていたアミダは役に立つであろう育児書やら妊娠時に注意するべき事を纏めた資料を三日月に渡して鉄華団本部にいるアトラの元へ送り返した。

鉄華団のメンバーが本格的に自分なりに勉強をするようになったのはこの一件があってからである。皆自分がなんの力にもなれなかった事を悔やんでいた。そして、自分たちは知らないことが多すぎると自覚した。

それはこの騒動の原因の一人であった三日月本人もそうであった。

「……うー……」

「……」

三日月は今日は非番である為、暁の面倒を見ている。昼寝の時間になり、暁をアトラと同棲している自室で寝かせた三日月は手にしたタブレットに入った『植物図鑑』や『地球の環境』について調べていた。

アーブラウの一件からバルバトスに阿頼耶識を繋げなければ片手が使えないがために畑仕事は出来ないかもしれないなと思いつつあったものの、世話になったサクラ農家に恩を返せればいいなと思い、火星に合う良い農作物は何か無いかと火星に近い環境の地球の土地を探しながらそこにあるという作物や植物について調べている。育てる方

法や環境作りなど、気になった部分は付箋をつけて後でわかりやすくして、纏めていた。

もしもあのまま文字を蔑ろにしていたら、手当り次第地球から仕入れた種を植えてみて育つか確かめていたかもしれない。しかし文字や資料に書かれた情報の大切さを身にしみて知った今の三日月はそういった事をする前にまず、調べてから行動するようになっていたのであった。

乾ききった空気と滅多に振らない雨、そして痩せた土地。火星の開発が進んでいた厄祭戦以前の宇宙開拓時代にテラフォーミングされた事により火星は人が住める土地に整えられたものの、その環境は過酷の一言である。

しかしながら、それでも人が住めるようになっている以上多少の差はあれども地球にも火星に近い環境の場所がある筈だと思い、三日月はそういった環境の場所に生えているという植物や作物を探していたのである。実際育ててみてちゃんとした物となるかは分からないが、無作為に種を買って植え続けるよりは良い筈と考えて。

(……サボテンか。確かに自生してるのをたまには見かけるけど、作物としては……ん?)

頁を進める手が止まる。植物辞典に既に地球上では絶滅したとされるその植物について、三日月は見覚えがあった。サボテンではないが火星でも人の手に入ってない場所なら自生している植物である。

（アレ……お酒の原料になるの？というか、なんであんな自生してる植物なのに、地球だと絶滅して……いや、逆か）

火星がテラフォーミングされた時、様々な植物が火星に持ち込まれたらしいと聞く。この荒野で細々と自生しているのはそういった植物の末裔であるらしい。

火星は環境的には厄祭戦の影響が地球に比べて少なかったらしく、そういった植物が生き残る余地があったのだろう。逆に地球はだいぶ酷い環境変化に見舞われる程に被害を受けた為に絶滅してしまった植物も多かったらしい。この植物図鑑もよく見たら出版元は地球であるらしく、火星で自生している事など知らなかったのであろう事が伺える。

（コレ……使えるかも？一回試しに自生してるアレを取ってきて調べてみようか）

その酒の作り方などを今度チャドに頼んで調べて貰う事を考えながら、三日月は植物図鑑のデータに付箋の機能を押してタブレットに記録した。

地球で全滅し、火星で自生しているその植物の名前は……アガベ、またの名をリュウゼツラン。地球のメキシコ発祥の、かつて世界四大スピリッツと言われたテキーラの原料であった。

そうして次の良さそうな植物を探そうとタブレットに指を滑らせると、ふいに自室のドアが開いた。
「ただいまー……あっ、暁お昼寝中かー……静かにしなきゃ」
「おかえりアトラ。食堂はもういいの?」
「うん、今日は三日月がおやすみだから早めに上がって親子水入らずで過ごしなって皆言ってくれてね……今度お礼に美味しい物作ってあげなきゃ」

そう言ってアトラは靴を脱いで頭につけた三角巾を取り、手に抱えていたバスケットかごからラップで包んだサンドイッチをテーブルに置いた。厨房で焼いているコーンブレッドにワカモレを挟んだサンドイッチである。まだ鉄華団がCGSと言われていた頃から定番であったコレは、三日月も好きな好物であった。
「食堂に来てなかったってハッシュ君に聞いたから、三日月の分も持ってきたんだ。ちょっと遅いけど、一緒に食べよ?」
「うん。ありがとアトラ。暁が寝るまでちょっとぐずってて食べる暇無かったんだよね。眠くて不機嫌だっただけみたいだから、横にしたらすぐ寝ちゃったけど……」

そう言って三日月はタブレットを置いてゆりかごに寝かせた暁を起こさないように

優しく撫でた。片手しか使えない三日月でも乗せやすい物をとタービンズの皆が出産祝いに送ってくれた物である。それだけではない。この部屋自体も、鉄華団の皆が態々部屋の配置を変えてまで用意してくれた贈り物であった。

こんな騒動を起こしたにもかかわらず、それを否定せず祝福してくれた事自体奇跡のような事であると三日月は思う。その恩返しをする為にも、三日月は少しでも皆が楽になれるよう稼げる手段を彼なりに探していたのであった。

アトラが三日月に寄り添う。こうして一緒に自室に居るときは、こうしているのが最近の二人の定位置であった。

「今日のサンドイッチは自信作なんだ。だから、その……た、食べさせっこ、したいなって……」

アトラは真っ赤になりながらそう言った。それに対して三日月はアトラを抱きしめたくなった衝動を抑えながら、首を縦に振った。

今日は数少ない非番の日。オーガス夫婦は子供がいるにもかかわらず、まだまだ若く、初々しい雰囲気すらあった。

阿頼耶識ィ！何故あそこまで脳に負荷が掛かるのかぁ！何故神経が焼き切れる被害が起きるのかぁ……！その答えはただ一つぅ……!!

一度足を止めて色々な事を考え始めた彼らが足りないものを挙げていったのは当然の話であった。

今主な活動としている火星の自衛を兼ねた賞金首や海賊の討伐や依頼の達成に必要な装備の発注や整備。これらは戦場に立ち続けていた彼らからすれば当然のように重視していた為、元々手抜かり無く可能な限り万全な形で行われていた。

問題はそれ以外である。様々なものが欠けるように足りなかった。ただ、あれもこれも直ぐには解決出来る問題ではなく、ある程度の問題は時間をかけて解決していく方針となった。

しかし中でも特に足りなかった物、絶対に必要と判断した不足が大きく分けて二つあった。

一つは事務員の不足だ。元々孤児の集団であった鉄華団は学を有している者がとても貴重だ。地頭がとても良かったがために文字や数字にすぐ慣れて鉄華団の運営活動を可能にしたオルガは例外として、他にはCGS時代から鉄華団に所属している大人の片割れであるデクスターと、テイワズからの出向であるメリビット……そして、文字がなんとか読めるものの事務活動には不慣れな団員が数名と、はっきり言って悲惨の一言に尽きる人数であった。

2年前のビスケットの戦死は、鉄華団にとって深い悲しみとその運営の危機を与えた非常に大きな悲報であったのである。

一度は外部の人間を雇う事で解決を図るかとオルガも考えたが、デメリットが大きすぎた為にそうする事は出来なかった。

一度メリビットという能力的にも人格的にも信用的にも大当たりと言えるような人材が来たからと言って、二度目はそうとは限らない。そもそも、もしも裏切られたらと思うとその選択は出来なかった。鉄華団の懐事情を全て知られてしまうのだから、事務員には信用がなによりも必要である。加えて過去の忌まわしい記憶から外部の大人を信用出来ない団員も多い。悲しい事に信用出来る相手の貴重さと言うものは身に沁みて分かっていた。そうそう手に入らないものであるという事も。

そこで自力での解決を図った訳である。団員の中でも数字の計算や書類仕事に意欲のある者を募り、デクスターやメリビットに教わりながら事務ができる者を増やすという地道な道を選択したのであった。今では怪我により戦いに戻れなくなった団員たちの受け皿となっていたり、ユージンのように向いていたのかデクスターから鉄華団の資産運用の方法を学んでいたりする団員が現れたりと、少しずつ成果を上げつつある。

ようやくオルガもなんとか休みが取れるようになってきたと言えば、どれほど大きな進歩であるか分かるであろうか？このまま行けばオルガも他の団員と同じ位の仕事量に……とまでは行かないだろうが、それなりに人間的な生活を送れるようになるだろう。

しかし、もう一つの大きな問題に関しては、外部からの協力無しには解決が不可能であった。

それは医者の不在についてである。これに関しては、二年前の地球への航海を行うまでは彼らに考えることすら出来なかった。病気になれば捨てられ、怪我で再起不能になっても捨てられる。そんな荒んだ環境で育った彼らには医者にかかるという考えすら無かったのだ。

医者と言うのはある程度の規模の組織には必要不可欠な存在だ。軍事用のメディカルポットは厄祭戦時代からの遺産であり、通常ではありえない速度で外傷を癒やしてくれる素晴らしい性能を誇るものの、限度はある。多用しすぎれば寿命は削れるし、あくまでも外傷を癒やす道具でしかないのだ。便利ではあるが病気等には無力である。

その為なんとか鉄華団で働いてくれそうな医者を探していたのだが、ここは圏外圏。そう簡単に良い人材が見つかる事も無く。しかしアトラの一件もあって、医者の重要性を皆知りつつあった。

なので必要であると分かっていながら後手に回し続けるしかない案件であったが、これは意外な所から助け舟がやってきたのであった。

その助け舟を送ってきた相手の名は、モンターク商会。ギャラルホルンの七大家『セブンスターズ』の一員でありながら、ギャラルホルンに当時敵対していた鉄華団の援助を秘密裏に行っていたマクギリス・ファリドが別の名義で運営する商会であった。

「暁くんの服、少しはだけさせますねー。はい、少しの間だけじっとしててねー」

そう言って白衣の男は首にかけた聴診器を耳につけ、暁の胸にくっつけた。暁はくすぐったそうにしているものの、母親に抱かれている為か大人しくしていた。
「……心音に異常は無いし、健康そのものだね。もう服着させて大丈夫ですよ」
「いつもありがとうございます、先生」

そう言ってアトラは暁の服を着せ直し、暁を抱き抱え直した。段々と大きくなる暁に対し、元々小柄なアトラの対比はその関係を知らないものからすれば年の離れた姉弟のようにすら見える。しかし、その光景を見れば彼らを親子であると確信するだろう。
アトラの胸に抱かれた暁は、とても安心した表情でアトラを見つめていた。
「いや、いつもお利口さんで暁くんは偉いよ。正直、お父さんよりも素直に診察を受けてくれるからね」
「いや、その、忙しくて……」
「また三日月、先生の診察受けるの断ったの？暁だって受けてるんだからちゃんとしなきゃ駄目じゃない！」
「……ごめんアトラ。ちゃんと診察受けるよ」
バツの悪い表情で隣にいた三日月が頭を掻く。どうにも三日月は目の前の男が苦手であった。医者としての腕は確かな物であり、日常的な診察から外科も内科も行える資

格を持った地球圏でも珍しい存在であった。人格についてもとても穏やかな性格であり、あのマクギリス・ファリドから送られてきた人物とは到底思えない。

「丁度いいから三日月、君も私の診察を受けていくといい。君のその手は医者としてそのままにはしておけないからね。ああ、時間が少しかかるからアトラさんと暁くんは先に医療室から出ていってても構わないよ」

「ありがとうございます。そろそろ暁ご飯の時間だったから、助かります……それじゃ、先に行って待ってるね」

三日月にそう言ってアトラは暁を抱えて医療室から出ていった。

そうしてその足音が聞こえなくなった頃に、目の前の医者は三日月に話を切り出した。

「最近、阿頼耶識の調子はどうだい？右腕と右目に、何か変化は？」

「……まあ、悪くはないかな。手や目に関しては、前言った通りのまま。ＭＳやモビルワーカーに繋がった時だけ動くんだけど……」

「そうか。すこし、診察させてくれ」

　そう言って医者……『メネリク』は三日月の動かない右手を手に取った。
「触った感触はある？」
「ある。でもやっぱちょっと鈍いかな……」
「阿頼耶識を繋げた際に、軽く動かした方が良いよ。そのままでは血の巡りが悪くなる」
「分かった……やっぱ、直せない？」
「難しいと言わざるを得ないね……案はあるにはあるけど、ナノマシンが神経を痛めてしまっていては……むしろ正直、そこまで無茶して歩けているだけでも奇跡だ」
「そう……残念だな。両手で、暁抱っこしてあげたかった」
　そう言って、三日月は動かない右手を眺めた。
　その様子にメネリクは、悲しそうな表情で手に取っていた三日月の右手を置いた。
「しかし、何をどうしたらそこまで神経に負荷を掛けるっていうんだい？今まで詳しくは聞いてなかったが阿頼耶識を使っているなら、ナノマシンが副脳の機能を果たす筈。そこまで神経系にまで被害が及ぶなんて事……ん？」
「どうしたの、メネリク先生……？」
「……～～!!そういうことか!!ちょっと待っていてくれ……もしかしたら、どうにかなるかもしれん」

そう言ってメネリクは医療室の自身のパソコンに『阿頼耶識のコネクタ』を差し込み、立ち上げた。そうして、淡々と何かを打ち込み始めた。

本名を『メネリク・シバ』

彼はセブンスターズではないがギャラルホルンの禁止技術や遺失技術を代々受け継いでいたが故に忌み嫌われ、没落させられた元名家『シバ家』最後の末裔。

刺客に狙われ、燻っていた日々を送っていた所をマクギリスに拾われた、厄祭戦時代からの正当な生体ナノマシン技術を受け継いだ最後の専門医であった。

（……こういう所が、ちょっと苦手なんだよな）

もっとも、そんな事を知る由もない三日月からすれば、自分達阿頼耶識使いを嫌ってはいないようだが何やら変な目で見てくる変な奴、という印象しか残らないのは仕方ないことかもしれない。

※尚団員やクーデリアさんは休暇ですが、団長はその裏で元気に働いています

昭弘の休日

昭弘・アルトランドは元ヒューマンデブリである。幼少期、宇宙を行き来する商人の家に産まれた彼は海賊に襲われ、両親を殺された挙句弟諸共海賊に一山いくらの『物』として売り払われたのだ。

だが、彼は耐えた。耐えて耐えて、耐え続け体を鍛え、牙を磨き続けた。いつか弟と再会する。その事だけを願って。

だが、その願いは果たされたものの……心無い者の悪意によってそれは悲劇に終わってしまった。だから、彼はこの日だけはよほどのことがない限り休む事を団員達に伝えていた。

忘れない為に。

「……昌弘。お前と再会して、もう二年が過ぎるのか……早いもんだよな」

昭弘は鉄華団本部の基地内の片隅に建てられた慰霊碑へとやって来ていた。あの戦いで失われた戦友達を弔う為に建てられた物である。

イサリビで花火を放つ事であの場でも弔いは行ったものの、団員達の願いによって建てられた。昭弘自身も石材の加工に関わって出来た物である為その思い入れは深い。

元来、弔いとは死した者の為に行うものであると同時に残された者が心の整理を行う為の行為である。そうした祈りを行える場所はあった方が良いと話し合い、建築に関して習い始めていた団員達がそれならばその練習として自分たちで作り上げようと決定して作り上げた産物だ。

どうやら少し前に誰か来ていたようであり、ほんの少しだけ土埃がついている程度で慰霊碑はキレイなものだった。昭弘は桜農園から分けて貰った白いカーネーションを慰霊碑の前に置き、目を瞑って弟へ祈った。

「……昌弘、聞いてくれ。デルマとアストンが、俺達の苗字を名乗りたいって言ってくれたんだ……俺の弟にしてくれ、ってさ」

白いカーネーションの花弁が風に靡く。火星の乾いた風が寂しい音を立てた。

「俺は、お前を守れなかった……だが、だからこそ俺を兄と慕ってくれるアイツらや、仲間たちに同じ思いをさせたくないんだ……！だから……」

許してくれと、そう言いそうになった言葉を昭弘は飲み込んだ。それを言ってしまえば自分の何かが折れてしまうと、そう感じたからだ。

「俺は、俺達は『お前達』を忘れちゃいない。だが、前に進むには後ろばかり見てるわけにはいかねぇんだ。だからここには皆忙しくてあまり来れないけど、それは勘弁してくれよ」

また来るよ、と昭弘は昌弘だけでなく、慰霊碑に弔われた団員達全員にそう言ってその場を去った。

白いカーネーションの花言葉は――

「あ、昭弘。今日は休み……あ、そうか。慰霊碑に行ってたんだ」
「ああ。俺なりのケジメというか、区切りだからな。後ろばっかりは見てられてねぇ。だが、今日だけは別だ……」
そう言って昭弘は上着を脱いで筋トレ用の機材に腰掛けた。先にトレーニングルームで体を鍛えていたチャドがそれを見てため息を吐いた。
「うーん……やっぱ俺じゃ昭弘程の筋肉はつかなそうだなぁ。どうも体質的に細くなっちゃって……」
「そうか？使う筋肉はちゃんと鍛えてるんだから俺はいいと思うぜ」

そんな他愛のない話をしながらでも、二人は慣れた動きで筋トレを続行していた。
昭弘が一年で唯一確実に休むと決めているこの日は、慰霊碑に行った後は何も考えず愚直に体を鍛えると昭弘は決めていた。
普段は弱音を吐かない彼が、唯一それを吐く日が今日だった。そして、思いの丈を弟にぶち撒けた後は原点に振り返る為にも徹底的に体を虐めるのである。
二度と目の前で大切な誰かを失う事がないように。

クーデリアさんの悩み

クーデリア・藍那・バーンスタインは悩んでいる。自身の思いについて。

火星に帰ってきてからはハーフメタル事業を切り盛りする日々が続いており、忙しくも充実した日々を送っていた。だが、それはそれとして彼女にも悩みがあった。

三日月・オーガス、そしてアトラ・ミクスタ……いや今ではアトラ・オーガスの夫婦についてである。

この二人のことを、クーデリアは家族として思っていた。二人のことが大事であるし、二人とも大切な存在であるとも思っている。

しかしアトラが三日月を押し倒した事で、この関係にも変化が訪れざるを得なかった。

（……うう、アトラさん、ズルい。ズルいですよぉ……）

アトラが暁を産んで、クーデリアは自分の思いに蓋をしようとした事があった。まあ普通だったらそれで良いのだろう。誰かを選ぶということは誰かを選ばないと言うことでもあるのだから。

しかし、当のアトラがそれに見通して待ったをかけたのである。「三日月と、暁と、クーデリアさんと、皆で幸せになりませんか?」と。

彼女に悪意はない。純粋な善意である。しかしながらオルガと三日月に助け出される前までの、幼少期の彼女の出身は火星の場末の娼館である。その辺りの倫理観に関してははっきり言って『普通』とはかけ離れていた。

愛した人が自分以外の女性を愛したとしても、自分も認めた人であるなら全く不満など無いのが彼女にとっての自然なあり方であった。ある意味、この火星の地に馴染み過ぎているとも言える。

が、しかし。人並みの倫理観を教わり持っているクーデリアからすればそれは非常に悩ましい事であった。

確かにクーデリアは三日月を愛していると今では自覚していた。だが同様にアトラの事も大切な存在であると思っているのである。

もしも自分があの二人の間に割り入ったとして、本当に皆幸せになれるのだろうか?

当人同士で納得していてもあの二人の子供である暁が物心ついたときにどう思うか。

不安で不安で仕方がなかったのである。
その為クーデリアはその選択を保留してもらっていた。考える時間をください、と。
休暇で桜農園に手伝いに来ている今も、いや仕事に打ち込んでいない今だからこそ彼女は一人悩んでいた。

「……何をそんなに悩んでるんだい？折角の綺麗な顔が台無しだよ」
「さ、桜さん。すいません。折角お邪魔させて頂いてるのに」
「別にいいよ。お嬢ちゃんはよく手伝ってくれてるさ。でも心ここにあらずって状態でずっといると流石に声もかけたくなるってもんさ」
「……その、実はアトラさんに……内密にしてほしいことなんですが……」

クーデリアは桜に現状を打ち明けた。あの二人に子供が出来て自分は身を引こうとした事。今でも三日月の事は好きであるが好きであるからこそ自分は涙を飲むべきだと思った事。しかしながらそれをアトラに見抜かれて『皆で幸せになれないか』と言われた事。
少しづつ、ぽつりぽつりと打ち明けて行くにつれてクーデリアの声が掠れていった。
それを聞き逃さないように桜はクーデリアの事を見つめながら静かに聞いている。

「……そうかい。あの子に随分と好かれたんだねお嬢ちゃん。しかし三日月か……働き者で努力家だけど、どうにも血の匂いが抜けないアイツが、いつの間にかアトラだけじゃなくお嬢ちゃんみたいない女にも好かれてるとは。隅に置けないもんだねぇ」
「すいません。こんな話急にしてしまって……でも、どうすればいいか分からないんです」
「そうねぇ。前提としてだけど、あんた暁のことはどう思ってる？」
「……正直、羨ましいです。でも、それはそれとしてあの子は守らなきゃならない未来だと、そう感じてます」

火星に住む者として、鉄華団と親しい存在として、何よりアトラと三日月の子供としてクーデリアは暁の事を内心複雑ながらも祝福していた。あの子が産まれてから、鉄華団も何かいい方向に舵を変えたように思える。
実際クーデリアも暁と会う事自体は楽しみにしており、日に日に重くなる暁を胸に抱く事は自身の行っている事業の重大さを再確認させていた。この子の未来も私の肩に掛かっているのだと。
だが、だからこそつい浮かんでしまうのだ。羨ましいと思ってしまう考えが。

「なら平気そうだね。羨ましいならお嬢ちゃんも三日月に思いを告げればいいじゃないか。奥さんの許可も貰ってるんだから、後はお嬢ちゃんと三日月次第だよ」
「え、あ、桜さん!?」
「私達火星の庶民からすれば、どっちかが裕福なら別に珍しい事でも何でもないさ重婚なんて。それでもアトラの感性はちょっと変わってると思うけど、『ちょっと変わってる』程度の話なのさ」
「そうなん、ですか?」
「ちゃんと家族を養える事が前提の話だけどね。三日月なら……まあ大丈夫。アレで結構、器は大きい所がある。あの子なら、お嬢ちゃんの事も受け入れてくれるだろうさ。だから、お嬢ちゃんが後悔してもいいと思う選択をなさい」
「いいかい……言いたいことがあっても、伝えたい思いがあっても、その人が居なくなってからじゃ遅いんだよ」

そう言って、桜は農作業の続きへと戻っていった。その言葉に、クーデリアはハッとさせられた。三日月は確かに強い人だ。それでも、戦場に出るのなら死んでしまう事だって無い訳がないのだ。

そう思い至って、何故アトラが三日月の事を押し倒したのかクーデリアは理解した。『三日月が何処かへ消えてしまう事が無いように』『三日月が帰りたいと思う居場所を作る為に』アトラは茨の道を選んだのだと。

……そこまで覚悟を決めた彼女が、同じ男を慕っていながら諦めようとした私に対して『諦めるな』と言っているのだということを。

そう思い至ったクーデリアは……悩みに悩んだ末に、その手を掴む事を選択した。アトラと暁と一緒に、三日月の、愛する人の帰りたいと思う居場所になろうと、クーデリアは決意したのであった。

……そうして、その選択がまた別の騒動を引き起こす種となる訳だが、それはまた別の話である。

二代目流星号「一足先に第二の生を送るわオレ」グシオン君「戦場だけが職場じゃねーさ」バルバトス「俺も長い事電源扱いされとったなぁ……」

アトラがトウモロコシ粉で作ったスコーンに、この前三日月が見つけてきたアガベで作ったシロップを掛け、シノはそれに齧り付いた。

優しくも強い甘みがシノの口の中に広がり、トウモロコシで出来たスコーンの香ばしい香りが食欲をそそる。あっという間にスコーンを一個平らげたシノは、シロップの味の感想を聞かせてほしいとそれらを持って来た三日月に対してそれを答えた。

「このシロップすっげー甘いなぁ……なのになんつーか、優しい味わいだ。雑味が無いっていうの？こんな洒落たおやつ、テイワズで振る舞われたカンノーリ以来だ。いやぁ美味かった！まさか火星でこんなの食べれるとは思ってなかったぜ」

「だよね。ほんとはシロップだけ持ってきて、なんか飲み物にでも入れようかなって思ってたんだけど、アトラがこの前のお礼に皆にって持たせてくれたんだ」

「ほんと、良い嫁さん貰ったよなぁ三日月は……しっかし、こんなお上品な甘いもんが火星に自生してたんだな。こんな荒れた土地なのに、よく生き残ってたモンだぜ」

火星に自生している植物は、テラフォーミングが盛んに行われていた厄祭戦以前の時代に移植された物がほとんどである。厄祭戦が始まってから殆どの圏外圏が放置された際に火星もその例に漏れずほったらかしにされた結果、中途半端な状態でテラフォーミング計画的自体が凍結されてしまい、移植された植物は疎らにある所にはある程度にしか残されていないのが現状である。

そんな中でもよく見かけた植物が、まさかここまで有用そうな植物だとは思っても居なかったシノは、アガベシロップを入れた瓶を不思議そうに手にとって眺めた。

「んで、上手く育ちそうなのか?これ」

「うん。流石に試しにシロップにしたのは自生してたのだけど、何というか……元々火星の気候に合ってた植物だったみたい。育ち自体はちょっと遅いけど、問題なく育ちそう」

「そうか。それなら切り拓いた土地も無駄にならなそうで何よりだわ。でもまさか二代目流星号が、あんな形で再利用されるなんてなぁ」

本来のアガベ――リュウゼツランは収穫まで数年単位が掛かる非常に育ちの遅い植物である。そのため三日月は他の作物と比べてちょっと生育が遅い程度で済んでいる現状に疑問を抱いていた。『図鑑の物よりもあまりに育ちが良すぎる』と。

実は、かつてテキーラの原料であるアガベの不足を解消する為に厄祭戦以前の企業が品種改良と遺伝子操作を施した産物の生き残りが火星のそれであるのだが……それを知る者は今や誰も居ない。最近作物について学んでいる三日月は不思議に思うものの、育ちがいいならそれはそれでいいかと考えて独自に自分のタブレット端末へとその生態を書き記している。資料のものとは別種と考えたためである。

一応似た別の植物の可能性を考えて毒等が無いか調べてもらったが、成分自体はそう変わらない。三日月はそれにもかかわらずあまりにも違いすぎる生育の速度に首を傾げたものの、食品に加工する事には全く問題無かった為気にしない事にした。そういう割り切りも火星で生きるには必要なものだ。三日月自身、何回出処がわからない食べ物や怪しい食品に手を出したか思い出せない程である。それに比べたらかわいい物だ。

今シノが食べているアガベシロップは集めてきたアガベの中であまり生育のよろしくない物を纏めて窯で蒸して絞った物であるが、それでもこの甘さだ。この速さで育つ

のであればいっそ火星特産の甘味料として流通させるのもありかもしれない。あまり商売事には詳しくない三日月でも、その価値を感じさせるに十分な代物であった。

生育の良い物に関しては今植え替えて育てている真っ最中だ。鉄華団名義で、まだ拓いて無かった桜農園の隣の土地を切り拓いて新しく畑を作ったのである。大きな岩や石の除去には阿頼耶識搭載の鉄華団のＭＳが使われ、驚くべき速さで土地の開拓は行われた。

確かにＭＳは兵器であるが、人型の機械であるのだからこういう活用法もアリなのだ。かつてバルバトスが使っていたチェーンソー内蔵型のレンチメイス、それと一緒のコンテナに入っていたＭＳサイズのクワやら鋤やらスコップやら、一応持って帰ってきたものの倉庫の肥やしになりかけていたそれらをフル活用した結果である。

当時は何故こんなものが入っていたのか理解できなかったが、本来はこういった作業の為に使うＭＳサイズの工具箱だったのだろう。アレは。三日月は、それらも当時は武器としてしか見てなかった訳だがそういう事にこれら工具類を使わなくて良かったと今は思っていた。

そして、そういった作業を行う為のＭＳとして作業向けのランドマン・ロディと共に２年前の戦いで破損して戦闘をするには心もとない動きしか出来なくなった二代目流

星号ことグレイズ改二のフレームに最低限の金属板や、ジャンク品のパーツを切り貼りした作業用グレイズが導入された。このグレイズは今後も鉄華団の作業用ＭＳとして活用される予定だ。

「戦えないだけで最低限動けはするからって修理して、作業用にしちまうなんて俺思ってなかったわ。しかも、なんでアレまた阿頼耶識つけられてんだ……？グレイズとはかみ合わせ悪かったんじゃ」

「あのお医者さんが、その辺詳しいらしくてさ。その証明にって試しに阿頼耶識組み込んだ上で調整したんだって。出力七割に抑えられてたから動きは鈍かったけど凄くクリアな操作感でさ。びっくりしたよ。あんなに負荷が少ない阿頼耶識初めてだったから」

「……今度、オレの三代目流星号の阿頼耶識の調整も出来るか聞いてみようかねー……でもなぁ。なんつーか、ちょっと変わってるから俺も苦手なんだよなぁあの人」

「……わかる」

「ああ、三日月もそうか。悪い人じゃねーんだけどなぁメネリクさんって……こう、俺達阿頼耶識使いに対する目線がねっとりしてるっつーか……悪いモンじゃねーんだけど……ま、それはともかくだ。これで、新しく入ってきた年少組にも仕事が出来たな。タ

カキ達より年下の奴を戦場に出す訳にもいかんし、これからはこういう仕事も無いと駄目だよな」

そう言うとシノは二個目のスコーンを半分に割って、口の中に放り込んだ。

畑を手入れする人手に関しては、海賊たちを討伐した後に鉄華団で保護したヒューマンデブリの少年兵達にその手入れの仕方を教えながら行っているのが現状である。

帰れる場所がある幸運な者も中にはいた為、そういった者は送り届けたが大体は帰る場所もない者達が多く、自分の意志ではなかったものの海賊行為を行っていた為に働き口を見つけることも困難な彼らを鉄華団は受け入れていたのであった。

そういった彼らの働き口を増やす為にも、いずれはこれらを親株にして増やしていく事を三日月は計画し、オルガや団員達に話していた。

いずれはそうして増やしたアガベを使ってシロップや酒を自分たちで売る事でお金を稼げれば万々歳だ。うまく行ったら桜農園にも話を持ちかける予定である。

いくらトウモロコシを植えた所で安く買い叩かれるのが限界ならば、自分たちでしか取り扱ってない物を新しく作って売るしかない。それが三日月が出した結論であり、その為に三日月は仕事の合間や暁を世話する傍らに植物図鑑や書物のデータの入ったタ

ブレットで勉強を続けていたのである。そうした努力の末に、掴んだ希望の種が火星に自生するアガベであった訳である。

　かつて壊す事しか出来ない事に苛立ちを覚えていた少年が今や、そういったかつての自分たちのような立場のものたちに生きるための術を与える側に立っている。

　三日月は、自分でも気が付かない内に無意識で憧れていた道へと進んでいたのであった。

「しっかし皆すげーよ。昭弘は最近建築について本格的に勉強して最近だと図面まで引いてるし、ユージンは会計役と副団長としての仕事熟してるし、チャドは俺じゃわっかんねー書類仕事バリバリやってて、ダンテの奴に至っては新入りの教官役が板についてきた。極めつけに三日月はこんな美味いモン作って、新しい仕事も作ってる。皆、思ったよりもしっかり将来やりてー事があったんだなって、なんつーかホッとしちまったよオレ」

　そう言って、シノは手にしていたアガベシロップの入った瓶をまだスコーンの入っているバスケットかごの中にいれた。

「ごちそうさん。酒にしたらどうなるかはわっかんねーけどよ、こんだけ美味いんだっ

たら絶対売れるって！時間がある時に畑仕事俺も手伝うから、もし人手がいるなら遠慮なく声かけてくれ。んじゃ、オレはこれから新入り達と一緒に訓練するからそろそろ行くわ。またなー！」

「うん、またねシノ。俺も他のみんなにコレ渡しに回ってくるよ」

そう言って三日月は格納庫から離れ、シノは基地中の敷地へと出て行った。

今日の教練の内容はＭＳに乗り込んで模擬戦である。

三日月は現在バルバトスの調整が終わっていないので参加出来ない。その為、その合間に蒸したアガベを絞ってシロップを作ったり、酒にする為の仕込みを行っていた。尚、蒸留に使用する設備はメネリク医師が持ち込んだ機材を流用する予定である。本来は製薬用に持ち込んだそうだが、予想よりも使用頻度が少なかったらしくメネリク自身も試し程度なら貸すと苦笑いながらもそれを容認しているそうだ。

まだまだ試作段階ではあるものの、これが成功したら本格的な造酒用の蒸留施設を作る事も視野に入れている。火星でも酒造はされてはいるが、基本的に飲まれているのは合成アルコールばかりで天然物は少ない。

これが戦い以外でも生きていける道の一つになればいいが。そう三日月は考えながらスコーンとアガベシロップの入ったかごを片手に鉄華団の基地内を歩いていった。

三日月達鉄華団がそんなひと時の平和を過ごしていた頃、歳星に停泊中の船の中に一際目立つ成金趣味な金色の船が一隻。

その名前は『黄金のジャスレイ号』。ネーミングセンスの欠片も無い名前まで悪趣味なその船の持ち主、ジャスレイ・ドノミコルスは船の自室の中で悩んでいた。

支出と収入を計算し、ジャスレイは頭を抱える。明らかに利益が減りつつある。それもこれも名瀬が新しい地球圏への交易ルートを開拓したせいだ。それも、こちらのように薄暗くない真っ当な物をである。

ジャスレイが代表を務める商社『ＪＰＴトラスト』も地球圏への交易ルートを持っているが、それはジャスレイが元々地球圏の成金のマフィア出身であるからであり、真っ当な物とは言い難い。しかしそれでも貴重な地球圏への交易ルートであった為真っ当な商品もそうでない商品も売り買いが成立していた訳である。今までは。

しかしここに来て、名瀬がアーブラウとの真っ当な交易ルートを得てしまった。それも、ＭＳやＭＷのパーツを取引出来る程の図太い物をだ。

正規の取引であるが為にその値段も真っ当な価格である。流石にリアクターは売れ

ないがテイワズフレームは売れに売れて今やＭＳ部門はてんわやんわの大騒ぎである。何せ作れば作るだけ売れる好景気。この流れを持ち込んだ名瀬は今や次期後継者候補のＮｏ．１に躍り出ていた。

それ故に相変わらず荒稼ぎ出来るまともじゃない薬や禁制品は相変わらず売り捌けているものの、それ以外の品はそもそもこちらではなくあちらへと卸先が変わってしまい現在入荷の目処が立たないでいる。結果的にはテイワズの大儲けになるのは確かであるが、ジャスレイ達にとっては大損であった。

とはいえである。その無くなった真っ当な品分のスペースを真っ当ではない品に詰め替えて出荷する訳にも行かない事をジャスレイは商売人としてもテイワズに所属する者としても理解していた。今の配分が親父の怒りを買わない配分ギリギリだ。

何事も限度というものがある。それを理解せず安易にヤバイ品をばら撒いた者の末路は酷い。たとえ自分が事実上の組織のナンバー２であってもそれをやった時点で親父にケジメとして切られる。それは変わらないという事をジャスレイは理解していた。

気に食わないのは変わらないが、自身の得意とする商売でここまで正面から思いっきり頭カチ割られると流石のジャスレイも認めざるを得なかった。親父が名瀬を気に入っている理由が私情では無く実力を評価しているのだということを。

「……やってくれるな、オイ！圏外圏の通商だけに飽き足らずこっちまで持って行きや

がるとは……」

あちらの交易ルートの方が上質なのは間違いない。それは事実である。これまで通りにそれを行っていても無理なのは明白だ。

そう考えたジャスレイは自身の地球との交易の規模自体を縮小する事に決めた。そもそも持ち込む物も無いのだからそれで暫くは問題ないだろう。

だが、余った労働者をどうするか。首を切るのは簡単だが、それではこちらにケチがつく。テイワズは圏外圏の企業であると同時にマフィアである。ジャスレイの出身である地球圏のマフィアともまた違った思想と理念を持つテイワズは普通のマフィア以上に面子と礼儀に厳しい。

更に言えば地球圏のマフィア出身のジャスレイにはあまり理解しきれないが、圏外圏の人間は基本的に味方とした者には情が深いのである。

その為、安易に急に労働者を路頭に迷わせれば非情に過ぎると他の幹部からの追求は逃れられないのが目に見えていた。その為彼らに新たな仕事を与えなければならなかったのである。

だが、急に今まで大人数を使っていた交易の人員を当てる仕事を探そうにも無理があると言うものであった。多少は別の仕事に当てられる人材も居たが、まだまだ仕事にあ

ぶれた人間は居るのである。
「あークソッタレが！名瀬の野郎また俺達の区分奪いやがって!!……はぁ、いかんいかん。こんな苛ついた頭で何考えても上手くはいかんというのに……ああ、やってられねぇよ。今日はもう酒でも飲んで寝ちまうか」

そう言って自室の酒棚から酒精の強い酒とショットグラスを取り出した時、急に備え付けの通信端末から着信音が鳴り響いた。
その連絡元が自身の舎弟である事を確認するとジャスレイはそれを繋げ、怒鳴った。
「おい！今俺は機嫌が悪いって分からねぇてのか!?ああっ!?つまらねぇ用事だったら承知しねぇぞ!!」
『す、すいやせんアニキ!!ですが、代表からの伝言でございやして……』
「……何？親父が……？なんて言ってたんだ？」
『それが……明日の朝に、代表に会いに来いとの事でして』
「はぁー……分かった。確かに重要な連絡だ。怒鳴って悪かったな」
『い、いえ。それでは失礼しやす』
舎弟がそう言うとジャスレイは通信を切った。やけ酒するつもりだったがその気は失せていた。何故なら明日の朝、圏外圏で一番恐ろしい男に会うのだから。

（親父……一体急に何のつもりだ？）

酒瓶とショットグラスを棚に戻し、ジャスレイは今日は酒に頼らず早めに寝る事を決めた。

そうして翌日、ジャスレイは思わぬ褒美を貰い、上機嫌で『黄金のジャスレイ号』に乗り込んで手下と共に自ら火星へと向かっていた。

前々からマクマードに要求してきた火星に眠るハーフメタル鉱山の土地の利権を、ジャスレイは遂に手にする事が出来たのであった。

これによりダブついていた地球への交易の為の従業員を火星ハーフメタル採掘の作業に当てる事が出来、さらにこれから大きく広がっていくであろう火星のハーフメタル事業に一口噛める事が出来るとこれまでの悩みは全て吹き飛び、今まで以上の儲けが出せるかもしれないという希望まで見つかったのであった。

（今に見てろよ名瀬ェ……!!テメェなんざ、すぐに追い抜かしてやる！）

そんな風にこの状況を生み出した名瀬に対して恨み節を心の中で吐きながら、火星への道を進んでいった。

これが吉と出るか凶と出るかは、まだ誰一人としてわからなかった。

今は、まだ。

日曜洋画劇大戦、アーブラウ

テイワズは巨大な複合企業である。ＭＳなどの機械類を生産、整備を担当する【工房】や圏外圏の流通を担当し、最近ではアーブラウとテイワズの交易交渉も行っている【タービンズ】、地球や木星圏へ行き来する商船を持つ【ＪＰＴトラスト】等、それらは多岐にわたる。

圏外圏という非合法が平然と通じる場所で発展してきた組織であるが故にそれらは腕っ節の強さも当然のように持っている。だが、そんな彼らもテイワズ最強の部署に関しては口を揃えて同じ存在を口にする。

それらは戦闘そのものを商売にする部署であり、テイワズに所属する民間軍事会社であった。その名も、【エクスペンダブルズ】

自ら消耗品を名乗る、ベテランの傭兵集団だ。元ギャラルホルンや賞金稼ぎ、工作員疑惑のある者、海兵隊上がり等人種問わず腕と運がある者が生き残っている叩き上げである。ＭＳ等兵器の操縦だけではなく生身での戦闘、工作活動、ハッキングや人質の救助まで熟すプロの傭兵チーム。彼らのリーダーはテイワズ代表であるマクマードと旧知の仲であり、テイワズの中でも少し特殊な立ち位置にいた。テイワズ立ち上げから居

る最古参の組織の一つでもある。
基本的に金で雇われる傭兵である為、場合によってはヒットマンとして活動するメンバーも居るとか居ないとかいう噂もある。テイワズの暴力装置である。

そんな彼らは今、自分たちの拠点とする船ごと地球に居る。タービンズから持ちかけられたアーブラウの防衛隊にＭＳの操縦や戦闘、防衛の教練を行なうという内容の依頼を受けたからである。

アーブラウ側との交渉で『兵士として使えるよう徹底的に鍛えてくれ』と言われたエクスペンダブルズの行った事は単純であった。かつて地球で海兵隊をしていたというメンバー達による伝統的な『海兵隊式調練』を行なうというものである。
それが可能な面子がエクスペンダブルズには揃っていた事はアーブラウ側には実に嬉しい事であり、防衛隊に入隊した者達からすれば地獄の始まりであった。

「本日より貴官らへ訓練教官を行なう事となった【エクスペンダブルズ】所属のハート軍曹相当官である。まず初めに言っておこう。話し掛けられた時以外口を開くな。口でクソたれる前と後に〝サー〟と言え。分かったか。ウジ虫ども」

まず初めの自己紹介がこれである。無論、反発も出た。

しかしここで舐めた口を聞いた面々はエクスペンダブルズのメンバーによる徹底的な『修正』を喰らい、防衛隊全員には連帯責任の名目でおぞましいまでの扱きを喰らう羽目に合うこととなった。これにより民間の傭兵だからと侮る者は消え、上下関係の構築に成功したエクスペンダブルズはＭＳを扱うことになるというアーブラウ防衛隊の面々を兵士として調練し始めたのである。

ただ『ＭＳが使えるだけ』では駄目なのだ。ＭＳはあくまで巨大な歩兵である。それ故に運用するのであればその操縦者は兵士である必要がある。現状のアーブラウ防衛軍はヌル過ぎた。荒事は基本ギャラルホルンに任せていた関係上防衛隊もヌルくなるのはどうしょうもないことであったが、ギャラルホルンが信用できなくなりつつある今の情勢ではそうとも言えなくなりつつあり慌ててアーブラウも自勢力の防衛隊を作り直す事に専念していたのであった。

結果として防衛隊は何人か脱走者も出たものの訓練所に連れ戻され、その教練を受け切った者は皆非常に兵士として優秀な者たちへと育っていた。無論、ＭＳの操縦も問題ない水準まで鍛えられている。

その結果に満足したアーブラウ代表である蒔苗・東護ノ介は彼らを紹介してくれた鉄

華団の兄貴分であるタービンズを信用し、エイハブリアクターを除くＭＳの製造まで行えるテイワズに対して大きな商談を持ちかけた訳である。

しかし、この現状を危険視する者も当然いる。

（……二年も立ってないのにここまで練度が上がっているか……）

そうしたアーブラウの動きを危険視する者の為に極秘裏に動く者の一人である傭兵、ガラン・モッサは用意したセーフルームの中で下された指令を遂行する為に情報整理を行っていた。まずい状況が重なりつつあるからこそ、落ち着いて行動する為にも必要な行動であった。

最近、ギャラルホルンに対する不信感が募りつつあり、各経済区域が自己防衛のための戦力を備えつつある事からその勢いを削る為の妨害工作を行なうように指令を下されていた。

当初はＳＡＵとアーブラウを仲違いさせる事で紛争を勃発させて戦場をかき乱す事で両者の戦力を削っていく計画を練っていたがこれでは不可能に近くなった。

練度の差だけならともかく装備の差もある。ＳＡＵが相変わらず旧式フレームのＭＳを使っているのに対してアーブラウでは何処から仕入れてきたのか新造フレームの

ＭＳが導入されているのである。それもギャラルホルン系のフレームではなく、圏外圏の何処か産の良質な物をだ。これだけ差があれば現状でＳＡＵとアーブラウが戦ったとしてもアーブラウに軍配が上がるであろう。

ガランが無理であると判断した理由はそれだけではない。

元々の計画はこうだ。ＳＡＵとの共同訓練を行うという日程の日にアーブラウ代表の使う部屋へ爆弾でも仕込んでおき、ＳＡＵの工作の跡のようなものを残しておく。そこに一人潜らせている工作員をＭＳへ乗せ、一発不幸な弾を撃たせる事で紛争へ一気に持っていくという計画だ。

だがこのプランは白紙となった。要人の警備に何人かその筋のプロと思われる者が混ざっていたからだ。特にあの、鋭い目つきのスキンヘッドの男はまずい。民間人に紛れて下見へ行った際に特に怪しい行動を取った訳ではないのにも関わらずこちらに気がついているようであった。殺意や敵意に敏感なガランだからこそ気がつけた僅かな警戒。それによって今回の仕事に対するガランの想定する危険性は跳ね上がった。

それに加えて忍ばせていた筈の工作員との連絡は途絶えていた。おそらく感づかれて始末されたか、監禁されているのであろう。

（……これは無理だな。アーブラウへの破壊工作は現時点をもって破棄。現状を彼に伝

える必要があるが、まずはここから脱出しなければならんな）

そこまで考えを纏めた後の行動は早かった。アーブラウの近くに設置していたセーフルームの荷物を引き払い、バックストーリーとして用意していた『戦場での戦利品を売りに来た傭兵』としての商談を終わらせた後、所属している傭兵団の所有する航空機に乗って彼はアーブラウを去った。

そうして伝わったアーブラウの現状。想定以上に戦力を蓄えつつあるアーブラウに彼の本当の雇い主は内心頭を抱えた。とはいえ自身が持つ手駒でも優秀なガランが無理と判断した以上、下手に突いて藪蛇を出す訳にもいかない。アーブラウ以外の標的もあるのだからそちらを優先するようにガランへと返信を下した後、その主人であり友人であるラスタル・エリオンはアーブラウへの警戒度を更に高めた。

（……全く、こんな活動に慣れた自分が嫌になるな……本当なら早く後釜を見つけて、趣味の牧場経営に専念したい物なのだが……）

生憎そうなるのは随分先となるであろう事は、ラスタル自身が良く分かっていた。
現在、セブンスターズはイシュー家がカルタ・イシューの死により欠け、ボードウィン家は後継者であったガエリオ・ボードウィンが二年前に戦死し、クジャン家は大人物であった先代が亡くなりと、大変よろしくない状況が続いていた。このまま自分も居なくなれば、それこそギャラルホルンもいよいよ耐えきれなくなる時が来るだろう。それを望まない以上は現役であり続けるしか無かった。

まだクジャン家の若君は家臣団含めて若すぎる。ファリド家の『彼』は最近静かだが、あの静けさはただ座しているものではないと工作策謀に塗れたラスタル自身がよく知っていた。最近アレが連れている、直属の部下であるという仮面の男も気になる所だ。

このままでは夢の老後は夢のまま終わりそうだなと、そう思いながらラスタルは未来へと思いを馳せた。

長らく続いたバルバトスの調整が終わり、その慣らしとして軽く動かす予定の筈だった。

そう、筈だったのだが。バルバトスが置かれている整備室には何故か普段はいない筈の者が一人鉄華団のメカニック長であるおやっさんの横に立って話していた。普段は医務室に居るはずのメネリク・シバが。

「ってぇことは、アレか……？オレはあくまでハード面専門だからソフトの事は専門外なんだが、いままでの阿頼耶識は……」

「はい。自分も見させて貰いましたがやっぱ無かったですね。『補助脳構築用のナノマシン』とそのシステムが。本来なら体に定着しているナノマシンは十分なのに、なんで体に障害が出てるか疑問だったんですが気がついて良かったです……ですが、アレがないならあのセッティングは最適でしたよ。少なくとも、全力機動さえしなければ平気でしたから。貴方のせいではありません。少なくとも、これでこれ以上阿頼耶識で障害が出たりすることは無くなる筈です」

「専門家がそう言ってくれるならありがてぇがな……俺もこんな脚だからな。ボウズが

ああなった事には俺も責任感じててよぉ……って、ああ。来たか、ボウズ。悪いな、話し込んでて気が付かなかった」

おやっさんがそう言うと、メネリクも三日月に気がついてそちらを向いた。

「やあ三日月君。あの時の検診以来腕の調子はどうだい？実は、君にいいニュースがあってね……リハビリは必要だろうがその腕を、いやその目も前のように出来るかもしれない宛を見つけてきたんだ」

「……!?それ、本当なの？」

「私は患者には嘘はつかない主義なんでね。その鍵が、このガンダムフレームさ」

そう言って、メネリクは手の甲で座して鎮座しているバルバトスの装甲を軽く二回叩いた。

「バルバトスが……？」

「ああ。実は先日の調整の日にバルバトスのデータの解析を行ってね。もしかしたらと思ったがあって安心したよ。完全版の阿頼耶識のＯＳのバックアップを発見したんだ」

メネリクは説明を続ける。

ガンダムフレームは７２機しか実在しないとされている、一種の試作機群である。ある存在に対抗するために実戦投入されたものの、その本来の目的であるデータ収集のた

めにバックアップデータの保管はかなり頑丈かつ長期間保存可能な物が使われていたのである。

一度コックピットが交換され、当時のものでは無くなっていたが、そのデータベースの深層にはしっかりと劣化していない阿頼耶識のＯＳのデータも存在していた。グシオンも調べたが、あちらは度重なる改造によって物理的に記憶触媒が無くなっていた為、残る希望はバルバトスのみとなっていた。無論強固なセキュリティが敷かれていたが、ここにいるのは阿頼耶識の専門知識の継承者。そのコードに関してはアテがあった訳である。一から組むことはメネリクにも流石に出来ないが、バックアップさえあればそれを再インストールすることは彼には容易に可能であった。

「そうして見つけた完全版の阿頼耶識のＯＳを組み込んで、火星にある阿頼耶識の装置だと省略されてた外付けの副脳用のナノマシンホルダーを改めて組み込んだのが今のバルバトスだよ。まあ、見た目はルプスのままだけどね。早速だけど三日月君、一旦乗ってみてくれると助かるよ」

「えっと、よく分からないんだけど、とりあえずバルバトスに乗れば、治るかもって事なの？」

「ああ、一旦ちゃんとしたＯＳが起動すれば、君の体の中で悪さしているナノマシンも再起動されて肉体に過度な干渉をする事は無くなる。結局はナノマシン側の疑似神経伝

達と本来の生身の神経の信号が混線していることで起きているのが今の腕が動かなかったり目が見えなかったりする現象の原因だから、それさえ解消出来ればあとはリハビリでなんとかなる筈だ」

「……もしかしてあの作業用グレイズにも、同じ物を入れてたの？」

「おっとバレたか。あっちは皆で使う用で、多人数用で組んだＯＳだから今言った肉体側のナノマシンの再起動は起きてない。安全性は確認してあるから安心してほしい」

あの作業用グレイズにも乗っていたし平気だろうと、若干メネリクに対して警戒心のある三日月は慣れている筈のバルバトスのコックピットに乗り込んだ。

見慣れない緑色の丸い球体の機械が椅子の後ろに組み込まれており、これが組み込んだという物であろうかと思いながら、阿頼耶識を接続すると……三日月は唐突に意識を失った。

（ここは……）

気がつけば、三日月はバルバトスに乗っていた。いや、正確には視点だけだ。自分の

意志では動かせないものの、バルバトスは自分ではない誰かの意思で動いている。

（今持ってる武器は……刀、か。あれ、もしかしてこれって）

それはあの時、アーブラウであのデカブツを切った時に激痛と共にバルバトスから教えられた知識であった。まるで走馬灯のように、三日月はかつてバルバトスに乗っていた誰かの戦闘記録をバルバトスに乗っている感覚で教えられていた。

（あの時は必死過ぎて覚えきれなかったけど、こうやって動かすのか……）

本来ならば質量兵器による力任せで壊すことが関の山である、ナノラミネートアーマーが施されたＭＳやＭＷのような何かや巨大な兵器を冗談のようにサクサクと切り捨てていくその姿を見て、三日月はそれをどうやって行うのか覚えていった。

そしてその後、刀だけではなく他の様々な武器を使ってそれらの敵と戦う姿を鑑賞させられた。

バルバトスすら小さく見えるほど、巨大な機械の怪物と戦う光景。同じガンダムフレームと戦う光景。それら全てがバルバトスが戦っていた。

（でも、コレを俺に見せてお前は何がしたいんだ?バルバトス）

この鋼の悪魔は、妙に自分のことを気遣うような面を見せることが多々あった。そしてそれを破ると大体は、洒落にならない代償が降ってくる。まるで望んではいないが、仕方ないと言わんがばかりに。

そうして、バルバトスの持つ戦闘記録をすべて見終わると同時に、三日月は意識を取り戻した。

「ボウズ、おいボウズ!!返事をしてくれ!!嫁さんと小さい息子居るのにこんな事でくたばるんじゃねーぞ!?」

「三日月君、何があった三日月君!?」

目を覚ますと心配そうにコックピットを叩く二人が見えて、三日月は意識を失っていた事に気がついた。

『ごめん、ちょっと気を失ってた。何分ぐらい黙り込んでた?ちょっと離れてて。今一回外に出るから……』

バルバトスのスピーカー越しに、三日月はそう言ってバルバトスのコックピットを開いた。

そして、阿頼耶識を外すと……

「……あれ？目が、両方見えてる？って事は……」

右手を動かす。

少し反応は鈍いものの、ピクリともしなかった右手は確かに、動くようになっていた。

（……何はともあれ、これで暁とアトラを両手で抱きしめられる、か。あれが何だったのか気にはなるけど、返してくれてありがとう。バルバトス）

見当違いと思いつつもバルバトスに感謝をして、三日月はバルバトスのコックピットから出ていった。

鋼の悪魔は何も答えない。だが、それは確かに少年に対して何かを託した。

『天使』との戦いの術を、生き残る為に後続の者へと託したい。

そんな誰かの思いは、数百年越しに結実したのだった。

やったね暁！ママが増えるよ!!（）

三日月の右手と右目の障害からの回復はすぐさま鉄華団全体に広がった。阿頼耶識に繋げれば動くものの日常生活には支障が出て不便であった事をよく知っていた団員達は三日月の回復に歓喜の声を上げた。特に暇な時は三日月と一緒によく暁の面倒をみていたシノやダンテ、三日月の弟子であり直属の部下となりつつあるハッシュは反応の仕方はそれぞれであるが三日月が暁の事を抱っこ出来るようになることを我が事のように喜んだ。

その吉報を聞いたアトラは慌てて三日月の元に暁を抱えて駆けつけ、阿頼耶識に繋げていないのに自由に両手を動かしている三日月を見て喜びのあまり泣き出してしまった。それに釣られて暁まで泣き出してしまった為に二人を泣きやませる為に三日月が二人を両手で優しく抱きしめて落ち着かせた。そうしてアトラが落ち着いた後、メネリクに対して何度も何度も頭を下げてお礼を言ったという。

その結果メネリクの団員からの信用が強まり、医務室に気兼ねなく向かう団員の数が増えたという。彼は数少ない新参の大人のメンバーであるが為に警戒していた者もいた為、この事に関してメネリクは『同じ団員として認められたようで嬉しかったよ。皆、

体調がよろしくなかったら気軽に医務室に来てね』と後に語った。

そうして騒ぎは広がっていき、それを聞きつけた団長ことオルガは今晩の食事はお祝いにする事を決め、調理担当のメンバーにそれを伝えるとそれに参加する為に今日出来る仕事を通常の三倍の速度で完遂仕切ってユージンを戦慄させたという。曰く、『嬉しい気持ちで動いてたらいつもより早く仕事が終わってしまった』との事。それを聞いたユージンは敵わないなぁと思いつつも、そのオルガの動きに秘書役としてついて行けている自身も他の団員からはそう思われていることに気がつけていなかった。

そうして希望参加であったものの基地の警備など外せない用事がある面子以外ほぼ全員が参加した三日月回復の祝いにはその吉報をアトラから聞いたクーデリアも駆けつけ、非常に和気藹々とした宴会となった。流石に急な話だったのでアルコールまでは解禁されなかったものの、古参のメンバーから新参のメンバーまで楽しく過ごし、三日月の右手と右目の回復を皆で祝った。参加できなかった面々にもいつもより豪華な食事が差し入れされ、その日は賑やかな祝いの日となった。

そうして宴会も終わり時刻は深夜となっていた頃、三日月はバルバトスの居る格納庫に居た。

「やっぱここにいたかミカ。団員達がまだ部屋に戻ってきてないって言うのに見当たらないって聞いたから、ここに来てるって分かったぞ」
「オルガ」

そう言ってオルガは三日月の隣に立った。火星の夜は冷える為、オルガはいつものスーツの上から鉄華団のジャケットを羽織っていた。

「しかし珍しいな。ミカが用事もないのに夜ふかしてるなんて。なんかあったのか?」
「うん……ちょっとね。あの後どうしようかって思った事があってさ。想定外だったから頭整理してたんだ」
「へぇ、何があったんだ?」
そう言って、オルガは持ち込んだ温かい缶コーヒーを三日月に一本手渡すと、タブを引いて一口飲んだ。
「クーデリアに私も奥さんにしてくれって、頼まれた」
「……っ!?ブブッ、ゲッホゲホッ!!」

そしてその衝撃的な一言に驚いたオルガは口にしたコーヒーを吹き出し、咳き込ん

だ。

「しかも、俺より先にアトラとは相談済みでアトラは承諾してたんだよね。本人から聞いたから、確かな事だった……うーん、良いのかな、コレ。俺、アトラと暁は養える自信あるけど、クーデリアもってなると……まだ足りないよね。クーデリアはお嬢様だし」

「ゲホッ……いやそこかよ!?　というかアトラは認めてたのか……ああそうだった。俺達に合う前までは娼館の手伝いでそこが出身だったから、年上のお姉さんが纏めて娶られて出て行くなんて事が無くはない環境だったもんな。奥さんが複数いる事に違和感なんて持たないよなそりゃ……」

　オルガは片手で取り出したハンカチで口元を拭った後、再び残ったコーヒーをぐびりと飲み干した。気付けに苦い味が欲しかった。

「……クーデリアが問題ねぇって言うなら問題ねぇんじゃ……ねぇか？経済的な所は。俺達はＭＳの整備費やら導入費にかなり消えてくからそれだけじゃやっていけねぇけど、アドモス商会はハーフメタル採掘の許可の契約料でかなり儲けてるしな……いや、

そもそも元々の財産もあるか。というよりよ、正直自転車操業からなんとか脱した俺らよりはっきり言ってしっかりしてるぞクーデリアは……まあ、今ごちゃごちゃ言ったが、結局はミカはどうしたいかだな」

「そっか。なら、俺はクーデリアをお嫁さんにするよ」

「ま、ミカならそうするよな。ほんと、色々器用なのに不器用だよな。生き方が」

「オルガには敵わないよ」

オルガ・イツカは知っている。今隣にいる自分の相棒がどれだけ懐に入れた相手に対して情の深い男かを。そっけないように見えて、大切な相手の為に必要な事ならどんな事でもやってみせるし、自分で出来る事なら受け入れてしまう。アトラを受け入れたのも、それがアトラにとって必要だと三日月が感じたからだろう。

不思議と三日月が必要と感じた事が、無駄になった事は無かった。だから、今回のクーデリアを受け入れた事に関しても、そう感じたからかもしれない。

三日月はそういう男だ。大切な相手の為なら自分が率先して泥を被りに行く。あの時、自分が引けなかった引き金を引いて自分たちを殺そうとしてきた大人を殺したあの時から、ずっとそうだった。それで辛くない訳がないだろうに。それでもその苦しみを抱えたまま歩き続けられる強さを彼は持っていた。だがそれはその分、自分自身を切り

詰めてしまう危うさも兼ね揃えていた事を俺は暁が産まれたあの日まで忘れかけていた。

ビスケットが死んで、多くの団員達が倒れてようやく掴んだ皆で火星で食っていけるだけの仕事と、鉄華団を大きくするチャンス。

全力で走り抜けようとしていたあの頃は、思い返せば無理をしていたんだと今なら分かる。もしもあのまま進んでいたら、きっと今隣で軽く微笑む三日月は居なかっただろう。無表情になりつつあった三日月は、昔のように戻りつつあった。

「そうか？俺は、お前ほど我慢強くねーぞ？」

「俺は、オルガ程皆を抱えられないし、皆を引っ張っていけない。オルガが団長だから、皆安心してついて行ける。俺達みたいなのを、家族だって言ってくれて受け入れてくれるのはオルガ位だもの」

生き方が不器用なのはお互い様だと、言外に三日月は言った。

三日月・オーガスは知っている。横に立つ自分の相棒がどれだけ懐が大きいかを。

お互いの身を守る為とはいえ、人殺しをした自分の手を握って引っ張って行ってくれたのは、後にも先にもオルガだけだ。

行く宛も場所もない自分に、一緒に行こうとオルガの隣という居場所を作ってくれた。そうして一緒に進んでいく内に、アトラを拾って、ＣＧＳに来て、皆と出会って……行く宛もない筈だった俺達に居場所をオルガは作った。その為に必死に走り続けて、オルガは今でも人一倍働き続けている。自分一人ならもっと器用に生きられる筈なのに、それもしないで。

そんなオルガだからこそ、皆こうして鉄華団の為に必死になっている。ようやく掴めたこの居場所を、もっといい場所にする為に。

「お互い昔から変わらねぇな、俺達」

「だよね。それでいいと思うんだ。俺達は」

「……だな。これからもよろしく頼むぜ、ミカ」

そう言ってオルガは三日月に対して拳を向けると、三日月はその拳に自分の拳を軽く当てた。いつもやっている、約束の証だ。

「改めて、よろしくな。俺は約束の場所に皆連れてくまで止まらず働き続けるからよ……」

「いやそれは休み入れた方がいいと思うよ。団員よりも働く時間長い現状は正直どうか

と思うし」
「!?だ、だが最近働くの楽しくてな……正直休んでも何するか悩んじまって……」
「……うーん、重症だなこりゃ。今度、暁とアトラと一緒にゆっくり過ごそう?」
「お、おう……」

すっかりワーカーホリックに染まってしまった親友をどうしてくれようかと苦笑いしながら、三日月は缶コーヒーを飲み終えたオルガを連れて格納庫から出ていった。
明日、クーデリアに告白を受け入れる事を伝えよう。そう考えながら。

幕間『ジャスレイと鉄華組』

ジャスレイが火星のハーフメタル鉱山を得て早一月が過ぎた。遠路遥々火星に付いたらすぐにアドモス商会へ許可証を申請し、土地の大きさに比例した料金を支払って採掘許可証を取得したジャスレイは連れてきた作業員達に鉱山の埋蔵量を調べさせ始め

た。

調べた結果、かなりの量が期待できるとの事で本腰を入れて暫く掘り続ける事を決めたジャスレイは作業員用の設備を建てる為に火星の建築業者を探し始めたがこれがどうもよろしくない。

火星の街から外れてる場所で建築作業を行える企業があまり無かったのである。火星の治安は悪いが、街は基本的にそれなりの秩序が（火星基準で）保たれている為その外に出ようとする企業は少ないのである。

これなら資材を自ら持ってきて自分たちで建てたほうがよかったと後悔するももう遅い。木星圏から遠く離れた火星まで来てしまった以上、一回戻ってそれらを取ってくるのは大幅なロスである為だ。可能ならそれは避けたかった。

そうしてどうしたものかと途方に暮れていると、一通のメールが黄金のジャスレイ号の情報端末に入った。

それは、アドモス商会からの建築業者紹介のお知らせであった。名前を『鉄華組』と言うそうだ。

プランを見てみると従業員の住む仮屋の組み立て。トイレや生活用水用のタンクの設置等、今必要としている物をそれなりの価格が掛かるもののたとえ街から遠く離れた場所でも工事を行うという魅力的なプランが書かれていたのである。

ジャスレイはそれを見て一瞬悩んだがすぐにその工事を受けることに決めた。どの道これ以外選択肢が無かった為である。

『鉄華組』の親会社の名は鉄華団。つまり名瀬の弟分が経営する会社であった為だ。

（まあ、アイツらは一度頭下げて菓子折り持ってきては居るしな。火星出身で名瀬の弟分とはいえ礼儀は弁えてる方だろ。仕事をちゃんとしてくれるならとやかく言う必要はねぇか。そんなことよりここで掘れるものの利益が優先だ……!!）

あまり顔を合わせては居ないが一度新入りとしての義務は果たしていた為か、名瀬の弟分とはいえところ構わず噛み付くのも面倒だと思ったジャスレイは鉄華組に工事をなるべく早くと注文して依頼した。資料から見るに建物としての質は少し豪華なプレハブ小屋といった所だそうだが、所詮は鉱山の為の施設。その程度でまったく問題無かった。

そうして更に数週間後、ＭＳが建築に使われていることには驚いたものの思ったより早くしっかりとした施設が出来上がった事にジャスレイは喜んだ。ＭＳが使われた事によりどんどん土地がきれいに整地され、必要な箱物の施設はほぼ整ったのである。あとは必要な設備と作業員を用意して採掘を開始するだけである。

「さあ、オメェら!ここからが本番よぉ!!掘って掘って掘りまくるぞ!!」
「「了解でさ、ジャスレイのアニキィ!!」」

こうして、ＪＰＴトラストのハーフメタル採掘事業は開始された。失った業績トップの座を奪い返す為に、ジャスレイとその部下たちは火星の地面を掘って掘って掘り続けた。

その時の鉄華組の仕事が好評であった事が周囲にも知れ渡り、鉄華組は火星の建設業者として名を上げていくのだが、それはまた別の話である。

王大人「ガンダム・フラウロス、死亡確認……」

最近、クリュセ自治区を中心として火星の治安が少しずつ改善されつつある。ハーフメタル採掘の利権の確保によってその規模の拡大が可能となった事で火星の貧民へ対する仕事が増え、給与の取得が増えた事によって鈍かった経済の巡りが循環するようになりつつある為だ。

そしてその循環を妨げる要因である海賊などの武装勢力は鉄華団によって狩られ、今ではそういった者達からはクリュセ一帯のアーブラウ自治区は危険地帯と認識されつつある。

そしてそれとは逆に、火星に住む者たちからはその治安の良さと景気の良さから他の場所から引っ越してくる者が出てくる程度にはその名声が広がりつつある。

人と金と仕事が集まる好循環が、クリュセで出来上がりつつあった。

（そんな頃だったな。俺が鉄華団の求人を見つけたのは）

治安が良くなりつつあっても火星は火星。確かに仕事は増えていたが自分のようなガキを雇ってくれる場所でまともな場所なんてそうそう無く、捨てられた残飯を拾ったり日雇いの劣悪な環境で行われる危険な採掘作業で食いつないでいた頃に、スラム街で一台のＭＷがやって来て自分達のような年頃の連中に向けてビラと一緒にちょっとした食料を配っていたのを見つけた。

「大人共に見つかる前に皆とっとと食っちまえよ?これよりもっと食いたいんなら、俺らの所に来るといいぞ!鍛錬は厳しいけど、腹が減る事は無くなるぜー」と言われ、自分よりも小さい男の子に渡された袋入りの携帯食にがっつきながら、俺やスラム街の孤児たちは目を光らせてそこへと向かっていった。今よりも少しはマシになれるかもしれないと、そう思って。

そしてその判断は大当たりだった。求人していたのは今火星で一番の出世頭とされている鉄華団であり、俺達みたいな連中が成り上がって会社を立ち上げた凄い場所だったんだ。

確かに入団して始まった訓練は本当に厳しかった。毎日毎日ヘトヘトになるまで走らされて、慣れてきたと思ったら銃弾こそ入ってないものの実銃やら必要な装備全部着

込んで走らされたり、まさか教えてくれるとは思ってなかった文字の勉強まであって、一日が終わると死ぬように眠る日々が続いてた。でも、不当に暴力を振るわれる事は無いし、毎日ちゃんとした食事が出て腹いっぱい食べる事が出来た。それなのに寮で寝泊まり出来て給料も出て、生まれて初めて貯金なんて事も出来た。

正直、なんでここまでしてくれるのかはじめは理解出来なかった。俺達みたいな連中なんて火星にはいくらでも居る。自分の事を自分で選べるだけヒューマンデブリよりはマシだが、火星の孤児がヒューマンデブリよりマシなのはそれ位だ。盗みでヘマした友達が捕まって殺されたり、見てくれが良い奴は大人達に誘拐されたり、栄養不足で夜の寒さに耐え切れず朝起きたら隣で寝てた奴が冷たくなってたなんて事が当然のように起きる。それが当たり前で、同じ孤児の仲間以外は誰も助けてくれないのが当たり前。

そんな現状をなんとかしようとした自分たちの兄貴分は、生活費を稼ぐ為に阿頼耶識の施術を受けて軍事会社に入ろうとしたが……施術は失敗。その軍事会社の人間に『産廃』としてスラム街に捨てられた。変わり果てた姿で、動くこともままならない状態になった事で皆に負担を掛けてる事を負い目に感じていたのだろう。次の日、彼は首を吊って死んだ。

そんな風に雑に扱われて雑に死ぬのが火星の孤児という存在だった。

なのにどうしてここまで良くしてくれるのか、裏があるのではないかと怖くなった。
そんな皆の不安を察してか、新兵の教練を担当してるダンテさんは教練の休憩中にこう言った。
「俺なんて元ヒューマンデブリだぜ？なのによ、ここにいる奴らは皆俺らみたいな奴らを一人の人間としてちゃんと扱ってくれてさ……鉄華団立ち上げた時に、オルガ……団長はデブリだった奴ら全員にその利権返しちまってよー」
「俺達もそう思ってた時期あるから、分かるんだ。お前ら、こんなまともに扱われて困惑してんだよな？　運が良かったな、ここは火星で多分一番俺達みてーな奴らを受け入れてくれる場所だ。ちゃんと真面目に働くなら、鉄華団はどんな奴でも大歓迎だ。頑張れよ、新人共!!」
その言葉と共に背中をバンバン叩かれたのは正直少し痛かったが、それ以上に心が暖かくなった。産まれて初めてだったからだ。こんなふうに自分のような奴をまともに扱ってくれる事は。
隙間風や寒さに震えながら夜を過ごす事は無くなった。空腹で倒れそうになる事も、理不尽に大人やヤク中に殺されたりする事ももう無い。
そんな日々が少し続いて、キツイ教練による扱きにも少し慣れてきたそんな頃に俺は悪夢に魘されるようになった。

兄貴分の、ビルスが首を吊って死んだあの日の悪夢にだ。気が緩んだせいかもしれない。毎晩毎晩、ビルスの虚ろな死に顔に魘される日々に俺は追い詰められていった。

俺は『産廃』じゃないと、さらに鍛錬にのめり込むようになった。不要だと言われて失いたくなかった。こんな風に俺達を受け入れてくれる居場所を。

ＭＳへの適性を認められた俺はすぐにその操縦者としての就任を希望した。操作を覚え、同期の奴相手にシミュレーターで勝てるようになった俺は早く戦場に出たいとほざいてた。今思えばなんで自分でもそう思ったのか分からないが、戦場で敵を倒せば自分は産廃じゃないと証明出来ると思っていた。ビルスでも無理だった事を出来るようになれば……と。

そしてそれは運悪く叶ってしまった。ハーフメタル採掘現場での警護依頼を受けていた時に海賊の襲撃を受けて、その時実機訓練中だった俺は緊急時だからとそのまま制止も無視して俺は初陣に挑んだ。

結果は散々な物だった。スラム街で何回か喧嘩はした事はあっても、本当の兵器を使った殺し合いをする事なんて初めてだったから同じようにＭＳを使う海賊相手に翻弄され続けて、あと一歩で殺される寸前まで追い込まれた。

三日月さんに助けられたのはそんな時だった。自分の機体のコックピットを潰そうとしていた海賊のＭＳを一撃で叩き潰して、他の敵を倒す為に一瞬で去っていった。

三日月さんの事は、その時の俺は知ってはいたがなんでここに居る人なのかも知らなかった。専用機のバルバトスが丁度鉄華団がテイワズの工廠で改修を受けていた時期に俺は入った為に、畑仕事をしていたり他の団員達と一緒に子供の面倒を見ていたり、タブレット端末を見ていたりと、戦いの場でのあの人を見る機会がなかった俺は、片手の動かないあの人の事を見て『産廃』なのだとすら思っていた。

とんだ思い違いだった。あの人はとんでもなく強い。自分が弄ばれた海賊を一人でどんどん殲滅していくその姿を見て、『鉄華団の鬼神』という名には何の偽りは無いのだと思い知らされた。

そうしてその戦いが終わり、初陣を終えて制止を無視した事をこっぴどく叱られた俺は自分が思い上がっていた事にとことん気が付かされた。

三日月さんは強い。でも強いだけじゃなかった。普段のあの行動は俺達みたいな奴等が命張らないでも食っていけるような場所を作る為に火星で育てられる儲けられそうな作物を必死に探して色々試していて、片手しか使えない不自由そうな体で畑仕事をしていたりタブレット端末を見ていたのはその為に必要な作物の育て方や植物の種類を見極める為の知識を得る為の勉強の為なんだと言う。そもそも片手と片目が使えなくなったのも、後ろにいる団長達を救う為に自分を顧みず阿頼耶識を限界まで稼働させ

て戦ったから。

それに対して俺はそんな立派な人の事を勝手に見下して、勝手に自分で自分を追い込んで自滅しそうになった。自分がそんなどうしようもない奴だと自覚した時、このままじゃ駄目だとそう悟った。

そうして勢いで迷惑掛けた人達に土下座する勢いで謝りに行った後、どうすればそんな風に強くなれるのか、その背中に憧れて……俺は三日月さんの後ろを追い掛けるようになった。

追い掛けて、追い掛け続けて、何時か俺も鉄華団の先輩達と肩を並べて働けるようになりたいと、そんな夢を俺はあの人のおかげで初めて持てたんだ。そうして自主的に三日月さんの舎弟のように振る舞いつづけて、早数ヶ月……

今では、正式に三日月さん直属の部下としてあの人の元で俺、ハッシュ・ミディは働いている。最も、あの人の元で働いていて一番俺に任される仕事というのは……

「うぇぇぇぇぇえ!!」

「はいはい暁、どうしたどうした?……あ、この匂いは……オムツ変えなきゃ」

三日月さんが不在の時にお子さんの、暁の子守りだったりする。
どうしてこうなったのかと言えば、三日月さんとアトラさん……三日月さんの奥さんが忙しい時は手の空いている団員で三日月さんが信用できる人に暁を預けていたらしい。しかしそこに三日月さん付きの部下となった俺が現れた事により、元々自主的にやっていた三日月さんの雑事や用事は俺が正式に対応する事になり、いつの間にか三日月さんが居ない時の暁第一預かり役となってしまっていたのであった。

「よーし、きれいになった……って逃げるな逃げるな！今新しいオムツ履かせてあげるからちょっとじってしてろ暁！」
「きゃっきゃっ」

他にも畑仕事の手伝いや桜農園の収穫の手伝いに駆り出されたり、操縦を覚えたMWに乗って火星の荒野から畑に植え替える為のアガベを集めさせられたりと想像していた仕事とは違う内容にこれでいいのかな?と困惑する部分は多々あるものの、多忙な時間を割いて模擬戦をして鍛えてくれたり、勉強で分からない所を聞くと知ってる所は教えてくれたりしてくれる三日月にそんな事は言える筈もなく、今日もハッシュは暁の世話に追われているのであった。

（まあ、三日月さんの一番大切な子供の大事を預かってる大事な仕事だって事は、自覚してるけどさ……）

「あううう」

「ってこらこらジャケット噛むなって！そろそろ昼飯の時間か……（食堂行って、暁に離乳食満足するまで食べさせたら粉ミルク飲ませて……）よし、ご飯食べに行こうか暁」

頭の中で今日の予定を思い返したハッシュは暁を抱っこして、食堂へと向かっていった。今日は昼の食事時間が終わるまで暁を預かる予定であり、その後は他の手の空いた団員と火星の荒野へＭＷで駆り出して作った畑に植え替えるためのアガベの群生地を探しに行く事となっていた。

そんな忙しくも穏やかな日々の中で、いつの間にか彼は悪夢を見なくなっていた事にハッシュはまだ気がついていない。

次にそれに気がつくのは、彼がビルスの事をトラウマでは無く、思い出として想えるようになった時であろう。そのためにはまだ少し、彼には時間が必要であった。

『妙な物を掘り当ててしまった』

その報をジャスレイが聞いたのは火星に来てハーフメタルの採掘を開始させ、一月程が経ったある日の事だった。その日はジャスレイは火星の採掘場を部下に任せ自身はテイワズで受け取った自身の商社の書類の処理を行っていたが、アリアドネ経由で火星から送られてきたその掘り当ててしまった物の画像に目を向けると一転して慌てた様子で現場の作業員に『触れるな触るなMSやエイハブリアクターを使った物をそれに近づけるなすぐそっちに向かう』と連絡を送り、採掘作業を中断させるように追加で指示して黄金のジャスレイ号を再び火星への航路に向かわせた。

（運が回ってきたと思ったらコレかよ!!ふざけるんじゃねぇ!!）

自身の持つ鉱山で見つかってしまった『厄介なブツ』を処理する方法を考えながら、可能な限り最短ルートでテイワズから火星へ降りたジャスレイは問題の解決の為の方法を探るために機械の知識がある部下をソレへと向かわせる事にした。

「ジャスレイのアニキ、そんなに慌てて火星に行かなきゃならねぇほどヤベェ物が出てきたのは分かりやしたが、一体何なんすか、アレ……」
「最悪、本当に最悪な俺の予想が当たってたならな……ありゃモビルアーマーだよ。厄祭戦の原因で、世界中が荒れちまった原因さ」
「は、はぁ……ですがアニキ、そんなヤベェモンでも兵器だったら動かすやつ居ねぇんじゃ動かねぇんじゃねぇでしょうか?ギャラルホルンに見つかったらヤベェとかそういう……」
「ちげぇよ馬鹿野郎!!ありゃな、勝手に動いて、勝手に考えて、誰にも言われずとも動く上に自力で自身を生産整備出来る最低最悪の殺戮兵器だ!!もし起動したら辺りの人間を問答無用でぶっ殺しに来やがるぞ!!」
「な、なんすかそれ!?正気の沙汰じゃない!?」
「ああそうだ。正気の沙汰であんな数の人間殺せるわけがねぇわな……もしもだ、もしも起動しちまったら……俺達が呼び覚ましちまったって事で落とし前が指じゃ済まねえ事になるのは確かだ。だから祈っとけ。対処できるまであれが動くことが無いって事をな……」

そう言ってジャスレイは遠く離れた場所から半身が埋もれているそれを眺めた。
よく見ればＭＳと思わしき機体の残骸がモビルアーマーの胴体部に張り付いて槍のようなものを深々と突き刺して居るのが見える。刺し違えたのだろうか分からんが、片腕が無く、上半身部以外がひしゃげて潰されていた。

（もし起動しそうな状態なら、なんとしてでも破壊するか全身を硬化材かなんかで丸々固めて動かんようにするとして……あれがもしもそのままなら動きそうに無いってんなら……そうだな。昔商売してたクジャン家への連絡先、まだ使えるか？）

かつて、ジャスレイは先代のクジャン家当主へと発掘品の禁止兵器に分類される兵器等を度々販売していた。その関係でＭＡに対する知識もそれなりにそれなりに得ていた訳である。
セブンスターズであるクジャン家だけにいい値段で買い取ってくれた上客であった事をジャスレイはよく覚えていた。倉に収めて封印処置を施す事でそういった物を世に出させないようにする為、圏外圏の組織と取引してまでそういった物を確保していたそうだ。
しかしその活動を行っていた先代当主が亡くなった事でその縁は途切れた。だがま

だ、クジャン家への連絡先は当然残っている。
（後を継いだドラ息子は調べた所どうも、先代当主と比べると人望だけはある暗君、ボンクラの類だそうだし、どうにか憧れてただろう先代のやってた活動をうまいこと伝えて美談に仕立ててやりゃ……コイツを高く買い取らせる事なんてのは可能か？……まあ、あくまで動かなかったら、だが……ま、そんな上手く行く筈ねぇわな。どう処理したもんかなぁ……）

だがそのまさかが起こった。
不幸中の幸いか、発掘されたモビルアーマーは搭載されたエイハブリアクターを損傷しており、連れてきた機械知識を持つメカニック曰く機体を動かす事もままならない発電量の予備電源以外は動きそうにもない状態であったそうだ。その為完全に掘り出した上でモビルアーマーをコンテナに詰め、黄金のジャスレイ号へなんとか乗せる事に成功したジャスレイは己の幸運はまだ尽きてはいない事を確信し、クジャン家へのアリアドネでの連絡をして商談を始めた。
現在の当主……イオク・クジャンと言うらしいその青年を上手い事乗せる事に成功したジャスレイは、自分にとっての災いの種であったモビルアーマーをその周囲に埋まっていたモビルアーマーの子機ごと多額で売りつける交渉に成功した。ジャスレイは外

面こそ取り繕ってはいたものの内心ガッツポーズで、今回の案件を処理しながら儲けになった事に自身を褒め称えた。

こうして、一時はどうなる事かと思ったものの蓋を開ければジャスレイにとっては全て上手く行く最高の結果に終わった訳であったのだ。

そう、この話がここまでで終わるのであれば。

『予備電源はまだ、生きている』

厄祭の再演

危うい事態であったが、運良くモビルアーマーを再起動させずにギャラルホルン、それもセブンスターズに引き渡す事に成功したジャスレイは脇目も振らずにとっとと地球から出て、黄金のジャスレイ号に帰ると自室に入り、思いっきり息を吐いた。

アレをコンテナに詰めて大型シャトルに乗せて、地球に降りてクジャン家の領地まで運んでいくというなんの罰なのかと言いたくなるような大仕事を終えてきたのである。はっきり言って帰ってくるまで生きた心地がしなかった。その存在を知っていればどれ程アレが危険物であるかなんて簡単に察しがつく。主電源が壊れているので動かないと分かっていたとしても、運んでる途中で何かの拍子で動き出したとしたらひとたまりも無い。

しかしここで危険だからと自分が行かない訳にも行かない。なにせ会う相手が相手だ。あくまでも持っていたコネはジャスレイ自身の物である為直接顔を出さない訳にもいかなかった。

（……だがっ!!その分たんまり代金ふんだくったぞコンチキショウ!!流石セブンスター

ズだけはある。たんまり金持ってやがるんだからよぉ……今回の一件でそれなりに顔つなぎも出来た。また先代と同じような商売が出来るならいいが……）

そんな皮算用をしながらも、ジャスレイは部下に命じて圏外圏へと船を向かわせた。普段ならば輸出した事で空いたスペースに輸入品などを詰めて行くが今回はやばいブツを運んだ後である。そんな悠長な事をするよりとっとと圏外圏へと雲隠れした方が良いという長年の経験から来る自身の勘に従った結果の行動であった。

（流石にセブンスターズなんていうモビルアーマーを倒した奴等の子孫なんだからアレの危険性についてはよく分かってるだろうし、渡したんだからもう問題は起こらねーだろ……はあ、疲れた……今日はもう寝ちまおう……）

どっと疲れが出てきたジャスレイは自室のベットに横になると、そのままぐっすり眠りについた。

この後、まさかと思っていた事が起きてしまう事を今のジャスレイはまだ知らない……

「クジャン公、受け取った例の遺物でありますが、どういたしますか?」
「うむ、父が行っていたように蔵にしまいこんでおけば良いだろう!同じ場所に纏めておいてくれ!!」
「かしこまりました。それでは失礼します」

イオク・クジャンはセブンスターズの七大家の1席であるクジャン家の現在の当主である。名君であった父が急に亡くなった事で当主となり、その際に色々と手助けをしてくれた事と自分に何かあれば頼るようにと父に言われたことから同じ七大家の当主であるラスタル・エリオンの派閥に所属しており、若いものの父の実績から来る人望と期待を家臣達から持たれている。

しかし同時に、あまりにも急に当主の座を受け取った為にちゃんとした当主としての教育を受け切っておらず、世間知らずの面が目立つ未熟な存在であった。

そんな彼が父が禁止兵器の類を集めて管理していた事など知る由もなく、そのような

取引をしていた事など初めは嘘だと思ったほどであった。
しかし、的外れな行動を取るものの基本的には善意で動くこの男は連絡をしてした相手が本気で困っているという空気を感じ取り、更に父がそれらを集めていたのは自身の管理下に置くことでそう言った禁止兵器を世に出さない為であるということを聞いた為、自身もそれを行わねばという意欲を出してしまい……感謝料としてその圏外圏の商人に対してクジャン家として恥ずかしくない額を渡し、彼はその禁止兵器であるという発掘品を受け取ったのであった。
そして、それを受け取った当初はどんなものかと気になっていたイオクもただの廃品の機械と見ると次第に興味を失い、父親が居なくなった後放置され続けているクジャン家の蔵へとしまいこんで、自身は所属する月外縁軌道統合艦隊アリアンロッドへと帰ってしまった。

それがどれ程危険な行為であるかも知りもしないで。

それが目覚めたのは地中から掘り起こされてすぐであった。しかし動力源のエイハブリアクターの接続部を破壊され、地中に埋れていた間に侵食した劣化により主電源を動かせなくなっていたそれは最優先命令の一つである人類抹殺を行えず掘り起こした人間になすがままにされるしか無かった。修復しようと子機を動かそうとしても予備電源ではそれ本体に近づかなければ

給電する事も困難であり、分厚い層をもつコンテナに収められたそれは動く事もままならなかった。

しかし、運ばれて行った先で転機が訪れた。火星から地球へと運び出されたそれはコンテナごと運び出され、大小様々な兵器や機械が収められた巨大な倉庫の中へと収納されると、その扉を閉められたのであった。

人一人居ないその巨大な倉庫の中に、子機をそれの隣に並べて置いた状態で。

そうなれば、予備電源であろうともそれは行動を可能とした。そもそもこの予備電源は本体が稼働出来なくなった場合に備え、本体を修復する為の子機に給電を行う為の電力を確保する為の物である。

そうして子機は動き出した。一機、また一機と給電がされたそれらは親機であるそれの修復の為に倉庫内の兵器や機械を漁り、分解しては使えるパーツを取り出して加工を施していく。

深々と突き刺さった槍のような弾丸を引き抜き、内部機構を治そうと子機が動くも今度は修復する為のパーツが足りなくなる。しかしそれを解決する為に必要な物もその弾丸に張り付いていた。大きさの関係で出力は本来のものよりも少し劣る物の、彼らにとって敵対者であるそれらの動力もまたエイハブリアクターである事は変わりない。

必要のない部分を削ぎ落とし、ツインエイハブリアクターの部分のみを親機に繋ぎ合わせ、子機がそれを溶接していく。

だがそれに搭載されたＡＩの自己判断はかつての敗北を理由に親機の修復をそれだけに留めず、敵対者を対処する為のプランを提案、それを実行した。

ここはクジャン家が管理するギャラルホルンにとっての禁止兵器が収められた巨大な蔵である。それ故に、対ＭＳ用に重大な効果を発揮する武装の類も大量に保管されていた。かつてそれを刺し貫き、敗北へと追いやったダインスレイヴなどもある。

故に主電源は回復したが、あえてそれを稼働させずにそれはこの潤沢な材料を活かし力を取り込む選択肢を選んだ。

今度こそ自身に下された最上位命令を果たす為に。自身と、それを支援するプルーマの生産と改造を行える限りし続けた。

そして、蔵の中からそれらを行う為のパーツを使い切ると同時にそれは主電源となった敵対者のものであったツインエイハブリアクターを稼働させ、頭部に搭載されたビーム兵器を使用し蔵の壁を破壊し、勢いよく浮遊し子機プルーマと共に飛び出していった。

かつて人類を滅亡寸前まで追い込んだ無人兵器、モビルアーマー『ハシュマル』……否、個体名『ハシュマル・フォールン』は敵対者であった悪魔の心臓……ガンダムフレームのツインエイハブリアクターとその武装すら取り込み、再び地球へと蘇った。

全ては自らの製造された意義を果たす為に。

ハシュマル・フォールンは産声を上げ、目についた人間たちをビーム兵器で焼き払っていく。そして、外に出て初めてハシュマルは自身が今何処に居るのか把握し、それによって目的地も切り替わった。

切り替わったその場所の名は海上拠点『ヴィーンゴールヴ』

今はギャラルホルンの地球本部となっているその場所へと、ハシュマルは帰還を果たす為に最上位命令を果たしながら、進軍を開始した。

俺は死んだ筈の人間だ。事実、戸籍上では既に死んだとして扱われ、父と妹によって空の棺を使った葬儀が行われてしまった後である。

しかし事実は違う。忘れもしない二年前のあの日、俺は病院のベットで目を覚ました。そして、俺を殺した筈の男と話をした。

親友だと信じていたその男に。裏切られたと感じて突っかかろうとしたが、半死人の俺にそのようなことが出来るはずも無く、振り上げようとした手は宙を舞った。

確かに自分を殺しかけた事に怒りを感じてもいた。しかし一番許せなかったのは、共通の友人であった筈の彼女……カルタ・イシューを利用し、その結果彼女は死に絶えた事。そして自分の部下であったアインを利用した事だった。

その元凶が自らであると言い、戦場でＭＳの剣を振り下ろしてきたのが……マクギリス・ファリドであった。

何故俺を殺していないのか俺は問いただした。そして奴はこう言った。

「……ここでなら、全てを話せる。アインについては残念であったが……私の目的を果

たす為に、『公的に』お前達には死んでもらう必要があった」
「ちょっと待て。公、的に？意味が分からない……まるで、彼女が、カルタが実際には死んでないような事を……っ!?」
「気が付いたか。ここは、ファリド家ではなく私が私的に所有している医療施設でね。お前のような、表向きには出来ない患者を収容している場所だ」
俺のベットの隣の場所に、誰かが眠らされている事に気が付いた。生命維持装置に繋がれ、体中チューブだらけの痛々しい姿であったが彼女は確かに呼吸し生きていた。
俺の操るキマリスの手の中で確かに、息を引き取った筈のカルタ・イシューが。
「死んだという診断をくだしたのは『私達』の息の掛かった医師でね。極秘裏に、ここで彼女を匿ったという訳だ」
「……どういうことか説明しろマクギリス!!なんでこんな事をした!!お前は、一体何を……」
そう言うと、マクギリスは『俺に目を向けた』
今まで一度も見た事もないような、感情の篭った目で。
「全てを話す。この話を聞いた上で、お前に判断してほしい」
そして俺は、マクギリスから想像を絶する『真実』を聞いた。そして、俺が下した選

択は……

仮面を被り、マクギリスと共に戦う選択肢を選んだ。

正直、まだ許せない部分もある。しかしそれ以上に、コイツを一人にしてはならないという情が湧いてしまった。

俺が隣に立とうとしなければ、コイツはたった一人で世界に喧嘩を売ろうとしていた大馬鹿者で、それでいて俺やカルタといった親しい人間を最後の最後で切り捨てる事ができなかったどうしようもない欲張りな奴だ。

加えて、俺が隣に立って戦う選択肢を選んだら、もしも自分が道を踏み外した時の事を話した上で自分を撃つ為の拳銃を渡してくるんだから溜まったもんじゃない。俺にだから頼めるって、お前は俺の事をなんだと思っているんだか。

そうしてガエリオ・ボードウィンは死に、今は仮面の男ヴィダールがここに立っている。

妹や父に背を向けてでも、こいつの隣でやらなければならないと思った事があった。セブンスターズの血を引く、俺だからこそ。

「ヴィダール、エリオン公の動向をどう見る？例の奴の配下と思わしき傭兵はどうやら

アーブラウには干渉できないと悟ったのだろう。今はアーブラウと同じように独自の戦力を備えようという動きが盛んなＳＡＵの方面に飛んだようだが……」

『おいおい、俺が諜報の類が苦手であるのはお前が一番良く知っているだろう？　だが、そうだな……ＳＡＵはアーブラウほど防衛部隊の構築が上手く行っていないからな。付け入るスキがあるとしたら……』

地球での勤務中に、マクギリスと共に執務室で現在の情勢について話し合っていると、けたたましいアラート音が鳴り響いた。緊急事態を知らせる為のアラートである。

それを聞くとマクギリスはすぐさま通信を繋げ部下に何事かを問いただした

「何が起こった！直ちに説明せよ！」

『じゅ、准将！緊急事態です!!謎の大型機動兵器とその大型機動兵器に付き従うＭＷのようなものが、突然エイハブリアクター反応と共にギャラルホルンの私有地から現れました!!街や人々を焼き払いながら現在、補給の為に陸地の近くに停泊中の地上本部の方向に進行中であります!!』

「何……!?」

映像が映し出されると、マクギリスは戦慄した表情でその映像に映し出された兵器を

睨んだ。

「馬鹿な……何故モビルアーマーがあんな所に存在している!?あれは、『地球上の物は』全て破壊された筈だぞ!?」

『モビルアーマーだと……!?』

モビルアーマー。それは自分の先祖であるセブンスターズが『倒したということになっている』厄祭戦の元凶であり、人類抹殺の為の無人兵器である。

しかし地球上の物はマクギリスの言うとおり全て破壊されており、存在しているはずの無い亡霊であった。

「エイハブリアクターの周波数は?!」

『そ、それが……可笑しいのです准将!?あの機体、ＭＳでないはずなのにＭＳの周波数が登録されております!!【ＡＳＷ―Ｇ―６４　ガンダム・フラウロス】と、何度やっても出てくるのです!!』

「……総員、第一戦闘配備!!繰り返す、総員、第一戦闘配備!!これより周辺のＭＳ部隊で防衛戦を行う!地球外縁軌道統制統合艦隊に連絡を繋げ!非常事態につき地球へ降下し、敵大型機動兵器を撃破せよと伝えよ!!アリアンロッド艦隊にも連絡を繋げ!!これは

ギャラルホルン、ひいては地球圏存亡の危機である!!」
『りよ、了解しました!!』

マクギリスは指示を出し終えるとこちらを向き、普段のポーカーフェイスからは想像もつかない焦った顔をこちらへと向けた。
「……すまないが頼みがある。アレがもしも、本当にモビルアーマーであるのだとしたら……おそらく、今までともに相手出来るのは君だけだ」
『何?あの巨体であるなら、いくらでもやりようはある筈では……』
「あれはな、今よりも技術が発展していた厄祭戦以前の時代の人類を滅ぼしかけた存在だ。少なくとも現在の対人用の装備のMSでは太刀打ち出来んだろう。倒すのであればガンダムフレームの、リミッターを外して動ける阿頼耶識使いや、禁止兵器のダインスレイヴ等の並外れた力が必要だ」
ガンダムフレームのリミッターは、本来コックピット内に充填されたナノマシンによって副脳が構築された状態でなければ外す事は出来ない。そうしなければ圧倒的な情報量に阿頼耶識で繋がった脳が焼かれてしまい、様々な障害を引き起こす為だ。
現在ギャラルホルンが運用しているガンダムフレームでそれが搭載されているのはとある例外を除けばヴィダールの操るガンダム・ヴィダールのみとなる。

『そうか、俺が率先してアレを止めに行かなければ被害者は増えるばかりか』
「そうなるな……一つ策がある。君は石動と共に先に戦場へ向かってくれ。私は地上本部へ行ってくる」
『……おいおい、まさかあの骨董品を引っ張りだす気か?!』
「ああ、確かにあれは贋作だが、本物と同様に作られた事には違いあるまい?」
『しかしアレを引っ張りだすとしたら、他のセブンスターズが黙っていないぞ?』
その質問を言った所で再び緊急回線がこちらへと飛んできた。
『緊急時につき失礼いたします!!あの機動兵器によってファルク家の屋敷の全焼が確認!!確認を取った所、本日はバクラザン家のご当主を招き入れていたとの情報が入っており、ファルク家のご当主と共にその安否を確認中であるとのことです!ファリド准将!!早くご指示をお願いします!!』
「今すぐそちらに向かう!……そんな事を言ってる場合では無くなってきたな、これは」
『……そうだな。戦力になる物を出し惜しみしてる場合ではないな』

そう言うと俺達は部屋から出て駆け出した。
この時点でギャラルホルン始まって以来の大惨事である。とにかく今はアレを止め

なくては何も始まらないと現実逃避しつつも、マクギリスを司令室に送った後すぐに格納庫に眠る自らの愛機へと駆け出し、乗り込んだ。

『ガンダム・ヴィダール、出るぞ!!各員、目標はあの大型機動兵器だ!!』

俺は街や建物を破壊し、本部へと向かっていくモビルアーマーに対し防衛部隊を率いて向かっていった。

得るものの無い戦い

「撃て、撃てぇえええ!!」
「駄目だ、かすり傷にもなっていない!!接近戦で……がぁぁぁぁ!?」
「ひっ、な、こいつら、取り付いて……!?」
　地上部隊に配備されたグレイズの部隊が街を破壊し地上本部の方向へと向かうプルーマやモビルアーマー、ハシュマル・フォールンに攻撃を仕掛けるも、その結果は悲惨な物となった。
　射撃兵装で攻撃を仕掛けるも、プルーマが時間をかけてナノラミネート塗装を施し直したハシュマルの装甲には通る筈もなく、弾の無駄と判断して接近戦を仕掛けたグレイズはハシュマルの背部に搭載された超硬ワイヤーブレードにより簡単に両断され、その無残さから足を止めたグレイズはプルーマに組み付かれ、そのプルーマの自爆により粉砕されてしまった。

「ばっ、化け物めぇ!!よくも同僚達を!!」
「馬鹿、止めろ!!不用意に近づくんじゃない!!」

怒りに駆られて飛び出そうとする部下を静止するも、静止を無視して突貫したグレイズはプルーマの大群に組み付かれ、動けなくなってしまった。

「クソ、クソォォオ!!放しやがれ、この……お、おい、まさか……」
組み付いたプルーマはグレイズのコックピットをドリルでゆっくりと削っていく……
「やめ、やめろ、やめてくれー!!あっ」
グシャリ、という鈍い音とともにグレイズから力がぬけ、組み付いたプルーマが離れると力なくグレイズは倒れ伏した。

「……各員!!あれに接近しないようにしろ!!弾幕を切らすな!!少しでも進行を遅らせるんだ」
「りょ、了解!!」
「あんなもんにどうやって戦えって言うんだ……このままじゃ、俺達も……」

「弱音を吐くな!!あれが向かっている先には地上本部があるんだぞ!!」

明らかな劣勢であったが、彼らにも引けない理由があった。

この化け物はギャラルホルン地上本部である移動型海洋基地『ヴィーンゴールヴ』へと向かっている事。そして、その進行ルート上の民間人や建物をビーム兵器で焼き払いながら進んでいる為に、彼らがこうして妨害を行わなければ今避難を行っている者達が皆殺しにされてしまう事。

こうした事情により、小隊が丸々一つ全滅状態になるような大損害を既に受けていながらも彼らは引くに引けなかった。

(クソ、増援はまだなのか……!?)

近接戦闘が危険と判断した隊長機はグレイズの腰にマウントしたバズーカ砲を手に取り、撃とうとするも……次の瞬間、僚機のグレイズのコックピットと共に肩をハシュマルの放った槍のような形状の弾丸に刺し貫かれ、後方にあったビルに磔にされてしまった。

「ば、馬鹿な……MSの装甲を、こうも簡単に……」

ハシュマルの背部に増設された、ガンダムフラウロスの二門のレールガン……否、本

来ならば対モビルアーマー用に開発された筈の禁止兵器ダインスレイヴを片門放ち、照準を合わせると後方で射撃支援を行っているグレイズにもう片方を発射した。

それによって崩れた部隊のスキをプルーマ達は見逃さなかった。搭載されたレールガンをばらまきながら前進し、グレイズを蹂躙していく。

そうして次のダインスレイヴ弾頭をハシュマルへプルーマが給弾し終わる頃には、全てのグレイズが破壊され、自身の進行を邪魔する相手が居なくなった事を確認するとハシュマルは頭部のビーム砲を撃ち払う。

MSというビーム兵器に対する防壁が消えた事によりビームの奔流はいともたやすく建物を蒸発させ、グレイズ隊の奮闘をあざ笑うかのように人々の命を消し去っていった。

『クソッ、一足遅かったか……マクギリスの言った通りグレイズでは手も足も出ないか。ならば仕方あるまい。石動と私であれを迎撃する!!お前達は、後方支援と子機の撃退を頼む!!』

『お前達、無理はするなよ』

『はっ!!』

ヴィダールがそう指示をすると、同行してきた部下のグレイズを残し石動と共に機体を前進させる。

『しかし、とんだ初実戦となったものだな。君のリンカーも』

「ええ、マクギリス准将から託されたこの機体。扱いこなせるよう微力を尽くします……!」

『君の腕前なら不安はない……背中を預ける。行くぞ!!』

『はっ!!』

グリムゲルデを改修し、実在するヴァルキュリアフレーム機の形状へと偽装を施した機体であるヘルムヴィーゲ・リンカーと、同じくガンダムフレームであるものの元の機体が分からない程に改修を施したガンダムヴィダール。色味は違うものの奇しくも青い両機は、地上本部への進行を続けるハシュマル・フォールンへと戦闘を開始した。

一方その頃、ギャラルホルンの地上本部である海洋基地ヴィーンゴールヴは大混乱の最中であった。無理もない。突然ギャラルホルン管轄の領地からエイハブリアクター反応が出たと思ったら街や建物が焼き払われた挙句、その被害がギャラルホルンの最高決定機関であるセブンスターズの一つであるファルク家の屋敷にまで降り注ぎ、ファルク家当主と偶然招いていたバクラザン家の当主、そしてその家族らが共に音信不通であるという異常事態に加え、刻一刻と迫ってくるその原因。

更に出撃させた防衛隊は全機反応が途絶え、ＭＩＡ判定が出てしまうという恐ろしい知らせに地上本部の司令本部は戦慄を隠せずに居た。

そんな頃であろうか。地上本部へ、数機のグレイズ・リッターが向かって来たのは。

「管制塔へ、緊急事態につき通達が無い事を失礼する!!こちら、マクギリス・ファリド准将!!地上本部に着陸許可を頂きたい!!」

「ファリド准将?……りょ、了解しました。着陸許可を出します!!」

「承知した」

そう言うとマクギリスとその部下はグレイズ・リッターから地上本部に降り立ち、司令本部へと向かっていった。

「緊急事態につき通達が無い事を失礼する!!地上本部の指揮官は居るか!!」
「こ、これはファリド准将……何故こちらへ」
「偶然地上勤務中でな。騒ぎを聞きつけて慌ててこちらへ駆けつけてきたのだ。現在の状況がどうなっているか、把握しているか?」
「はい……未だ被害が増え続けている関係上正確な被害者数は分かりませんが……先程、ファルク家の屋敷からエレク・ファルク公とネモ・バクラザン公のご遺体が、ご家族と共に発見されたとの報告がございました……加えて、出撃させたMS防衛部隊は壊滅し、一機すら反応が帰って来ません……!!申し訳ありません准将……我々は地上本部を任されておきながら……何一つ、守ることも……!!」
「……思った以上に最悪の事態だな……先程、陸地側の基地のアリアドネから地球外縁統制統合艦、そして月外縁軌道統合艦隊へと応援を要請したが、これでは応援が来るまで持つかどうか……仕方あるまい。一つ、奴に対する対抗手段に心当たりがあるのだが、どうかその手段を私に預けてはくれないか?」
「そっ、そのようなものが、ここにあるというのですか!?それは一体……」

地上本部の指揮官は藁にも縋るような表情でマクギリスに思わず聞き返した。あの未曽有の災害をどうにかする手段が、まだ残されているとは思えなかったからだ。
「……伝説がただのお伽噺ではない事を証明するだけさ。これから地下へ向かう」
「なっ、ま、まさか……しかし、アレは……」
「最早、現状ではアレしか方法が無いのだよ。アレを動かした事に対する全責任は私が取る！どうか私に希望を託してはくれまいか……？」
「……了解しました准将。こちらが、宮殿に入る為のマスターキーであります。しかし、アレを動かすアテがあるのですか……？」
「無論、そうでなければ言っていないとも。協力に感謝する。お前達は先にグレイズに乗り込んで待っていてくれ。すぐに向かう」
「了解しました、准将！」
そう言うとマクギリスは地上本部の指揮官から地下にある宮殿へのマスターキーを受け取り、急ぎ地下への道を向かっていった。

（アレが本当に私の集めた情報通りの存在であるのであれば、なんともまあ皮肉な話だ。

製造されて一度もモビルアーマーと戦ったことも無い偽りの悪魔王に、名も血も偽りである私が乗り込もうというのだから……いや。そもそもギャラルホルンの存在そのものが偽りであるのだから今更か）

歴史は勝者の為の物。そう、強者ではなく勝者の為の物なのだ。

思えば幼き日の私は何故それに気が付かなかったのだろうか。生まれた時から、強い者よりも狡猾な者の方が優位に立っていた世の中だというのに。

だが、それでも私は彼らへの憧れを捨てきる事が出来なかった。

（……さあ、いよいよご対面だな）

何重にも掛けられた防壁を解錠し、かつては何度も憧れ、それのみを心の支えとしてきた存在へと対面する。見た目も中身も、実物と同じように作られたガンダムバエルの写し身に。

しかし感傷は後だ。今こうしている間にもモビルアーマーは刻一刻とこちらへと突き進んでいる。

アレがこちらへ向かって来るのは当然の話だ。なにせヴィーンゴールヴはモビル

アーマーが製造された場所を奪い取り、改造して作られた決戦の地なのだから。故に猶予は無い。

急いでコックピットに乗り込むと、私は上着を脱いでこれがギャラルホルンの者達の手によって動かなかった原因である阿頼耶識を接続し、機体を起動させた。

「お前もガンダムであるならば……一度も戦うことなく眠り続けるのには飽きてきた頃だろう?」

これはギャラルホルンにとっての表向きは錦の御旗といえる存在であり、同時に罪の象徴そのもの。失われたガンダムバエルの再生産機。

アグニカ・カイエルにされた者達が残した伝記を知る者にしか、最早知らないその本当の名前を私は知っている。

その名は、ＡＳＷ―Ｇ―０１〝Ｒ〟ガンダムプルフラス。

本当の、ガンダムフレームの最終生産機だ。

「……こちら、マクギリス・ファリド准将。〝ガンダムバエル〟の起動に成功した!!これより、あの大型機動兵器の侵攻を阻止するべく出撃する!!」

ガンダムバエルの機能そのまま作られたが故に有する飛行能力を起動させ、地下から一気に地上へと飛び立つ。阿頼耶識にも問題ない。ナノマシンホルダーに充填されたナノマシンも問題なく稼働している。

そのまま広域回線へと繋ぐ。折れそうであった地上本部の士気を高める為に、一芝居打っておくとしよう。

「ギャラルホルンの勇士達よ、まだ終わってはいない!!確かに敵は強大だ。我々ギャラルホルンが戦わなければ、アレはすべてを焼き尽くす事だろう……だが、我々が怖気づいてどうする!!見よ、バエルはここに蘇った!!地球の危機に呼応するかのように、何者も動かせなかった筈のバエルがだ!!」

「さあ、今こそ反撃の時だ!!我々に不可能など無いと、あの血も涙もない殺戮兵器へと教えてやるのだ!!ガンダムバエル、出撃するぞ!!」

まるで道化だと内心思いながら、マクギリスは仮面を被り周りを鼓舞した。

何一つ、ここに本物は存在していない。しかし、それを知る者が居なければそれは本

物なのだろう。

絶望的なムードであった司令本部から伝わる奮起の声を背に、マクギリスは友人の戦う戦場へと足を急がせた。

正直、状況は芳しくない。偽装の為大幅に装備を対ＭＳ戦用に変更しているガンダムヴィダールには、はっきり言ってあのモビルアーマーに通用する武装が少ない為である。加えて唯一有効打を与えられそうな武装であるバーストセイバーはプルーマの大群への対応に追われ残り三本しか残って居なかった。

『石動、立て直せるか！』

「申し訳ありません。まさかあれ程規格外の存在とは……まだ、動けます！」

それを見てモビルアーマーへの対応を受け持とうとした石動のヘルムヴィーゲ・リンカーであったが、巨体でありながら機敏に動くモビルアーマーに翻弄され、その巨大な

足で蹴飛ばされてしまっていた。何とかその大剣で受けた為に機体へのダメージは抑えられたものの、中身のパイロットまではそうはいかなかったようであり、負傷してしまった。

（俺ならあれの相手はできるが致命打が無く、石動のヴァルキュリアバスターソードなら当たりさえすれば致命打を与えられるがそもそも動きについて行けんか……よくもまあこんな化け物をかつてのガンダム・フレームの搭乗者達は何体も葬り去ったものだ。せめて槍があれば……）

しかしそんな泣き言は言っている暇は無い。陸地側の基地に配属されていたグレイズの部隊を率いて防衛網を敷いて入るが、ジリジリと地上本部側に押されつつあるからだ。

こちらがプルーマのみを相手にしようとすればモビルアーマーは何処からそんなに持ってきたのかと言いたくなるダインスレイヴを撃ってくる。非人道的な威力を誇る為、生産や使用にギャラルホルンでも制限がかけられている禁止兵器であるというのに、そんな事は知ったことではないと言わんばかりに相手は撃ってくるのである。そのせいで連れてきたグレイズが二機ほど行動不能に陥ってしまった。

幸い、その性質上装填は単騎では行えない上に時間がかかる為、何とか近接戦闘に対

応できる俺や石動でモビルアーマーを抑えていたが……このままでは埒が空かん。

『……やむを得ん。リミッターを解除する!!石動、周囲のプルーマの相手を任せた!!』

「了解……!」

阿頼耶識で機体にアクセスし、ガンダムフレームの全力稼働の為のリミッターを解除する。

ナノマシンホルダーに充填されたナノマシンが光り輝き、ガンダムヴィダールの目が赤く輝きを変えた。

『グウッ……おおおおおお!!』

身体が軋む音が聞こえる。阿頼耶識と機体を全力で稼働させ動くのだから、当然体に掛かるGも並大抵の物では無い。

しかしその搭乗者と機体への消耗を代償に、尋常ではない機動力と加速による破壊力を与えるのがガンダムフレームの全力稼働である。

その勢いでモビルアーマーへと飛び掛り、脚部に搭載されたブレードでその背部を蹴り飛ばす。このブレードは装甲を『割る』為の物である為刃はついていないが、それによって厚く蒸着されたナノラミネートの下の機構が現れた。

それを見逃さず、推進剤を使って無理やり空中で体勢を立て直すと、全力稼働する阿頼耶識により加速した思考の中で刃が通りそうな部分に片手で持ったバーストセイバーを突き刺した。狙ったのはダインスレイヴを発射する砲の接続部だ。

そのままバーストセイバーの刃と柄の接続を外し、五本目のバーストセイバーをストックから接続しつつ、離脱する。

そのままUターンして、次の攻撃を仕掛けようとしたその瞬間、機体の脚部が粘性のあるワイヤーで絡めとられた。

『しまった!?だが、今のタイミングなら!!』

先程刺したバーストセイバーには爆薬が仕込んであり、刺した刃を内部から爆発させるという試作兵器である。

コストの問題で正式採用は見送られたもの、その威力は折り紙付きだ。それにより砲身との接続部を爆発させられたモビルアーマーはのけぞり、一瞬ワイヤーへの給電が止まったのか粘性が無くなったのをみて、無理やり解いて脱出する。

そのまま着地し、モビルアーマーを睨んだまま五本目のバーストセイバーを引き抜い

た。

先ほどの爆発により、左側の砲身が吹き飛んだようである。ようやく目に見えるダメージを与えられたものの、余裕など一切沸かなかった。

（ダインスレイヴを片方封じられたのは良いが……思ったよりも浅かったか!!弱点は何処だ……っ!?）

モビルアーマーの頭部から閃光が走る。

それを見て咄嗟に回避出来たものの、放たれた閃光は後ろの建物を蹂躙し、焼き払っていく。ビーム兵器だ。ＭＳにはナノラミネートアーマーによって効果は薄いものの、それでも当たっていい物という訳ではない。

『この……!!』

間合いを詰めて、バーストセイバーを突き刺そうとするも……狙いを外して装甲で弾かれた。

その隙をついてモビルアーマーはワイヤーの先端に装着したブレードを飛ばしてくる。

バーストセイバーを持っていない方の腕でハンドガンを引き抜き、回避しながらワイ

ヤーとブレードの接続部に対して数発叩き込む事で刃の軌道を逸らす。普段ならこんな曲芸じみた射撃は出来ないが、ナノマシンによって構築された副脳によって大幅に引き上げられた知覚時間がそれを可能とした。

そのまま一気に前進して、脚部に内蔵された銃身を向けてくるモビルアーマーに対し、その銃身にバーストセイバーを突き刺した。

急いでバーストセイバーの接続を外し、最後のバーストセイバーを引き抜くと推進剤を吹かして離脱する。

爆発音と共に、地面に倒れこんだモビルアーマーを見て好機と判断し突撃する。狙いは頭部。あれだけのエネルギーを放出する兵器を内蔵している部分だ。内部を爆発させればただでは済まない筈と考えた。

『これで……!?なっ!?』

大地を蹴り、思いっきり踏み込んだ上で推進剤を全力で吹かして飛びかかった。しかし次の瞬間、凄まじい衝撃と共に俺とガンダムヴィダールは吹き飛ばされてしまった。

もう片方の砲身に残っていたダインスレイヴを、至近距離で発射されたのだ。

『ぐぅ……』

（右肩と一緒にバーストセイバーが吹き飛ばされてしまった……！対抗手段がこれで無くなったか）

加えて、推進剤ももうほとんど残っていない。リミッターを解除するのを躊躇ったのはこの為だ。ガンダムフレームの全力稼働は確かに強力だが、推進剤の量は有限である為に大幅に稼働時間を減らす諸刃の剣である。

『ヴィダール殿!?この……』

石動がなんとかこちらに来ようと足掻くも、ヴィダールの分プルーマを相手にしている為に近づく事が出来ない。

万事休すか。そうは思ったが、まだ諦める訳にはいかなかった。

『悪いがこんな所でまだ死んでやれんのだよ、俺は!!』

残った左腕でハンドガンを引き抜いて射撃するも、全く歯が立たない。そうして足掻いていると、ワイヤーブレードで脚部を切断され、ガンダムヴィダールは地に伏した。

絶対絶命。そんな状況で、俺は空を眺めた。

モビルアーマーの被害による停電　により星が見える夜空の中で、一筋の流星が見えた気がした。

そうして、命を失うと思った次の瞬間、モビルアーマーのテイルブレードのワイヤー

部は切り裂かれた。
「すまない、待たせた!!」
『……遅いぞ、マクギリス!!』

二本の黄金の剣。翼を思わせる一対のスラスターユニット。白を基調に青を散りばめた雄々しくも何処か凶暴さを秘めたその姿は、まさしく伝承の通り。
ギャラルホルンの伝える歴史そのままのガンダムバエルが、そこにいた。

「さあ、伝承までもが偽りでは無いことを証明しようではないか……!」

そうして、マクギリスは阿頼耶識のリミッターを解除した。
ガンダムバエルの設計はシンプルだ。
推進剤によらない、空を自在に飛び回るほどの推力。理論上折れることのない程に強靭な二本の剣。牽制用の対空砲。これだけだ。だが、それで十分であった。
これにより、ガンダムバエルはパイロットの体力が許す限り『阿頼耶識のリミッターを外し続けて稼働することが出来る』のである。このモビルアーマーに対する継戦能力の高さこそが、ガンダムバエルを厄祭戦における最強の機体としてモビルアーマーを最

も多く狩り続けられた理由なのであった。
そしてそれをそのまま再生産されたガンダムプルフラスの力もまた、バエルと同等の力を持っていた。そんなものに、ＭＳパイロットとして最高クラスの力をもつマクギリス・ファリドが乗り込んだ場合どうなるか？
その答えは、すぐに分かった。

「これがバエル……いや、プルフラスか。悪くないな。気に入った」

ヴィダールとの戦闘で深く損傷し、武装の大半を失った今のハシュマル・フォールンが敵う筈もなく。

ビーム兵器を放とうとした頭部をすれ違いざまに切り捨てられ、スラスターユニットを使い高く飛び上がり、急降下した上で唐竹割りで真っ二つにされ、あっさりとその機能を停止した。

「怪我はないか、ヴィダール？」
『ああ……大事は無い。機体は見ての通り大破したがな。それよりも、この後の後始末

をどうするか今から頭が痛いな……』
「全くもって同感だな……どうしたものか」

ハシュマルが破壊されたことで子機であるプルーマも静止し、戦闘は終わった。
しかし、喜ぶ事は出来なかった。あまりにも被害が大きすぎた事からマクギリスとヴィダールは今後の後始末のためにしなければならない事に対して頭が痛くなった。

この戦いで、ギャラルホルンが得たものなど何一つ無いのだから。

雨降って地固まる

バエル宮殿へと帰還し、バエル……否、プルフラスを返却するとマクギリスは置いてきたグレイズ・リッターへ乗り込み再び戦場となった町へと乗り込んでいった。モビルスーツは大きい人形の機械である。普段ならエイハブリアクターの性質の関係上簡単に町には出せないが、この被害の大きさを考えればそれを無視してでも駆り出して消火活動に勤しまねばならなかったのだ。

消火用の特殊弾を装備した陸地の基地のグレイズを指揮しつつ、生存者を探す地元のレスキュー隊と協力して町の消火を行うこと数時間、ようやく応援を要請していた地球外縁軌道統制統合艦隊のＭＳ隊が地球に降下して駆けつけ、それに少し遅れる形でアリアンロッド艦隊のＭＳ隊もやって来るという形となった。

そうして足りなかった人手を得たことで数日かけてようやく鎮火に成功するも、それによって判明したあまりにも凄惨な被害者数と、失われた建物や施設の数に皆が沈痛な面持ちとなった。

ハシュマルの進行ルート上にあった街や施設はギャラルホルンにとって重要な要地

ばかりであり、人も多く集まっていた。少なく見積っても死者、重軽傷者含む被害者数は百万人を越えている。

そしてギャラルホルンとして致命的であったのは、最高決定機関であるセブンスターズの七家の内2つがこの戦いで失われてしまったことと、ギャラルホルン内でもその場所は極秘であったエイハブリアクターの生産工場が完全に焼失してしまったことであった。

太陽近傍の軌道の工場から受け取った部品を組み上げる為の工場であり、ここでしか作られていない部品も多いため、実質的にエイハブリアクターの生産技術はかなり失われてしまったこととなる。

後に【厄祭の再演事件】と名付けられる事になるその災害は地球の治安を荒らす荒波を引き起こした。これにより、かねてから低調気味であったギャラルホルンの権威は更に低迷し、各経済領域は本格的に彼らの必要性に疑問視を抱くようになっていく……

「……まさか、七星会議の椅子が貴公と二人だけになってしまうとは、な……最早、セブンスターズという制度そのものにも限界が来ているとしか言いようがあるまい」

「貴方がそれを言いますか。エリオン公……ですが、そう言いたくなる気持ちも分かり

ます。私も、このような事態に陥るとは想像もしていませんでしたから……」

あの事件から早くも一月が過ぎた。まるで嵐が過ぎ去るような多忙な日々を過ごした二人は、若干やつれているようにも見えた。

なにせ今まですら2つ席が空白になっていたセブンスターズの役職を二人でなんとか分け持ちながらこなしていたのだから無理もない。この二人がいくら有能であったとしても、身体は一つしかないのだ。それに加えて先の【人災】による被害の後始末もいくらでもあった。

エルク・ファルク公、そしてネモ・バクラザン公はモビルアーマーの被害をうけその家族ごと全滅し、イオク・クジャン公に至っては彼が管理していた蔵の座標からあのモビルアーマーのエイハブリアクターの反応が出ていた事が判明し、即時逮捕となった。

ギャラルホルンはかつてモビルアーマーを倒したことでその地位を認められた存在である。それ故にモビルアーマーの取得、修理等は禁じられており、例えセブンスターズであったとしても発見した場合は他のセブンスターズへの報告が義務付けられており、それを怠った者に対する処罰が法の下で決められていたのであった。

更に言えば今回のように明確な被害を出してしまった場合は特に厳しい刑罰が定められており、お家お取り潰しの上で死刑は免れない重罰が課されていた。本来ならこう

いった古い法は整備されているものだが、長らくセブンスターズによる統治が続いていた為か、それで問題無かった為か変わることなく放置され続け、三百年前と同じ刑罰が執行される事となってしまったのであった。

その為現在、イオク・クジャンはこの場には居ない。現在は塀の中で自分の犯した罪を悔いながら、死刑執行の日を一日一日数えながら待つ日々を過ごしている事であろう。

そして残るボードウィン家のガルス公は、現在心労で倒れ、入院中の為に七星会議には出てきておらず、代理としてその娘の婚約者であるマクギリスが出てきていたというわけであった。

尚、彼にあのモビルアーマーを売ったという圏外圏からきた商人は地球圏から火星圏までのギャラルホルンによって指名手配されており、現在目下捜索中である……そこより先はギャラルホルンでも元々手を出せない領域であり、弱体化しつつある今のギャラルホルンでは手の出しようのない場所でもあった。

モビルアーマーの被害の後始末やら仕事の引き継ぎやら各経済領域への対応に追われていたことで先延ばしになっていた七星会議……もはや二人しか居ないセブンスターズによる会談でしかないそれを今、行っている所であった。

流石にこの状況になってしまうとお互いがお互いのアキレス腱でありすぎるがためにスタンスの違いから敵対し合う事は出来なくなってしまったのは不幸中の幸いと言うべきであろうか。

マクギリスはあのモビルアーマーが出現した際にバエルを起動させモビルアーマーの討伐に成功した事により、モビルアーマーの討伐でのみ与えられるギャラルホルン最高位の勲章である七星勲章を与えられ現代のアグニカ・カイエルの後継者――ギャラルホルンの英雄として祭り上げられた。あまりにも失ったものが多すぎた為、ギャラルホルンの人気や志気を維持する為にもこれは必要な行為であった。

対してラスタルはギャラルホルンでも最高練度を誇る月外縁軌道統合艦隊アリアンロッドの司令官であり、その戦略家、戦術家としての能力は現在ギャラルホルン全体の方針や方向性を定める重要な役割を担っており、はっきり言って彼が倒れた時がギャラルホルンの最後と行ってもいいほどの生命線となりつつあった。

「貴方がそれを言い出すのであれば、私としても遠慮なく案を出させて頂きたい……セブンスターズによる合議制を徐々に緩和し、最終的には無くしていく方針を、ファリド家としては提案したい」

「エリオン家として、その方針に合意する……決定権を、決定権を持つ者が足りなすぎる

……！」

「まさかここまで貴方と話が合う日が来ようとは思いもしませんでしたよ、エリオン公……！」

「私もだ。いずれ、雌雄を決しなければならないかと覚悟を決めていた時もあったが……最早そんなことも言ってられない状況だ。どうにか、組織の正常化と立て直しを図るためにお互い手を取り合おうではないか……！」

（（これで何とか、週六徹が当たり前な状況から解放されればいいが……!!））

理由はそれぞれ色々とあるが、主に過労が過ぎる現状を改善したい。そんな思惑の元同じ組織の中で敵対しあっていた者達は手を組んだのであった。

指導者として、人の上に立つものとして有能であれば有るほど仕事量は当然増えるものである。そしてそういった人物ほど、ちゃんと真っ当に仕事はこなすものなのだ。もしくは、それを行えるものをちゃんと探し出す。

思想や思念は異なるものの、それぞれ優秀であったこの二人。そんな二人がセブンスターズ全ての仕事を任されてしまった結果、その仕事量は最早殺人的なものへと成り果てており、この一月という短い期間の間でこの二人が根を上げるという異常事態が発生していたのであった。

こうして、ギャラルホルンはその規模を縮小しつつも徐々に組織の立て直しを開始し始める事となる……

幕間『叔父貴、親父に土下座しに行くってよ』

「あぁあぁあぁぁあぁぁあああ!?ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなぁぁ!!」
「あ、アニキ……気持ちは分かりやすが落ち着いてくだせぇ!!」
「これが落ち着いていられるかぁぁ!!クソ、クソクソクッソォォォオオ!!あのボンクラァァァ!!セブンスターズだったら、あんな危険物の処理くらいちゃんとやれよ!!なんのためにあんな苦労して、特注のコンテナまで用意して運んだと思ってやがるんだァァアア!!」

歳星についたジャスレイは荒れに荒れていた。
無理もない。掘り当ててしまった危険物を処理するために自分の持つコネクションを最大限活用してあれを暴走することなくギャラルホルン、それもセブンスターズに渡したというのに、恐ろしい災害が起きてしまったのだから。
流石に圏外圏の商人であり、一桁二桁の人間が自分の商売のせいで不幸になったとしてもジャスレイは気にしない。だが、百万人を超える人間が死に絶えたとなれば流石に恐怖で狼狽えるという物である。
「ジャスレイのアニキ……親父から、呼び出しが来ていやす……!ど、どうすれば……」
「駄目だ。ぜってぇ許されねえよ俺ら……指詰めるだけじゃ済まされねぇ!!確実にタマ持ってかれる……!!」
「……狼狽えるんじゃねぇ、オメェら!!ああ、最悪だ……最悪だが、ここで逃げるのは最悪手だ……親父に、会いに行ってくらぁ」
「あ、アニキ!?正気ですか?!」
「ああ、最悪命だけは何とかしてやるさ……どの道こうなったら圏外圏の奥地に逃げる他道はねぇ……そして、圏外圏で一番怖いもんはギャラルホルンでも海賊でもなく俺達の親父だ……!なんとか詫び入れて来なきゃ、そんな芽すらなくなっちまう……!!」

そうして、ジャスレイは一人マクマードの待つ屋敷へと、決死の覚悟で土下座しに向かうのであった……

つづく

友よ

「今朝のニュース見たか？地球にとんでもねぇ危険物が持ち込まれた結果、町が丸々焼けてギャラルホルンのＭＳ隊も壊滅的被害を受けたって話だ。んで、それを見事解決したのがあのマクギリスらしい」
「ふーん……流石チョコの人だね。爆弾でも持ち込まれたの？」
「いや、モビルアーマー？っていう厄祭戦時代の兵器だそうだ。なんでも圏外圏から持ち込まれたらしくてな……買い取ったのがセブンスターズの一人だそうで、その対処法を知らなかったのが原因で起きたって話だ。まあ、遠い火星まで流れてくるようなニュースだから、どこまで正確な情報なのかは分からねえけど。火星で流れてる地球圏のニュースってのは地球圏で散々流された後に下ってくるもんだしなぁ。もう一月も前の話だそうだ」

アトラ達が用意した朝食のコーンスープを飲みながら、オルガと三日月は落ち着いた時間を過ごしていた。

段々と他の団員達が数字の計算や書類の書き方等の経理の仕方を覚えてきた事によりオルガの仕事量が減った事で最近は朝食を時間をかけて食べる位の余裕はある為、交流がてら食堂で団員達と一緒に食事を取るのが新たな習慣となりつつあった。

「町一つ焼いちまう兵器っすか……なんか、規模が大き過ぎて全然想像が付きませんね……って暁、それは手に取らないでなー」

「うー……まんま、まんま!!」

「ちょっとまってなー暁。今暁のお母さんがお前のご飯用意してくれてる所だから」

自分の食事を食べながら、膝の上に暁を座らせて世話をするハッシュが慣れた手つきで食器を掴もうとした暁の手を阻む。

そろそろ暁も産まれて九ヶ月。好奇心旺盛に手で何かを掴もうとする事が多くなってきた為ますます目が離せないようになってきた。

「ごめんハッシュ。俺もうこのスープ以外食べ終わったから暁の相手代わるよ」

「団長と話してるのにすいません三日月さん。ほら、お父さんの所にお帰り」

「ぱーぱ♪」

「ん……やっぱ段々重くなってきてるね、暁」

「いい事じゃねぇか。ほんと、時間が過ぎるのはあっという間だな」
暁を受け取った三日月に、スープを飲み終えたオルガがタコスを食べながらそう言った。
火星の食文化は割と地球の様々な地域の料理が入り混じった物であり、これは惑星開拓時代に様々な人種の人間がやってきた名残である。しかしながら手に入りやすい穀物がトウモロコシである関係上、それらを活かす料理が多く残っていた。
手に入りやすい動物性タンパク質は主に鶏肉や卵であり、それ以外は輸入に頼る関係上滅多に食べる事が出来ないのが火星の食事情である。その上本物の肉や卵は高いので、普段は必要な栄養素が添付された植物性の合成肉や大豆でタンパク質を補う形となっている。なのでオルガが今食べているタコスも使われているひき肉は合成肉だったりする。
しかしこれに慣れ親しんだ火星暮らしの団員達は逆にたまに出る本物の鶏肉に不慣れな為、調理担当のアトラ達はどう調理するか毎回頭を悩ませているらしい。
「さて、今日は歳星に発注してたＭＳを受け取りに行く訳だが、久しぶりに兄貴達と予定が合ったんでタービンズと会えそうって話だ。あの時世話になった姉さん方に礼を言いに行かねぇとな、ミカ」

「そうだね。大きくなった暁が元気にしてるって顔見せに行かなきゃ」
「ぱーぱ？」
「お父さんとお母さんがね、凄くお世話になった人達に会いに行くんだよ、暁。だから、一緒に会いに行こうね」
「あうー」

三日月は暁を両手で抱っこして、優しく微笑んでそう言った。

この通り、【厄祭の再演事件】により地球は大混乱に陥っていたものの遠く離れた火星は平和そのものであった。

現在のギャラルホルン火星支部の隊員は前回の事件を踏まえてそれなりに素行の良い者達に入れ替えられている。それにより火星の治安維持をキチンと行っている事や、定期的に鉄華団と提携してパトロール活動を行っている事もあり、火星の治安は圏外圏基準ではあるものの良くなりつつあるのが現状だ。

少しずつではあるものの火星は資源を粗方採取されつくされた価値の薄い土地から、ハーフメタルを中心としたとした経済が回りつつある発展の萌芽がある土地へと変化しつつあった。

一方、その頃の地球。

「ふう……カフェインを無理に摂取しなくても良い日というのは素晴らしいと思わないか？ヴィダール」

『同意するよ……ここ一月、酷い有様だったからな』

何せ町一つ燃えてしまったのだ。あのモビルアーマー『ハシュマル』を討伐してそれで終わりだなんて都合の良い話はない。

マクギリスはあの後七星勲章を授与されたものの、その後は地獄のような事後処理に追われていた。破壊された施設やＭＳの処分。被害者の身元確認。被害者達のための救命活動。家を無くしたものに対する仮設住宅の設置。ｅｔｃ．ｅｔｃ．……限りなく多岐にわたるその作業に追われた上で、彼はラスタルと２つに分けたセブンスターズとしての仕事も熟していた。　それを出来てしまった事が、彼とラスタルにとっての不幸であったのかもしれない。

仕事が、全く終わらないのだ。

いや、正確には終わらせてはいるのだが次から次へと雪崩のように新たな仕事が押し寄せてくるのである。加えてあの事件によって元々そんなに体調のよろしくなかった義父……ガルス・ボードウィンが倒れてしまい、その分の仕事もマクギリスがやらなければならなくなったという多忙に多忙を重ねていたのがこの一月の日々であった。

「まあ、エリオン公も流石に折れたからな。セブンスターズの名もこれで、あくまで名誉的な物へと変わっていく事だろう。これからは、誰の手にもチャンスは与えられる時代が来るはずだ……」

『……マクギリス』

「ああ、これでやっと……私は彼に、『モンターク』に……俺たちのような人間を減らして行けると……伝えられるのか……！」

『……俺は、何も見ていない。ここに来る人間も暫くいないはずだ。だから、思う存分吐き出すといい』

マクギリスは、その言葉を聞いて目に手を当てた。

かつて彼が孤児であった頃。人買いに囚われ、顔立ちのいい少年だけを集める館に売られてしまった頃の話。

その館は少年達を高値で売るために勉学や戦闘を覚えさせ、その能力の差によって扱いを変えられる、そんな場所であった。

自身の力のみが頼りになっていたその頃に、自分と同等の才覚を持つ少年と彼は出会った。

彼と少年は己を競い合う度に徐々にお互いを認め合うようになり、彼とその少年、モンタークはいつしか友人となった。

首に逃げ出せば爆発する首輪を付けられた自由のない状態ではあったが、それでも彼は幸せであった。生まれて初めて、心の底から信頼出来る友人が出来たからであった。

しかし、そんな幸せも長くは続かなかった。

ある日、館の少年十数人が大人達に集められ、一人一人ナイフを持たされ無機質な建物の中に閉じ込められた。

そして、そこで行わされたのは……たった一人になるまで行われる殺し合いだった。

彼は優秀だった。息を潜め、他の少年達の息の根を止めることに、戸惑いを覚えなかった。戸惑えば死ぬのは、館につれてこられる前から同じだったのだから。

しかし、それが最後の一人になった時、彼は唖然となった。その、最後の一人はモンタークであったのだから。

しかし、殺し合わなければ首輪の爆弾は起動すると伝えられた二人は、苦悩の果てに

ナイフを向けあい……結果、彼は最後の一人となった。
モンタークは直前でナイフを止め、自分から刺されに行ったのだ。
どうしてと、彼は問いただすと、モンタークは今際の言葉に、こう言った。
友達だから……殺したく無かったと。

友を殺してしまった罪悪感に押しつぶされ、彼は意識を失い、気がつくと普段から囚われていた部屋に閉じ込められていた。そうしてすぐに、買い主が決まったと、彼に通達された。
彼は過酷な現実に耐える非常に頑丈な精神を持っていた。故に心が折れることは無かった。しかし、致命的なその傷は彼に一つのトラウマを与える結果となった。
自分が友人と思う相手を、殺そうとするとモンタークの顔が浮かんでしまうのだ。結果的に、彼は友人を殺すような選択肢を取れなくなってしまった。
後に、この殺し合いがその買い主の意向によって行われた事であると知った彼は、いつか必ず復讐する事を被った優秀で従順な後継者という仮面の下に誓い、後にそれは果たされたのだった。
彼がマクギリス・ファリドの名を得る前の、原点。
誰もがチャンスは掴めるような世界を……自由を求めるようになった理由は、初めて

の友人のような存在を増やしたくなかったからだった。そうなる前から、彼らには選択の余地などなかったのだから。

だからこそ、マクギリスは鉄華団の少年達に憧憬を持たざるを得なかったのだ。

一歩違えば、『自分たち』もああなれたのではないか、と……

「やったよ、モンターク、俺は……」

ヴィダールは、沈黙を貫いた。

幕間『叔父貴、涙の事情聴取～そして落とし前へ～』

「おうジャスレイ。一人でここまでやってきた事に関しては褒めてやるよ。大した度胸じゃねぇか……ええ!?」

その声に本気の怒りが混じっている事をジャスレイは見逃さなかった。即座に足を畳み、床に頭を着けてジャスレイは土下座した。

「申し訳ありません、親父……!!ですが、これには深い訳が……!!」

「つまらねぇ理由だったら承知しねえぞ。おいお前、自分が何をしたってのか分かってんのか?!」

「百も承知でございやす!!ですが、どうか話を……どうか話を聞いてください、親父……」

「……ハァー、良いだろう。おい、面を上げろ。全部話せ、どうしてこうなったのか、全てだ……!!」

そうしてジャスレイは正座したまま今回の事件における自身の行動を包み隠さず話していった。

任された鉱山からモビルアーマーが発掘された事。

それに慌てて処理方法を探すべく自身のコネを全力で動員して何とかかってのコネから確実に対処方法を知っているであろうギャラルホルン、それもセブンスターズに話を着けた事。

自力で対処方法を見つけた事からマクマードの手を煩わせる事なくなんとかする方針で事態に対処した事。

万一がないように特注のコンテナを用意して自分で地球まで行って、自分で地球に降りてそのコンテナをセブンスターズのクジャン家に渡してきた事。

そして、いざ一仕事終えて歳星まで帰ってきたら無事に引き渡した筈のモビルアーマーが大事件を引き起こしており、そのことを帰ってきて今ようやく知ったという事。

これら全てを話し終えた頃には、怒り心頭であったマクマードも流石に憐れみの目が隠せなくなっていた。

「なんともまあ……運が無かったな。ジャスレイ。だが、これだけ事が大きくなっちまった以上、落とし前はつけなきゃならねぇ」

「お、親父!!ど、どうか命だけは……いや、せめて、部下の命だけは、どうか……!!」

パリン、と何かが割れた音がした。それはジャスレイがマクマードと交わした盃であった。

マクマードは机から拳銃を取り出し、ジャスレイの頭にそれを向けた。

「残念だよ、ジャスレイ」

「おやっ……」

乾いた銃声が、部屋に響いた。

つづく……

反撃のジャスレイ　—Operation BITTER CHOCOLATE—

放たれた弾丸はジャスレイの頭を貫く事無く、その頬を掠める形で通り抜けて行った。

「良いだろう。ビビらず動かなかったそのクソ度胸に免じて命だけは取らないでおいてやる」

「お、親父……」

「……もう盃を割っちまった以上、俺はお前の親父じゃねぇよ馬鹿野郎。ああ、だがな、このままだとジャスレイ・ドノミコルスとしては生きて返す訳にはいかんのも事実だ……そうだなジャスレイ。俺ァ今いい手が思いついたんだが、それを言う前に一つ聞くぞ……悔しいとは思わねぇか？」

「へっ？……そ、そりゃぁ……悔しいっすよ……!!悔しくねぇ訳がねぇ!!俺の人生、あのクソボンクラのせいで全部オジャンだ!!」

「だよなぁ。お前さんの対応は何一つ間違っちゃ居なかったってぇのに、誰よりもモビルアーマーに対する対処方法を知ってなきゃいけない奴がそれを知らなかったせいで全て台無しだ……正直な、俺も心底そのボンクラのセブンスターズに対して腸煮えくり返ってる。優秀な部下を泣く泣く切り捨てなきゃならねぇ状況にろくでもねぇ理由で追い込まれたからな。だからよジャスレイ、ちょっとした博打を打たねぇか？」

「博打……？」

「ああ、掛け金はジャスレイ・ドノミコルスとしての資産全部。つっても、お前の部下や社員の退職金とお前が最低限やり直す為に必要なもんは支払った上で、って形になるがな。ああ、無論勝っても負けてもお前の部下の命も再就職先も保証してやる。どうするジャスレイ？上手く行けば、少なくともあのボンクラが二度と表舞台に立てなくなる程度の仕返しが出来るぞ？」

「……乗った!!そこまでアンタにお膳立てされて、ここで怖気づいたら男が廃るってもんだ!!どうせ、こうなった以上ここで断っても俺の資産なんてアンタの胸先三寸次第で差し押さえられちまうんだ!!あの野郎だけは絶対許さねぇ……!!」

「よく言った！よし、手筈はこうだ……」

そうしてマクマードは不敵な笑みを浮かべながらジャスレイに自身が思いついた作

戦を説明していった。そうして、マクマードはその作戦を決行するために必要な人手と物を集めそれを決行した。

悲報を聞いた名瀬は急いで歳星へと飛んできた。ジャスレイが拳銃自殺を行ったという非常事態が起こったからである。

「親父、ジャスレイの旦那が亡くなったってのは本当なんですか?!それも、自殺って……」

「ああ、しっかり遺書まで残しやがって……話を聞いた上で事実を確認したが、あいつ自身はやれる事をしっかりやっただけなのにな……だが流石に被害が被害だ。何せ百万人以上の被害者を出しちまったんだ。今後一生後ろ指刺され続けて追われ続ける人生を歩む事になるのは嫌だったんだろうよ。たく、まだ何処のどいつがアレを持ち込んだのかバレちゃいねぇから盃割って追い出す形で木星圏へ逃してやろうって準備をしてたのが全部パァだ……あの、馬鹿息子が……!!」

そう言ってマクマードは手に取っていた一枚の紙を名瀬に渡した。ジャスレイの『遺書』である。何度か書類で見たことのあるジャスレイ本人の筆跡と、最後に血判が押さ

れていた。
「奴の葬式はやるが、内々でやる事になるだろうな。それよりも先に、急いでやってやらなきゃならねぇ事があるからな……奴の最後のテイワズへの奉公だ。報いてやらなきゃならねぇ」
「……これは……そうか、ジャスレイの旦那は、そこまで考えて……」
「ああ、そしてこの策は手早く打てば打つほど効果的な策だ。だからお前を呼んだんだよ名瀬。お前ならアーヴラウ経由の地球への正式な航路が使えるからな……準備は済ませてある。ジャスレイが所有していた輸送船に必要なもんは全部詰め込んだ。急な話で悪いが、俺の名代として地球へ向かってくれると助かる」
「……分かりました。名瀬・タービン、テイワズの一員として故人の意思に従い、この話をお受け致します」
「ああ……任せたぞ名瀬」

そう言って名瀬はマクマードの部屋から出ていった。
「さて……次はマスコミに対して行う会見の準備だな。圏外圏で俺が最も恐れられた理由を、たっぷりと教えてやろうじゃねぇか」

材料はジャスレイの資金と事実。それとほんの少しだけの大法螺。

金は力だ。故に切り時と言うものがある。マクマード・バリストンという男が一代でテイワズを築き上げる事ができた理由、その一つとしてそう言った金を切るタイミングを見切る才覚がマクマードには備わっていたことが挙げられた。

場合によってはテイワズの看板に深い傷をつけかねないこの事態に、彼は凄みを持った笑みを浮かべながら対応した。古くからテイワズに居る古参の幹部がこの姿を見れば戦慄を隠せなかったかもしれない。

彼がこういう表情をしている時は彼を誰かが本気で怒らせた時であり、その対象は皆恐ろしい末路を遂げているのだから……

「圏外圏の企業から、被災地へ支援物資が届いただと?」

「はい、それも食料品から衣類に毛布、更には組み立て式の簡易住居の詰め合わせまで、膨大な量の支援物資が送られてきたそうです」
「何故だ……？いや、おかしい話ではないが……送り元の企業の名は？」
「木星圏を中心に活動しているテイワズという企業だそうでして……最近ではアーヴラウとの交易もよく行っている為か、その為の航路を使ってそれらを運んできたそうです。それについての説明と会見を、これからテイワズの代表直々に行うという話も来ています」
（テイワズ……ああ、あのアーヴラウにＭＳのフレームを販売しているというあの企業か。慈善事業のつもりか……？まあいいだろう、そういうつもりなら受け取る事にするか）

　目に隈を浮かべながらラスタル・エリオンは疲れきった思考の中で安直にそれを受け取った。既にあの事件から一週間が過ぎたものの事件の後始末はまだまだ終わっておらず、被災地に居る被害者達に対する物資も当然足りていなかった為そう言った支援は喉から手が出る程ほしいのも事実であった。
「分かった。有難く受け取ると伝えてくれ。さて、次の案件だが……」

普段ならばもっと疑って行動するラスタルであるが、既に僅かな仮眠を除くと七徹目に突入するコンディションの悪さが影響して安易にそれを受け取ってしまった事を、後に後悔する事となる……

それはギャラルホルンにとって甘く、とてつもない苦さを持った贈り物であったのだ。

「本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます」

マスコミの集まる中、マクマードは毅然とした態度で言葉を走らせた。

「今回、我々は事実をお伝えする為この場を設けて頂きました。先日の痛々しい『事故』についてです。モビルアーマーの暴走……その事件の真相について」

思いもよらぬマクマードのその言葉にマスコミは騒然となった。その声を押さえると、マクマードは続きを語っていく。

語っていくのは文字通りの事実だ。テイワズの一員であるジャスレイ・ドノミコルスが件のモビルアーマーを発見し、どういった対応を取ったのかという事の説明。

その上で地球へと持ち込んだ、モビルアーマーを封入するために使った特注品のコン

テナの同一品の現物まで使って、どういう状態でそれをセブンスターズの一員であるクジャン家へと渡したのかマクマードは解説していった。

そしてそれを終えた後、マクマードはこう切り出した。

「今回の事件に責任を感じ、ジャスレイ・ドノミコルスは遺書を残し、自ら命を絶ちました……今回地球へと支援を行わせていただいたのは、自らの資産を使って被災地への最大限の支援を行ってほしいという彼の遺言に従っての行動でございます。事が起きてしまった以上、彼に責任が無いと言うわけではありません。しかしながら、せめて彼の誠意だけは受け取って頂きたいのです」

そしてその後のマクマードの謝罪の言葉により、会見は終わりを告げた。

この会見によりテイワズには少なくない悪評と共に圧倒的な同情の声が募る事となり、結果的にマクマードが責任を取って『表向きには』会長職を辞任する事にはなったものの、それ以外の大きな傷を負うことは無く今回の一件をやり過ごした。

反対にこの一件を内々で対処する事ができなくなったギャラルホルン側は、クジャン家の完全なお取り潰しを決定。

そしてその混乱を除く為に、古い法に従ってイオク・クジャン公の死刑が確定となってしまったのであった……

「どうだ、ジャスレイ？いや、もうその名前は使えねぇな。賭けに乗って良かっただろう？」

「……なんで、なんで親父、ここまでしてくれるんだよ……テイワズの会長を、辞任って……！」

「あのな、もう盃を割っちまったがお前は俺の息子だったんだぞ？可愛い息子にあんな不名誉を着せられて怒らねぇ親がどこに居る？」

「すまねぇ……すまねぇ……!!俺のせいで、こんな……こんな事に……!!」

「まぁ、元々丁度いい時期ではあったんだ。テイワズもこれからは圏外圏のみならず地球圏も股にかけるべき時代だ。それをやるためには俺がテイワズの顔であり続けるのは無理があるって話だっただけよ。ま、お前は気に入らねぇかもだがこれからは名瀬がテイワズの看板だ。俺は裏方に引っ込んで、圏外圏におけるテイワズの地位を盤石にしてやるさ……ああそうだ、スッキリしたか？」

マクマードは顔を変え、新たな戸籍を得たジャスレイに対してそう問いただした。

種を割れば簡単な方法だ。ジャスレイの資金のほぼ全てを使い支援物資を用意し、被災地とそこにいるギャラルホルンに渡す事でテイワズに対する悪感情を軽減した上で、事実を全て話しただけだ。ジャスレイが罪の意識に耐えられず自殺した、という大法螺を除けばだが。

そしてその証拠として、船内に入っていた取引時の映像データもマスコミに渡している為、これらは重要な証拠として取り上げられる事となり、検証の結果渡した側であるジャスレイに対する不名誉は消え、その分の不満が受け取った側のイオクへと向かった訳である。

金で解決出来るなら金で解決したほうが良いのである。この場合、マクマードはテイワズの信用を守る為にジャスレイが溜め込んでいた資金を使った訳であった。

「ええ……最っ高にスッキリしやしたよ!!あの野郎が死刑って聞いて、俺ぁ心が晴れやした……今まで、お世話になりやした。このご恩は一生忘れません……!!」

「ああ……あばよジャスレイ。お前のことだから何も心配しちゃいねえが、木星圏で1からやり直しやがれ。達者でな」

そう言ってジャスレイはマクマードの元を去っていった。

これから、昔マクマードが使っていたという古い船を一隻貰ってジャスレイは木星圏

へと旅立つ手筈である。自身の私財は全て手渡した為、本当に1からの再スタートとなる。

それでもジャスレイの心は晴れやかだった。自身を貶めた相手は破滅し、自身がここまでマクマードに買われていたのだと知れた以上もはやそれすらもバネにしてどこにでも行けそうだとジャスレイは思うのだった。

そうして船に到着すると、ジャスレイは先に船に乗り込んでいた者の存在に気がついた。

それは、ジャスレイの直属の部下達であった。

『JPTトラスト』は代表のジャスレイが死んだ事になり、解体されその社員の多くはテイワズの別の部門へと再就職する事となった。

しかし彼らはそれを選ばず、ジャスレイが顔を変えて生きている事を知ると一緒に付いていく事を選んだ者達であった。

「アニキ、遅いッスよ!!」

「……本当に付いてくのかよお前ら。1から再スタートで暫くなんにもねぇぞ?」

「アニキの隣が俺らの場所ですからね。アニキが行くなら俺らもその隣に立つだけっす

よ」

「物好きな野郎共め……よし、お前ら！木星圏に向けて出航だぁ!!」

「「オッス、アニキ!!」」

こうして彼らは木星圏へと旅立つ。木星圏には木星圏なりの稼ぎ方がある。再び稼いで必ず成り上がると心に誓って、彼らは歳星を後にした。

【速報】名瀬・蛇亜瓶氏、テイワズ若頭就任【次期後継者決定か!?】

「お久しぶりです名瀬の兄貴……いえ、若頭」
「あー、やめろやめろ。兄貴のままで構わねぇよ兄弟。お前にまでそんな風に言われたら尻の座りが悪くなっちまう。まだ正式に就任した訳じゃねーからな」
向かいの席に座るオルガに対して名瀬は革張りのソファーに座りながらフランクにそう言った。隣に座るアミダはその様子に苦笑いしながら話を続けた。
「最近親しい人相手に若頭って言われると何時もこう返すんだよ、この人。ま、もう後継ぐ事には変わりないんだから良いじゃないか。いい加減観念しなって」
「まだ慣れねぇんだ。勘弁してくれ……俺はまだまだお前たちと一緒に気楽な商売がしたかったんだがなぁ。ま、テイワズの一大事だ。仕方ねぇとは思うが何分急でなぁ」
「しかしびっくりしましたよ。名瀬の兄貴が、まさか親父の跡を継いでテイワズの代表になる事が決定したなんて。ここに来るまで聞いてませんでしたから」

そう言ってオルガは出されたカップに注がれた　珈琲を一口飲んだ。隣に座る三日月は差し出されたミルクと角砂糖を加えたものの、オルガは出されたそのままを飲んでいた。デスクワークが増えるとどうしても眠気を抑える為にカフェインが欲しくなる為かよく珈琲を飲むのだが、そうしているうちに段々と何も入れないブラックの珈琲が彼の好みになっていた。

歳星に到着早々、名瀬のテイワズ会長就任の報を聞いて驚愕したオルガ達はその詳細を聞く為に予定を変更して注文していたＭＳの搬入はユージンらに任せ、オルガと三日月は名瀬の住居でありターゼンズの旗艦であるハンマーヘッドへ一足先にやって来ていたのであった。

「まあ、事が事なんでな。純粋に喜べるような事でもないんだが」

「事……と言いますと。名瀬の兄貴、それは一体どういう……」

「……ああ、そうだったな。お前たちにはあの時の……ジャスレイの旦那の葬式の時には黙して線香と香典渡してくれと言って詳細は話してなかったか……愉快な話では決して無いが、あの時何があったか話しておくとしよう。今は亡きジャスレイの旦那の名誉の為にもな」

そうして語られていく衝撃的な情報に、オルガの背筋が凍った。先日火星で見ていた

ニュースで暴れていたというモビルアーマーは、なんと火星で発見された物であると言うのだ。

それも自分達も鉱山の作業場の建設という形で間接的に関わっていた、あのハーフメタル採掘場からだ。事の詳細を聞くにつれて、オルガは自分たちがどれだけ薄氷の上で暮らしていたのかを悟る。そして同時に、その脅威に対して自身が出来うる限りの事を成して無事ギャラルホルンへと送り届けたというのに受け取った側の非によって命を自ら断つ事となったジャスレイに同情した。オルガ達鉄華団からするとジャスレイに対してそこまで悪い印象が無かったのもある。金払いのいい依頼主であったし、何より同じテイワズに所属する者同士であるからだ。

しかし同時にオルガはジャスレイについては自身の兄貴分の名瀬との仲があまりよろしくないテイワズの幹部であるという話を他のテイワズ所属の兄貴方達からそれとなく聞いていたので、それに配慮して刺激しないように無礼ではない程度の挨拶をした上で建設業者の鉄血組としての仕事を終えた後はあまりそちらへと干渉しないように心がけていた。それによりこの件には関わりが無かった事は、不幸中の幸いとも言えるかもしれない。

「例え本人が悪くなかろうとも、それを決めるのは世間様ってこったな……だからこそ

ジャスレイの旦那は自分の命と資産を賭けて真相を世間に公開する事を選んだって訳だ。しかし、あれを地球に持ち込んだ事には変わりない。だからその分の責任は親父が取って、テイワズの会長職を辞任する事になったって形だな。だから、単純には祝えねぇって訳だ」

「……すいません兄貴。そんな一大事に俺達は何も知らず……」

「勘違いすんなよ。この件に関してお前達ができる事は何も無かった。強いて言うなら黙してジャスレイの旦那の葬式に香典と線香を渡す事位だな。そしてその指示に対して何事かと問わずに粛々と従ってくれただけで十分俺達は助かった。特にお前達が気にするべき事じゃない」

「……そう言ってくれると助かります。ですが、俺達はまだまだ兄貴達に受けた恩を返しきれてません。俺達鉄華団にできる事があれば、何時でもお声掛けください、兄貴」

「ああ、その日が来る事を楽しみに待ってるぜ……さて、しみったれた話はここまでにしてだ。お互いの近況でも話し合おうぜ兄弟。まあ、俺はテイワズの後継者になっちまったのとジャスレイの旦那の遺言の支援物資の搬入作業で最近まで慌ただしい日々を過ごしてた事位しか話す事は無いがな。そうだ、暁は元気にしてるか？三日月」

「えっと……うん。おかげ様で元気に育ってるよ。最近はよく動くようになってきたから、ますます目が離せなくなってきたかな」

急に話を振られて若干困った表情をしつつも、三日月は嬉しそうに暁の事を語った。
今まで一度も見る事の無かった三日月のその様子に面を食らった名瀬は、一瞬驚いた表情をするも三日月が父親の顔をしている事に気がつくとニッカリ笑った。
名瀬も幾人もの子供を持つ一人の父親である。それ故に彼が父親としてやって行けているのか少し不安であったのだが、この様子なら問題無さそうで一安心したのであった。

「……なんだ、思ったより心配要らなかったみたいだな。良い顔するようになったじゃねーか」
「そう、かな。何時も気を張り詰めてると、暁が泣いちゃうから辞めただけなんだけど」
「私も驚いた。三日月あんたそんな顔も出来たのか。うん、前よりも今のほうが何倍も男前だよ……っと、そういえばオルガ、あんたはそういう相手っているのかい？」
「!?い、いえ、俺にはそういう相手は居ませんね。まあ、そりゃ羨ましくは思いますけど……普通に、相手が居ませんからね。うちは男所帯ですから」
「そうかい？ま、あんたも良い男だからねぇ。いつか自然といい人が見つかるよ。私のこの人みたいに、ね？」
そう言ってアミダは微笑んだ。その後もお互い会話は弾み、穏やかな時間が流れて

いった。

お互い忙しい身である為に中々こうして会えないものの、オルガの鉄華団と名瀬のタービンズは二年前と比べると更に打ち解けており、当人同士も更に遠慮のない仲の良い関係性を築いていたのであった。

「これが、ウチで試験運用するって話の新型か。仮面被ってるみたいな面構えしてるな」

テイワズの重工業産業部門である【エウロ・エレクトロニクス社】が所有するＭＳ工房に訪れていた昭弘は、整備場にて今回鉄華団が導入するＭＳを眺めてそう言った。

「そう、これが私の新しい機体の辟邪!!まだ量産体制が整ってないから獅電よりもちょっとお高いけど、百里並に早くて、百錬並に馬力もあるいい子なのよ、この機体!!」

鉄華団がＭＳ工房へ向かうと聞いてその案内を買って出たラフタが昭弘の隣に立ってそう言った。幸い、今はラフタも昭弘も割り当てられた仕事は無い為こうして時間を潰しても問題無かった為である。

タービンズのエースの一人であるラフタは辟邪の前世代機に当たる百里を扱ってい

た経験から辟邪のテストパイロットをエウロ・エレクトロニクス社からターンビンズへと委託する形で抜擢された。その甲斐あって辟邪は地上戦闘時のセッティング以外はほぼ完成し、先行量産型が数機既に完成している。この辟邪の内稼働機を2機、予備機1機の合計3機を鉄華団は受け取る予定である。

そして今回鉄華団が獅電を格安で追加購入する条件として課せられたのはこの辟邪の運用のデータを提供する事であった。一見鉄華団にとってかなり優位に見える取引であるが、これにはちゃんとした理由があり鉄華団が海賊のMSから戦利品として入手したエイハブリアクターの取引先が基本的にエウロ・エレクトロニクス社だからだ。

あちら側からしても鉄華団は貴重なエイハブリアクターをよく提供してくれるお得意様である為、バルバトスのルプスへの改修依頼の受付や獅電の格安提供等サービスを怠らない。

それでいてリアクターの卸値も適正価格である為オルガはその義理を守り、基本的にはエウロ・エレクトロニクス社へ鉄華団が手放すリアクターは提供するという形がこの二年で出来上がっていた。この辟邪や受け取る獅電に使われているエイハブリアクターも元は鉄華団が狩った海賊が所有していたMSの物の再調整品である。

「百里に比べるとクセがなさすぎてつまらないと最初は思ったけど、最初だけだったわ。

反応速度がとっても良くてねー……これなら上手く使えば阿頼耶識使いよりも素早く動けるかもって感じね。これで、エドモントンの時みたいには行かないわ！」

「そいつは楽しみだ。また今度訓練に付き合って貰ってもいいか？」

「いいね。私も早くこの機体で阿頼耶識持ちと模擬戦してみたかったのよ！実はアジー達と一緒に帰りのイサリビに乗せてもらう予定だから、鉄華団の本部に付いたらやりましょ！」

「……ん？ああ、前言ってたあの話か。忙しかったんじゃ……良いのか？」

「辟邪のテストパイロットとしての契約期間も終わったからね。教官役、足りてないんでしょ？　だーりんも、暫く歳星を離れられないみたいから私たちＭＳパイロットも暫くの間暇なの。だからそっちを手伝う事にしたんだ」

現在名瀬はマクマードの後を正式に継ぐ為に活動中であり、様々な根回しやらノウハウの継承などを行っている最中である。その家族であるタービンズも当然そのサポートに回っている。その為現在輸送業はどうしても外せない要件を除いて臨時休業中であり、手が空く人間も出てきている。

普段輸送業を行う際に護衛戦力として働くラフタやアジー等のＭＳパイロットは全員ではないもののそう言った側の人材であり、その間どうせならと兼ねてから予定して

いた鉄華団への出向業務を行ってしまおうという話であった。ラフタのテストパイロットへの抜擢やアトラの件で他のメンバーが出向していた事があった為流れていた話ではあったが、タービンズ側の予定と噛み合った為に今回実現した形となった。

「じゃあまたアジーさんやラフタと暫く一緒に仕事出来るんだな。ありがてぇ話だ。ダンテも新入りに教える人手が足りねぇってボヤいてたからな」

「でしょ?暫くよろしくね、昭弘」

そう言ってラフタは笑顔で昭弘の横に立ち、話を続けていった。話題は様々で、お互い最近何をやっていたかの世間話から、ＭＳ戦での情報交換、テイワズや火星の最近の情勢と様々な話に花を咲かせていった。

そんな二人を見つけて、今回の搬入の件で声をかけようとしたもののその雰囲気を察してタービンズや鉄華団のメンバーはそっとしていた。タービンズは言わずもがな、男所帯な鉄華団メンバーに関しても三日月とアトラ、そしてクーデリアをよく見ている為か野暮な事については察せるように成長しているようである。

昭弘の事を羨ましがりながらも、彼らは自分の任された仕事を果たす為に新たに得た

獅電の搬入と確認をしっかり行った。

おまけ『オーガス家の休日』

鉄華団がテイワズへ注文していたＭＳを受け取りに行く一週間ほど前、クーデリアとアトラは同じ日に合わせて休暇を取っていた。

「こ、これで抱え方は合ってますよね、アトラさんっ。苦しくないですか、暁」

「うん、それで大丈夫だよクーデリアさん」

「あうー」

アドモス商会での仕事で多忙な日々を送っているクーデリアではあるが、何処かの団長のように事務仕事の人手が足りていない訳でもワーカーホリックという訳でも無く、何処かのセブンスターズの二人のように休むに休めない状況に陥っている訳でもない為休む日はしっかりと休んでいた。

今日は三日月の仕事が午前中に終わるという話である為、アトラも共に休暇を取り午後から一家水入らずで過ごす事にしたのである。特に何処かに行く、という予定がある訳ではないがクーデリアは普段アドモス商会に居る為にこうしてゆっくりと一緒にいる事が中々出来ない為こうした時間を貴重に感じていた。

「あーうぅ、くーちゃ」

「久しぶりね、暁。クーちゃんですよー」

「きゃっきゃ」

こうして暁を抱っこさせてもらったことは何回かあったが、未だクーデリアは暁を抱える事に慣れずにいた。いつも自分よりも背丈の小さいアトラがずっと抱っこしている姿を見て、母親の偉大さを感じずにはいられない。

いずれ、いつか自分と三日月との子が産まれた時に自分もこうなれると良いなと、そんな事を考えながらクーデリアは危険がないように、暁が苦しくならないように注意しながら暁を抱っこしてあやした。

「また暁、大きくなってますね。子供の成長って、本当に早い……そう言えば、暁ハイハイ出来るようになったんですよね。この前送られてきた動画で見て、びっくりしました」

「うん。実は昨日ね、暁が掴まり立ちしてたの!!」
「え、ほ、本当ですか!?」
「ただ、その時私も朝の準備で忙しくって、写真も取れなかったからその時の姿は見せられないけど……三日月やクーデリアさんにも、見せたかったなぁ」
「いえ、それが聞けただけでも嬉しいです。凄いね、暁」
「うー?」
「まあ、良いことだけどそれだけじゃ無いんけどね。良く動くようになったから、ますます目が離せなくなってきてるし……ターピンズのお姉さん達に色々と教えてもらって、ほんとに良かったと思うよ。この部屋に敷いてるマットも、お姉さん達に教えてもらって敷いた物なんだ」

三日月とアトラ、そして暁が住むこの寮は元々鉄華団本部の寮でも広いスペースがある場所だった。CGSから鉄華団に変わる際に退職した大人達が使用していた場所であった為使われてなかったものの、アトラが暁を妊娠した事をきっかけに『妊婦と旦那を別々の場所で住まわせるのもどうなんだ』と考えたオルガが気を使ってかつて大人達が使っていたベット等の家具を片付けて用意した場所である。後に名瀬に三日月とオルガが頭を下げて助けを求めた事で鉄華団に派遣された子育てや出産に対する知識の

ある名瀬の嫁達によって可能な限り赤ん坊を育てるのに支障のない状態に改修され、結果基本ベットの鉄華団では珍しいベットではなく布団を寝具にする部屋になった。暁の為のスペースには柔らかいマットが敷かれており、暁が成長してハイハイしたり歩くようになって転んでも怪我しないように配慮されている。

「はい、クーデリアさん。いつものコーン茶淹れてきたよ。暁、クーデリアさんお茶飲むからこっちにおいで」

「あ、すいませんアトラさん。このお茶美味しいですよね」

そう言ってクーデリアは暁をアトラに渡すとテーブルに置かれた自分用のマグカップを受け取り、桜農園印のコーン茶を一口飲んだ。

ゆっくりとした、居心地の良い時間が過ぎていく。二年前に地球へ向かう前から、実の両親と疎遠になっていたクーデリアにとってアトラと三日月と暁のいるこの場所は唯一心から休める場所だ。

そして、何よりも。

「ただいまアトラ、クーデリア」

「あ、三日月。おかえり！」

「おかえりなさい、三日月」

「……！ぱーぱ！ぱーぱ!!」
「暁も、ただいま。今からお休みだけど、今日はどうしようか」

愛する人に『おかえりなさい』と言えて、『ただいま』と返してくれるこの場所がクーデリアは大好きになりつつあった。

オーガス家の休日が始まる。

何てことも無い、平穏な一日。三日月やオルガ、鉄華団の皆が足掻き続けてやっと掴んだ、そんな一日が。

新たな仕事

「あうー」
「おー、よしよし。俺を見て泣かないってのは驚いたぞ。肝の据わり具合はお前さんに似てるな、三日月」
「うん。暁は人見知りしない子だから。他の団員達相手にも、そんなに誰かを嫌ったりしないかな」
　マクマードが抱っこした暁を見て、その表情を軽く緩めた。自分を見て、無邪気に笑いかけてきたからだ。
「そうかそうか、暁か……いい名前をつけてもらったな、坊主。こうして赤ん坊抱いた事は何度かあったが、なんでか俺が抱えると皆泣きだしちまってなぁ……自分の娘にすらその有様よ。だからこうして赤ん坊相手に笑いかけられるのは初めてなんだ。ありがとよ、暁。おかげでいい経験が出来た。ジジイの気まぐれを聞いてもらって悪かったな、三日月。ほれ、お前の父親の元に帰りな」

そう言うとマクマードは三日月に暁を渡し、再び自身の席に着いた。一瞬葉巻を吸おうとして……その手を伸ばすのをやめた。

せっかく珍しく好かれた赤ん坊に嫌われるのが嫌だったのか、それとも単なる気遣いか。圏外圏で一番恐ろしい男も、今は只の好々爺に見えた。

「久しぶりだなお前たち。鉄華団の活躍の声はそれなりに聞いてるぞ。なんでも火星で活動してた海賊共を狩り尽す勢いで討伐したそうじゃねぇか。相変わらず元気にやってるようで何よりだ」

「はい、お久しぶりです親父」

エウロ・エレクトロニクス社から注文していたＭＳをホタルビに搬入を終えた後、オルガ達鉄華団はマクマードに呼び出しを受けた。久しぶりに顔を出せと言う指示と、可能なら顔が見たいので三日月のガキも連れてきてくれという伝言を付けてである。

鉄華団の団長であるオルガと、副団長のユージン。その付き添い人である三日月。そして三日月の息子である暁の四人が、マクマードの部屋へと招かれていた。

「名瀬に聞いているとは思うが、俺は名瀬の引き継ぎが終わり次第会社としてのテイワズの会長から表向き退く事になる。まあ、裏側に関してはしばらく現役でいるつもりだ

から、まだ大して組織の体制は変わらんがな」

表向きはテイワズの会長職を辞任する事で今回の件の責任を取る事となっているマクマードだが、裏側……マフィアの首領としての座から退くつもりは『まだ』更々無い。名瀬に会長職を譲った後は圏外圏での非合法寄りのテイワズの活動を一手に引き受ける気であるからだ。名瀬が地球圏や比較的真っ当な仕事を担当する顔役として活動する裏で、マクマードが健在であると圏外圏で示し、活動する……テイワズ内でそういった役割分担を行なう事にしたのである。

圏外圏では絶大な力を持つテイワズも地球圏では一企業でしか無い為、地球圏での顔役を名瀬に譲る事でジャスレイの責任を負ってマクマードが辞任した事を示せればそれで良い為だ。

ようは地球に顔を出すのは名瀬だけにすれば良い訳である。交易を行っているアーブラウとの交渉役も元々名瀬だ。何ら問題無かった。

対して圏外圏では、マクマードの名がテイワズに対する畏怖を持たせている側面がある為にすぐに名瀬が全てを任せるわけにはいかないものの、圏外圏と地球圏には距離という果てしなく分厚い壁が存在している事から圏外圏での活動が地球圏に伝わる事はほぼ無い。この事から、マクマードが本当の意味で現役を退く事はまだ先の話となるで

あろう。

マクマードもテイワズの幹部達も最終的には名瀬に全てを引き継がせる予定ではあるが、それを行なうにはまだ時間も準備も整っていないからだ。その結果の現実的な落とし所として、名瀬は『企業としてのテイワズの会長職』と『マフィアとしてのテイワズの若頭』に就任する事になったのであった。

「弟分として、あいつの事をお前達も支えてやってくれよ。テイワズの看板は、中々重いもんだぞ」

「……はい!!」

そのマクマードの一言に、オルガは威勢良く応えた。

かつては追い詰められた事による焦りによって迷走を感じられたオルガであったが、今目の前にいる彼にはそれが感じられない。

どうやら名瀬の話は本当であったようだと判断したマクマードは、今の鉄華団にであればこの仕事を任せても問題ないだろうと判断し話を切り出した。

「さて、名瀬の話はここまでにして本題に入るとしようか。今回お前達を呼び付けたの

は鉄華団に対して依頼したい仕事があるからだ」
　そう言ってマクマードは机に置かれたマチ紐付の茶封筒を手に取り、その封を解いてその中身をオルガに対して見せた。
　それは、テイワズが所有する火星のハーフメタル鉱山の土地の権利証だった。
「これは……ジャスレイの叔父貴が管理していた鉱山の権利証、ですか」
「ああ、そうだ。この鉱山に関してはあんな事があったせいでテイワズ内でも扱いに困っていてな。はっきりいえば不良資産扱いだ。そしてあんな事があった以上、下手に手放すにも手放せねぇ……そこでだ。火星を拠点としているお前達に、あの鉱山の調査を依頼したい」
「調査、というと……？」
「まあ、本格的な地質調査というよりかはあの鉱山を掘り返して、どんなもんが埋まってやがるか調べてほしいってだけなんだがな。流石にあんなバケモンが２つも出てくるとは思えんが……万一があったとしても、今のお前達なら押さえきれるだろうと考えての判断だ」
　現在の鉄華団の戦力はテイワズ内でもかなり突出しており、特にＭＳの運用数に関し

ては組織の規模を考えると破格と言っていい。それに加えて、質の面も阿頼耶識使いとそれを活かせるガンダムフレーム機が二機も居るのだ。はっきり言ってこれだけＭＳを揃えているのは火星だと他はギャラルホルン位である。その事を踏まえれば、マクマードの判断は妥当であると言えた。何せ地球で暴れたというＭＡを討伐したというのも、ガンダムフレームのＭＳなのだから。

「そして、何事もなければお前達にあの鉱山を渡して任せたいと思っている。はっきり言って貧乏クジを引かせる事にはなるが……その分上手く行けば見返りも大きい話だ。どうだ、引き受けてはくれねぇか？」

マクマードは口にしなかったものの、テイワズ内でもあのハーフメタル鉱山の扱いに関しては意見が割れており、臭い物には蓋と言わんばかりに閉鎖すべきだという声があれば、あの鉱山に眠るハーフメタルの埋蔵量を考えるとそのまま封鎖するのは余りにも惜しいという声まである。しかし、当然ながら火中の栗を拾うような真似をする者は誰も居らず、あの鉱山の管理を請け負おうとする者は一切現れなかった。

しかし、あんな事があった鉱山だ。そのまま放置しておくのはあまりにも恐ろしい。そこで、火星を拠点とする鉄華団に白羽の矢が立った訳である。

本来の価値であるなら新参者である彼らに渡そう物ならやっかみは避けられないであろう大きな収入源が見込めるシノギであるが、皮肉な事に一番反対意見を出したであろうジャスレイはもう居ない。そうしてテイワズ幹部内では大した反論は出る事なく、この話が鉄華団にやって来たという訳であった。

「……分かりました。この話、鉄華団で引き受けさせて頂きます」

そして、そんな急な話にオルガはこの話を受けるべきか否か一瞬困惑した。しかし今までテイワズに、マクマードや名瀬に受けてきた恩義を少しでも返せる良い機会である事と、もしまた別のＭＡが眠っていたとしてもそんなものが火星にあったままでは皆安心出来ないと考え、マクマードに対してそう応えた。

マクマードから任された鉄華団の新たな仕事。

そんな些細なきっかけから、事態は再び動き出す事となる。

災いの箱の底に残ったそれの存在は、まだ誰にも知られてはいなかった。

幕間【ジュリエッタ・ジュリスの最悪な一ヶ月】

燃え盛り、消そうとしても中々消えない炎。煙に巻かれ、炎に焼かれ、倒壊した建物に押しつぶされ……様々な形で死に絶えていった人々の亡骸。

そんな見たくもない絶望的な光景を目の当たりにしながらも、私達は立ち止まる訳にはいかなかった。

「要救助者を確保!!まだ息があるぞ!!至急担架用意しろ!!」

「消火弾の補充はまだか!?これ以上燃え広がると、街が全部燃えちまうぞ!!」

「……こっちは駄目だ。皆燃えちまってやがる……次の建物に向かうぞ!!少しでも生き残りを見つけ出せ!!」

ギャラルホルン地上本部のMS隊を全滅させ、多くの被害をもたらしたモビルアーマーは討ち取られた。マクギリス・ファリドによって蘇ったバエルの手によって。

しかし、元凶を討ち取っただけでは解決とはいえない。薙ぎ払われたビーム兵器の熱

量はたやすく街を灼熱地獄へと変え、甚大な火災を引き起こした。地域の消防隊やレスキュー隊とギャラルホルンが協力し、消火用の特殊弾を装備させたＭＳに消火活動を行わせたり、燃えてしまった建物を破壊することで火の拡大を抑える活動を行っていた。

「また重傷者が見つかった……この子を、今すぐ病院に運んでくれ!!」
「駄目だ……輸送ヘリが足りねぇ!!このままじゃ、手遅れに……」
そこに水分補給にやってきていたパイロットスーツを身に着けた金髪の少女が、その声に反応してこう返した。
「私がＭＳで搬送します!!受け入れ先の病院に連絡出来る方は居ますか!?」
「ああ、今許可を取って来る!!ちょっと待っててくれ……」

どんな人手も足りていない状況である為に、緊急速報を聞きつけて地球へと降下してきた私達アリアンロッド艦隊のＭＳ部隊もその救助活動に加わり、消火やレスキュー活動に加わっていた。
そこは地獄だった。何の罪もない人々の亡骸がそこら中に転がり、運悪くビームの余波を受けた者は骨さえも残らずグズグズに溶けて死んでいる。
延々と消えない忌々しい炎を食い止めながら、時には生き残った僅かな人々を運ぶ救

助活動を行う生活も、もう始まって一週間になる。
それだけ経って尚、火は盛り続け倒壊した建物に残された人々はまだ沢山残されていた。
ジュリエッタは重傷者の子供の意識が途切れないようにその手を握り、呼びかけ続けながら許可が降りるのを待つ。そうして少し立つと、連絡をしに向かったレスキュー隊員が戻ってきた。
「痛い……痛いよ……お母さん、何処なの……」
「お願い、気を強く持って……！許可は降りましたか!?」
「ああ、今受け入れ先の病院の許可は貰ってきた!!任せたぞ、アリアンロッドの嬢ちゃん!!おい、嬢ちゃんのＭＳを動かすからそこの道を開けてくれ!!」
レスキュー隊の隊員が先導してレギンレイズが動く為の道を確保する。ジュリエッタは自身の機体に乗り込んだ後、重傷者の子供をレスキュー隊員から受け取りレギンレイズを起動させた。
「ジュリエッタ・ジュリス、これより緊急時につきＭＳで重傷者を搬送します!!」
『任せたぞ嬢ちゃん！』

そうスピーカーを通して周囲に伝えた後、ジュリエッタは極力揺れのないように慎重にレギンレイズを加速させ病院へと向かわせた。

ＭＡによる被害、その爪痕は推定で百万人近い怪我人や犠牲者、行方不明者を出すという形で人々の記憶に深く残り続けることとなる。

ビーム兵器が人を殺すのに最適であるとされた理由。それは火災という形で本体が通り過ぎた後も残り続ける性質の悪さにあった。

この二次被害により失われた人命は、むしろＭＡが倒された後の方が多いとまで言われている。

三週間もの間、炎は燃え続け……燃やすものが無くなって、ようやく消火された。しかし、火が収まっても尚ジュリエッタの心は全く晴れなかった。

その焼け焦げた街を見てこれが私達ギャラルホルンが守れなかった物であると痛感した事。そして……この一件が、自身も良く知っているイオク・クジャンがＭＡという危険物を預っておきながら、杜撰な管理の末に暴走させた『人災』である事をニュースで知ったからであった。

（私は、ラスタル様の剣。拾われ、ここまで育ててくれたラスタル様に恩を返す為に、大義の為にそう在ろうとして来た。でも……）

あんな光景を生み出したギャラルホルンに、ラスタルの言う大義などあるのだろうか？

少なくとも、ジュリエッタはかつての自分ほどそれを信じられなくなっていた。

あの日、助けようとしていた子供をジュリエッタは救う事が出来なかった。容態が急変した事で意識を失い、病院内に子供を抱えて連れて行った時にはもう、息を引き取っていた。

自身の胸の中で冷たくなっていくその姿を、ジュリエッタは忘れる事が出来なかった。

理想と現実の剥離に、ジュリエッタは今後も悩み続けることとなる……

鉱山採掘はじめました

ハーフメタル鉱山において、ハーフメタル以外のものが埋まっているのかを地上から確認する事は困難を極める。

理由は簡単だ。磁気や電磁波等を遮断する性質を持つ為、地中へレーダー等で判別を行ったとしてもそれらが遮断される事で逆にそこにあると言うのが分かるハーフメタル以外の存在の特定が極めて困難だからである。その為何が埋まっているか分かったものではない。

そのせいで厄災戦以前の遺物が発掘される事も珍しくない程だ。モビルアーマー程、世間を騒がせる物が出てくる事は滅多にないが。

その為、鉄華団がマクマードから引き受けた新たな仕事である鉱山に埋まっている物の調査の仕方は至ってシンプルな方法となった。それは暫くハーフメタルの採掘を行いつつ、何か変な物が埋まっていたら随時報告する活動をしばらく続けるという地道な物であった。

採掘活動を引き継いで暫くは本体が破壊されたことにより動かなくなったプルーマが数機、掘り出されなかったものが出てきた事があったがＭＡが出てきた地層から離れるとそういった物も出てくる事は無くなり、鉱山故に危険はあるがそういった危険物は出てくることは無くなりつつあった。

「タカキー！採掘し終わったハーフメタルが荷台一杯になったから、新しい荷台運んでくるな!!」
「うん、足元に気を付けてねライド」

満タンになった荷台を連結させたモビルワーカーに乗ったライドが、現場から出ていくのを尻目にタカキは自身の乗るＭＷの運転席に座りながら情報端末に写した地図を眺めた。
それはどこをどう掘るのかの作業計画書であり、それを見ながら今何処まで掘り進めたかをタカキはその端末上に書き込んでいた。今日の作業を終えた後に団長達に渡す報告書であるので、なるべく正確に記す事を心がけながらタカキは端末に慣れた手つきで入力していく。

タカキは勉強などを学ぶ事に興味を持つようになった鉄華団のメンバーの中でも特に秀才な努力家の一人だ。唯一の家族である妹を養って行かなければならなかったが故にこれまでは興味を持っていても学ぶ機会を得られなかった。

それはタカキだけでなく、鉄華団の殆どのメンバー達も同じであった。学ぶにしても明日の飯さえ定かではない状況では、そんなことは考えていられないからである。

しかし暁が産まれた時の経験から文字が読めない事がどれほど無力なのか思い知り、危機感を抱いた一部の団員たちが自主的に行動を起こした事がきっかけにそんな状況は変わりつつある。

学ぼうとする意欲のある団員達が休みの日に集まって自主的な勉強会を何度も開いたのである。それを見たオルガがそういう空気が鉄華団に出来たことに驚きつつも、学のある団員を増やすチャンスと見て鉄は熱いうちに叩けと言わんばかりに必要経費として情報端末を追加で購入し、それに教科書等のデータを入れて空き家であった鉄華団本部の一室に設置した。この一室と情報端末は鉄華団の団員であるならば誰でも使えるよう取り計らわれ、勉強に興味を持っていた団員達は嬉々として集まる人気のある場所となっていった。

こうした取り組みによりタカキも勉強する事ができる機会が得られた事で文字や計算、事務の仕方などを学んでいくと乾いたスポンジが水を吸い込むようにそれらを覚えていき、今では鉄華団の貴重な事務戦力の一人となったのであった。

（皆、ここに来た時とは見間違えるほど生き生きと仕事してるよなぁ……おかげでいいペースで採掘が進んでる）

この鉱山での採鉱を行っているのは、基本的にＭＷを扱える団員であり……阿頼耶識持ちの団員達だ。ＭＡが何らかの理由で機能停止していた場合、エイハブリアクターの反応を感知して再起動する可能性があるとメネリクから知らされたからであった。

その為ＭＳは扱えないので、その代わりに水素エンジンが動力であるＭＷが駆り出され、武装を取り外し採掘用のアタッチメントに付け替えて重機として使いながら、鉄華団は鉱山を掘り進めていた。

（……またハーフメタルの層までたどり着いた、か。よし、ハーフメタルは掘り当てられたら担当の団員たちにボーナス出すぞって団長が言ってたから、嬉しい……っていけないいけない。本来の目的はハーフメタルの採掘じゃなくて鉱山の調査なんだから、おか

しなものが無いか気をつけなきゃ……）

緩んだ気を引き締め直し、タカキは報告書を書き進めていく。

今ＭＷを動かしているのはタカキ達鉄華団創立からいる古参のメンバーもいるものの、新たに入った阿頼耶識を着けた元ヒューマンデブリの新入り達が多くを占めていた。

火星に出没する大半の海賊達を狩り尽くす前まで鉄華団が積極的に行っていた海賊討伐の依頼において、討伐した海賊たちの所有物は依頼人が返してほしいという物以外は基本全て討伐した者達の物となる事が基本であった。その中には物扱いされた人間であるヒューマンデブリも当然含まれており、海賊たちの保有していたヒューマンデブリを成功報酬として渡される事が何度かあったからである。

その大半は行く宛も頼る家族も居ない。放り出した所でそのままでは食っていく手段もない。一歩間違えば同じような立場となっていたであろう鉄華団の面々がそんな彼らを見捨てられる訳もなく、ましてや売り払うなど以ての外と考えるのは当然であった。

無論、鉄華団もなんの策も無く彼らをただ受け入れた訳でもない。鉄華団が中心になって巻き起こった二年前の事件以来、阿頼耶識を施術したヒューマンデブリの少年兵

をＭＳやＭＷに乗せるという手法は有効と判断されてしまい海賊などの非合法組織を中心に活用されてしまっていた。そして運良く生き残って鉄華団に手渡されたヒューマンデブリ達も大半が阿頼耶識を無理やり施術され、生き残った者達ばかりだったのである。

この現状に昭弘達元ヒューマンデブリ組の団員たちは行き場のない怒りを感じざるを得なかったものの、同時に彼らの能力があれば働ける職場を用意できるという意味でもあった。

そして、自然と先にいた団員は後から入ってきた団員たちに色々と教える立場となる訳で、フウカという妹が居る為か明るく面倒見のいいタカキは今や鉄華団の年少組のまとめ役となりつつあった。それ故に、年少組の多くが参加すると決めたこのハーフメタル鉱山の採掘にはタカキは班長として参加する事になったのであった。

（それにしてもなんで、ハーフメタルの層がこんなに段階的に続いているんだろう？まるでこれじゃこの層がこういう風に作られた物にも見えるけど……いや、単なる偶然かな）

ハーフメタルが出てきた層を並べて見ると、一定間隔でそれがある事に気がついたタ

カキはまるで人工的にそれが配置された物のように感じた。しかしハーフメタルを精製する技術はあっても、ハーフメタルそのものを生み出す技術は現存していない。その為タカキはその考えを偶然と否定して、報告書を書くことに専念した。

そうして暫く時間が立ち、報告書を書き終え間違えのないか読み返していると、タカキの乗るＭＷの隣にもう一台のＭＷが隣に止まった。それはかつて昭弘の乗っていたＭＷであり、今は昭弘の弟の一人となったアストンがそれを引き継いで乗っていた。

「タカキ、ここに居たか。そろそろ昼飯だから呼んできてくれって頼まれたんだけど……」

「あれ?もうそんな時間か!ありがとアストン、つい書くのに夢中になっちゃって……よし、書き間違えも無し!午前の仕事の分は書き終えた。ご飯食べたら、また午後も頑張ろう」

「うん。今日の昼はトルティーヤだって。桜農園から、畑仕事の手伝いのお返しに貰った野菜があるらしいよ」

「農園の野菜、美味しいから楽しみだなぁ。それじゃ、行こうかアストン」

そういうとタカキは膝の上に端末を置いてＭＷのエンジンを入れた。

これが一時の平穏だという事は分かっている。だが願わくばこの平穏が少しでも長く続いてほしいとタカキは思いながらＭＷを採掘拠点へと向かわせた。

月外縁軌道統合艦隊【アリアンロッド】の任務は地球圏への敵対勢力の侵入の阻止である。故に通常時は各コロニーへ艦艇を駐留させ、それらへの監視を行っている。

しかし、有事の際は必要な艦艇を集結させ、艦隊を編成し事態の対処へ当たる。今回の事件である地上本部への部隊の投下はこれに該当する行為だ。地上本部からの応援要請に応え、ジュリエッタ達がＭＳに乗ってやってきたのもその為である。

彼らにとって想定外であったのは、その被害の大きさであったであろう。たった一日、たった一日あのＭＡが暴れただけで被害者数は百万人を超え、被害のあった街は七割が焼失した。

彼らが到着した頃には既にマクギリスによって起動させられたガンダム・バエルによってＭＡ、ハシュマル・フォールンは倒されていたが故にその任務は燃える街の消火活動と住人の救助へと切り替えられ、彼らのＭＳはそれらに対する戦力として運用されたのだ。

だが、しかしだ。彼らはそれを誇る事など出来はしなかった。あまりにも凄惨な光景だった。

我が子を守るためにお腹を抱え、そのまま火に焼け死んだ妊婦。水を求めて、焼け爛れた皮膚を引きずって川に飛び込んだであろう死体の山。煙と火に巻かれて、建物の屋上まで逃げたものの逃げる道がなくなり、追い詰められ身投げした者。瓦礫を退け、なんとか助け出したものの搬送中に意識を失い命を落とした子供……この世の地獄とは、まさにあのような光景を表すのだろうか。皆必死に救助へと尽力したが、それでも助けられた命はわずかであり、大半は炎と共に灰と化した。故に自らの無力さを呪うように、彼らは皆悲痛な表情を浮かべながら職務を遂行する事だけを考えて動いていた。

そんな時だ。その地獄を作り出した原因が自分達の同僚であり、ギャラルホルンのセブンスターズであった存在にあったのだと判明したのは。

そして、隊員の一人が申し訳無さから拳銃自殺を行った事を皮切りに、地上に降りたアリアンロッドのＭＳ隊のメンバーには謹慎と精神療養を言い渡された。彼はクジャン家に仕える家の出身者であり、それ故にあの惨劇を自らの責任として受け止めてしまったのだ。

あまりにも、あの場で私達は無力だった。
私は私を表すアイデンティティの喪失を感じつつあった。妄信的な正義を、あの地獄を見て体験して信じ続けられはしなかった。
これは私達ギャラルホルンが……招いた『人災』だった。燃えた人々は守るべき地球の人々だった。
あれ程信じていた筈のギャラルホルンの大義とは、一体何だったのであろうか？ラスタル様には申し訳無い気持ちでいっぱいだが、そう思わずにはいられなくなってしまった。

「……どうして、どうしてこんな事に……っ！」

彼の墓前で、私は思わず声が漏れた。同僚である隊員の墓に添えられた花は少ない。聞けば彼の家族もクジャン家の領地に住んでおり、未だに行方不明であるそうだ。
珍しい話ではない。あまりにも一気に多くの人間が死にすぎた。このギャラルホルンが保有する共同墓所にも、多くの人間が足を運んでおり、その多くが悲しみに暮れている。墓に入る遺体があるだけでもマシな方だ。焼けてしまい損傷が酷く、身元不明の遺体はあまりにも多かった。

彼とはあの事件が起こるまでは、言葉を交わす事もあまり無かった隊員の一人だった。だが、アリアンロッド艦隊の同僚として、あの地獄を共に駆けた戦友だった。任務に忠実で、とても真面目な人だった。

だからこそ、イオク様……いや、イオク・クジャンの行ったあまりにも無知な行いを自らの責任と感じてしまったのだろう。現場で、その被害を体感したが故に自分自身を許せなくなってしまったのかもしれない。

墓に眠る戦友に花を添えて、祈る。こんな形での別れとなるとは思ってもいなかった彼に、せめてもの安らぎを願って。

「……ジュリエッタ。お前もここに来ていたか」

「ラスタル、様……!?な、何故ここに」

「お前と同じ理由だ。ようやく、私が居なくともある程度は回る程度には事態も落ち着いてきたからな……自分の不手際で死なせてしまった部下の墓参り位、しても許されるだろう」

そう言うと、護衛であろう隊員を数名連れて現れたラスタルは手にした花を墓前に置

いた。

この墓は、ラスタルが手配した物だ。彼の遺体の引き取り先であろう遺族もまた例の事件で全滅していると知らされたラスタルがせめてもの償いにと用意した物であった。それ故に、この場所に死んだ部下が眠っている事を知っていたのである。

「……本当ならば、お前の好きだった酒を添えてやりたかったのだが。そういった嗜好品は今被災者達に回していてな……すまんが暫く後になる」

そう言うと、ラスタルは少しの間目を瞑り部下の冥福を祈った。

ラスタル・エリオン最大の誤算は、イオク・クジャンの愚かさを測り違えた事であった。彼もまた先代クジャン公という色眼鏡を通して、彼の事を見ていたのである。それ故にまだ若く、責任ある立場の人間としての教育が不十分であると言った程度にしか感じていなかったのだ。

ラスタルもイオクを過大評価しているつもりはなかった。だが、病に倒れ急死するその時までギャラルホルン、ひいては地球圏の平和を維持してきた先代クジャン公の息子であるという事実が彼の目を曇らせた。流石に、このような愚行を行う男だとは想定していなかったのである。

その結果がこれだけの被害者を出し、挙句自身の直属の部下にすら死人を出した。その事実に後悔を感じざるを得ないものの、最早何もかもが遅い。

流石に、心に堪える物があった。

「……申し訳ありませんラスタル様。見苦しい所をお見せします……ッ!!」

「私の事は気にするな。先に、本部へ戻らせてもらおう……」

そう言って、ラスタルは護衛を連れて墓所を去っていった。

ジュリエッタは嗚咽の声を漏らした。悲しくとも、立場故に涙を流す事が出来ない自らの主の代わりに、声にならぬ声を上げて涙を流し続けた。

【厄祭の再演事件】から、一月。たった一日のうちに起きた大きな喪失から、人々は未だ立ち上がれずに居る者が大半であった。

火星の王は、カクテルにすると飲みやすい

幕間『ラフタの決意』

日課のシミュレーターによる鉄華団との模擬戦を終えたラフタとアジーは、整備員の邪魔にならないように格納庫を離れ、連絡通路に置かれたベンチに座りながら話をしていた。

「そっか。アジーはだーりんの輸送業を引き継ぐ気なんだ」

「……うん。ハンマーヘッドの船長にならないかって名瀬と姐さんから話が来ててね。この仕事が終わってテイワズに戻ったら、名瀬の代わりに私が受け継ぐ予定なんだ」

まあ、名瀬がテイワズの会長としての仕事を熟すのに必要な人員をターピンズから

引っ張っていくから、元のタービンズよりは少し規模は小さくなるけどねとアジーはそう言った。

名瀬の会長就任により、現在は輸送業を臨時休業しつつタービンズ総出でマクマードからの引き継ぎ作業を行っている。今のラフタやアジー達のように手が空いている面々は鉄華団へ出向してきているが、あくまでそれも一部に過ぎない。

しかし引き継ぎが終われば、タービンズのメンバー全員がテイワズに留まっている訳にもいかない訳である。

何せ今のタービンズはテイワズでも数少ない地球への正式な交易許可を持った貴重な企業。その利益は計り知れない物だ。

故に名瀬が現場に行けなくなってしまったとしてもその動きを止める訳にはいかない。それ故に、名瀬の居ないタービンズを指揮する新たなまとめ役が必要になったのである。

そしてそれに対して、名瀬とアミダは話し合いの末にアジーを指名した。ＭＳ乗りである為に度胸があり、冷静で判断力のあるアジーなら問題ないだろう、と。

初めはただのＭＳ乗りである自分がそんな大任を任されて良いのだろうかと悩みはしたものの、名瀬にそんなアジーだからこそ俺達の居場所を任せられると言われ、それ

を引き受けたのであった。

「それで、あんたはどうするの？」
「どうって……今まで通りＭＳ乗り続けるよ。私は偉くなるなんて柄じゃないし」
「そういう事じゃ無くて、ね。良いの？昭弘の事？」
「……あー、もしかしてお見通し？」
「割と前から気がついてたよ。良いじゃない、あんな真っ直ぐな奴今の時代早々居ないよ？」

アジーのその問いに、ばつが悪い表情でラフタはアジーに顔を向けて返答した。

「分かってるよ。でも私まだ、姐さんやだーりんに受けた恩を返しきれてないもん……今、大事な時期なのに私だけタービンズを抜けるなんて……」
「……ラフタ。本当にそれでいいんだったら、私はこれ以上何も言わない。でも、そうじゃないんならこれが最後のチャンスだよ。今までみたいに、入った理由がなし崩し的で、抜ける理由がある子ならタービンズを抜けられるなんて事、早々出来なくなるだろうからね」

ある意味、これが一番名瀬がテイワズの会長になる事を避けていた理由でもあった。

タービンズは、様々な理由を持って集まった名瀬の妻達で構成された組織だ。

ラフタのようにひどい扱いを受けていたが故に保護された者も居れば、自分から名瀬を好いてタービンズに所属した者もいる。

自分の意志でタービンズになった者は、一生名瀬に付いていくつもりでここに来た者達だ。彼女達は良い。だが自分の意志では無く、身寄りや戸籍も無いが故にここに流れ着いた女達も大勢居る。

そう言った女達が自分だけの居場所を見つけた時の為に、タービンズを去っていくという選択肢が特例ではあるが今までは認められていた。

だが、これからはそれも厳しくなるだろう。何せ、名瀬がテイワズの会長になるということはタービンズも全員テイワズ会長の妻や婚約者であると言う事になるのだから。彼女達にもそれ相応の振る舞いというものが求められるようになるのだ。

立場というものは容易に人の自由を奪う。名瀬はそれを理解していたからこそ、これまでテイワズの会長を引き継ぐ事に及び腰になっていたのである。他ならぬ名瀬自身の自由もそうだが、彼の家族達もまたそれに縛られることになるからだ。

愛する家族の自由や意思を守る為に名を上げたにも関わらず、名を上げる事でそれら

が失われては意味が無い。そう考え、タービンズとしての自由さを保つ事のできる程度の地位である現状の維持を第一にこれまで名瀬はマクマードからの昇進の誘いを躱し続けてきた。が、流石の名瀬もテイワズの一大事となっては年貢の収め時と諦めざるを得なかった訳である。

無論、それが許される程の利益をテイワズにもたらし続けてきたからこその行動である。利益を自分たちだけのものとせず、テイワズ系の別企業へ商談を持ち込む事で結果的にタービンズのみならずテイワズ全体が利益を得る事のできる動きを名瀬は商人として得意としていた。

それ故に、テイワズの幹部達も今回の名瀬へのテイワズ会長指名に関して大体が納得して了承している。一番の対抗勢力であったジャスレイは死に、反対派であった者達も発言力を失ったが故の、不幸中の幸いとも言える状況であった。

そうして、テイワズ会長への正式な就任を行う為の準備をしているのが、現状である。

裏を返せば、まだ名瀬は正式な会長では無いが故に今ならまだタービンズを抜ける事も、ギリギリ可能な状況ではあった。

「私は、アンタが幸せになれることが名瀬や姐さんへの一番の恩返しだと思う」

「……アジー」

「ごめん、お節介だったね。この出向の期間が終わるまでは名瀬も正式には会長に就任する訳じゃないと聞いてるし、それまでじっくり考えて決めるといいと思う。大切な事だからね。ただラフタ。親友として、これだけは言わせて」

自分に素直になりな、私はあんたの幸せを願ってるから。とアジーはそう言って借りている自分の部屋に戻って行った。

「……良いのかなぁ。素直になっても……」

はじめは、体力だけが自慢の筋肉バカだと思ってた。何回も何回もシミュレーターを使ったＭＳの模擬戦を挑まれて、その度に返り討ちにしてやった。

唯の筋肉バカじゃないと知ったのは、そうして模擬戦を繰り返していく内に教えた技術を貪欲に取り込んでいくのを横から見ていたからだ。私が苦労して覚えた技術を、何回も何回も愚直なまでに練習して、自分の物にする根気が、昭弘にはあった。その姿に、私も教える事が楽しくなって、昭弘との模擬戦をいつの間にかまだかまだかと待ちわび

るようになった。
それで段々と昭弘自身の事が気になっていって――この気持ちが何なのか、その時の私には良く分からなかった。
それが何なのか分かったのは、歳星のMSドックで昭弘と再会した時だった。
再会した昭弘は、以前よりも大きくなっていた。身体が、というだけでは無い。かつて鉄華団の団員達全員にあった張り詰めた弦のような危うい雰囲気は薄れ、大木のように揺るがない芯のような何かを昭弘は得ていた。
顔を合わせて話しているだけで、次から次へと話したい事が浮かんでくる。
ほんの少しだけ距離と近づけると困ったように照れるその顔を、思いっきりからかってあげたくなる。
その大きな背中に、寄りかかりたくなってしまう。
昭弘の隣に居たいと、思ってしまう。

（惚れた方が負けって、こういう事なのかな……）
「あ、ラフタ。ここに居たのか」
「っ!?あ、あ、昭弘?!ど、どうしたの?!」
「へっ？いや、模擬戦が終わって喉乾いて無いかと思ってな。今食堂から飲み物貰って

来たからそれを渡そうかと……いるか？」
「う、うんうん！一本貰うね！」

ラフタは慌てつつも昭弘の手から飲み物の入ったボトルを勢い良く受け取ると、刺さったストローからそれを飲んだ。

「……ふう、流石昭弘、気が利くじゃん」
「色々教えてもらってるのはこっちだからな。これくらいの気遣いはしなきゃ駄目だろ」
「相変わらず真面目だねー。昭弘って」

誰かを愛したことはあっても、誰かに恋をした事など一度も無かった。
自分がそんなことが出来るとも思っても居なかったが故に、彼女は戸惑った。駄目だと思っていても、それを抑える事など出来はしなかった。
この感情のままに突き進んでいって、その先に何があるのかなど分かりはしない。それでも……この思いを秘めたままにしたら一生後悔すると、そう思った。

（……中途半端は、駄目だ。やるなら、全力で）

それが一番私らしいと、ラフタは決心した。

「昭弘、私決めた」
「……何を、決めたんだ？」
「ちょっと、悩んでた事があって。昭弘の顔見てたら、それに決心がついたの」
「そうか。何だか分からんが……助けになったなら良かった」
「うん……今度の休み、何か用事ある？」
「いや、特には無いんでいつも通り鍛錬と建設の勉強でもしようかと思ってたが……」
「なら、ちょっと私の用事に付き合ってくれない？」
「ん？別に構わないが……」
「ありがと！それじゃ、私部屋に戻るね。また後で」
「ああ、また後でな。ラフタ」

そうしてラフタは、自分の部屋へと戻っていった。
（まずはだーりんと姉さんに、謝る事から、か……確かにタービンズの家族と別れる事は

怖いけど……私は決めたから）

全力を込めた告白をしようと意思を固めたラフタの表情に、もう迷いは無かった。

幕間『火星の王』

夜の鉄華団本部の食堂。普段なら遅い食事を貰いに来たオルガ位しか居ないそこに、少し珍しい面々が集まっていた。

雪之丞やメリビット、メネリクやデクスター等の鉄華団における数少ない大人達と、三日月やオルガ、シノやユージン、チャド、ダンテ等の年長組のメンバー達だ。なぜこのメンバーが集まっているのかと言えば、これがとあるものの試飲会だからである。尚、昭弘は先にそれを口にした事がある事と、今日は夜勤の基地警備の仕事がある事からこの集まりには辞退している。

「これが、坊主の作ってた酒か……無色透明な、一見すると水みてえな酒だな」
「うん。だからびっくりすると思うよ？じゃあ、コルクを抜くね」
そう言って三日月はコルク抜きを使い、ビンの封を解いた。そして、グラスに少量づつ注いでいく。
「ん？なあ三日月、なんでそんな少しづつ注いでるんだ？味見だからか？？」
「……飲めば、分かると思うよ」
その言葉に疑問を口にしたシノの顔に更に疑問が浮かぶ。が、そんな事よりも目の前にある酒が気になって考えるのは後にした。なにせあのアガベを使って作った酒である。おやつとしてアガベシロップの美味しさを味わっていたからこそ、期待も膨れ上がるという物であった。

「今日は忙しい中集まってくれてありがとう。やっと、飲めると思う味の酒が出来たから飲んだら感想言ってくれると嬉しいな。それじゃあ、乾杯」
乾杯、と静かにグラスを掲げた後、それぞれがそれを口にした。

次の瞬間、それを一気に口にし過ぎたユージンが思いっきりむせた。

「やっぱ、初めはそうなるよね、コレ」
「げっほげほッ、な、何だよこりゃ!?アルコールキツすぎないかこの酒!?み、水を……」
「あー……なるほどだからか……こりゃ、そんなに沢山は飲めんわな」
むせるユージンに水を渡す三日月を尻目に、シノはその酒をちびちびと舐めるように飲む。その強い酒精に、メリビットやメネリクも難しい表情でそれを口にしている。
「ほー……こりゃ、凄く強ぇ酒だな……だが、悪くねぇ。いや、むしろ美味え」
「そうですね……安物の合成アルコールと違って、作り物感が無い。新鮮で辛口の良い酒じゃないですか」
対して、火星出身の大人である雪之丞とデクスターはそれを上機嫌で口にした。火星の安酒の酷さをよく知っているこの二人からすれば、酒精が強い事よりもその味わいの良さに驚いたのであった。かつてのCGS時代の、まだマルバが腐ってなかった頃に祝い事の席で口にした上物の酒を思い出すが、それと遜色ないと思える味だったからだ。
「うーん……あ、慣れてきたら結構イケるわね。おかわり、頂いても良いかしら?」
「気に入ってくれたなら良かった。でも、強すぎるから気をつけて」
そう言って三日月は少し嬉しそうにメリビットのグラスにその酒を注いだ。
この酒は三日月がその作り方からボトルに詰めるに至るまで、関わって出来上がった

物である。それ故に、それが受け入れられた事がとても嬉しく感じられた。

「……な、なあミカ。悪いが、なんかで割って飲んでも構わねぇか？ちと、このままじゃオレにはきつすぎるんだが……」

「お、俺も……つーかこのままじゃ飲み切る自信ねーぞコレ……」

「うん、勿論……というか、初めの一口以外はそうするつもりでこれ、用意してたんだけど……」

そう言って、三日月は安物のオレンジジュースのパックをオルガとユージンに手渡した。

三日月自身、あまりにも酒精が強すぎる上に大した種類の酒も飲んだことのない自分では酒の味の判断がつかない為にこうしてここにいる面々を集めて試飲会を開いたのである。そう思う者が出る事は折り込み済みであった。

「あと、メネリク先生に頼まれてたこれも用意しておいたよ。でも、こんな物が酒に合うの？」

「おお、ありがとう三日月。これは別の酒を飲む時の定番の組み合わせなんだ。だから

このお酒にも合うと思うよ」

　度数が高いと聞いて何となく合うんじゃ無いかと思ったと言って、メネリクはトマトジュースを受け取る。無色透明なその酒に真っ赤な彩りが加えられ、軽くスプーンでかき混ぜるとメネリクはそれを口にした。

「うん、美味しい。このお酒、カクテルのベースにも合うんじゃないかな？　地球でそれなりに酒は飲んできたけど、これは初めて飲む味だね」

「俺ぁ逆にこうやってロックで飲むのが気に入ったぜ。確かに味に癖はあるが、こりゃいい酒だな……」

　ツマミに用意していたナチョスを食べながら、上機嫌で雪之丞はちびちびと酒を飲んだ。

　思えば遠くへ来たもんだと、雪之丞はオルガのコップにオレンジジュースを注いでいる今の三日月を見てそう思った。

　そうして試飲を終え、酒の味が分かる者達からは概ね好評であった事から三日月はオルガやクーデリアと話し合いながら、この酒を生産し販売するのに必要な準備を進めて

いく事となる。

この酒の名前は、火星の王（Mars King）

きっとこれが火星で一番強い酒だなー。と呟いたシノの言葉に、酔ったユージンが『ならこいつは火星の王だな！火星で一番強い酒の王様ってな』と言ったのを飲んでいた皆が気に入り、この名前に決まったそうである。尚言った当人は度数が高いせいで部屋に戻ると即寝落ちするほどに深酔いしてしまったせいで記憶が飛んでしまい、何故この名前になったのか疑問を抱いていたそうな。なんとも締まらない話ではあるが、この酒の強さが分かりやすい経緯でもあった。

こうして厄祭戦により失われたリュウゼツランの酒が、火星にて静かに蘇った。

それは小さな一歩であったが、後の鉄華団の財源を支える新たな事業の始まりを意味する重大な意味を持つ一歩であった。

ガングニールだとォッ⁉

ギャラルホルンが運営するモビルスーツの整備施設に仮面の男、ヴィダール……ガエリオは足を運んでいた。

数ヶ月前のモビルアーマーとの戦いで機体は両脚部と右肩ごと片腕を破壊されるという無残な有様になったもののガエリオ本人は打ち身程度以外の怪我を負っていなかった。その為あの事件の後始末に現場に出られないマクギリスの名代としてマクギリスのグレイズを借り受け応援部隊として駆けつけた地球外縁軌道統制統合艦隊の部隊を指揮し、破壊された街の消火活動や被害者の救助活動、そして撤去作業を行う多忙な日々を過ごしていた。

一通りの作業が終わった所で、機体の修復が終わったとの報告を聞いて直接機体を受け取りに来たのだ。

しかし、何か様子が可笑しい。遠目から見てそう感じるほどに、ヴィダールの愛機は変わり果てた姿になっていた。

『……なんだ、これは……？』

まず全体的なシルエットから形状が大きく変わっている。細身なシルエットだったかつてのガンダムヴィダールからは肩幅から変わっており、非常にマッシブな印象を抱かせる。

更に体型も足が長く、太い物に変わっており、それにあわせて腕部も相応に大型化していた。極めつけは背部に新造された一対の大型の推進機関だ。一見すればバエルのそれのように見えなくもないが、よくよく見てみるとどちらかといえばあのハシュマルの飛行ユニットに酷似しているように見えた。

唖然としているガエリオに対して、機体の整備を担当している整備員の一人が話しかけた。

「貴方がこの機体の搭乗者ですね？はじめまして、私の名前はイクノ。この機体の再生プロジェクトの主任を任されております」

『あ、ああ……専属パイロットのヴィダールだ。修復の終わった機体の受け取りに来たのだが……失礼、あまりにも機体の姿が変わっていた事で少し取り乱した。これは一体

どういう事なのか説明してほしいのだが……』

「説明？もしや、詳細を聞かされてないのですか……？ああ、そういえばここ最近は例の事件の後始末で上も下も大忙しでしたからね。そのせいで情報伝達が上手く行って無かったか……ではまず、破壊された当時のガンダムヴィダールの状態から話しましょうか」

　イクノは手にした端末から数ヶ月前……この機体を受け取った時のコンディションチェック表を表示した。

「あの怪物……ＭＡハシュマルとの戦闘で、この機体は両脚部と右腕を肩から失っております。ここまではよろしいですね？」

『ああ、それで？』

「……申し上げにくいのですが、我々はあの機体の破損したフレーム部と完全に同じものを作り上げる事は不可能に近かったのです。何せ、あの機体はガンダムフレームですから……」

『……そう、か。それは仕方がない事だな』

　なにせ、今の時代よりも技術の優れていた厄祭戦時代ですら７２機しかロールアウト出来なかった機体だ。それをあれだけ派手に壊してしまったのだから無理のない話だ

とヴィダールは感じた。
「それでこの機体の修復をどうするか判断に悩んでいた所で、あるプロジェクトが立ち上がったんです。それが、この……」
イクノは端末を操作し、ある計画が書かれた資料の表紙を取り出した

「【第二期ガンダムフレーム生産計画】です」
『!?　なっ……作れるのか?!いや、そもそもMS用のリアクターの生産拠点は今……』
「それに関しては機密に触れますのでお話できませんが、大まかにですがこの計画について説明させていただきます」
そういって、イクノは話を続けた。
この計画が、ハシュマルに襲撃された事によって生まれた危機感から立ち上げられた計画である事。もう既に多くのスポンサーが出資しており、上層部は本気であるということ。
そして、その計画に先駆けてたたき台としての役割を与えることでこの破損したガンダムヴィダールを再生させようとしたという事。
それによって得た試作のフレームパーツにヴィダールを組み込む形で再生したのがこの目の前にある機体であるという事をヴィダールに説明した。

「マクギリス准将からは既に許可を受け取っていたので、専属パイロットの貴方にはこの機体のことは知らされていたと思っていたのですが……上手くお伝え出来ず申し訳ありません」

『いや、話を聞く限りでは普通に修復するのはどの道無理だったのだろう。そこまでして機体を修復してくれた事に感謝はすれども不満は無い』

「そういって頂けると幸いです。では、機体自体の説明に移らせて頂きます」

手に取った端末を操作して改修後の設計図へと切り替えたイクノは、その端末をガエリオへと渡した。

「元のガンダムヴィダールからコンセプトを変更し、通常兵器では太刀打ち出来ない相手に対する対抗策として状況打破力に特化した改修を施させて頂きました。

機体は大型化しておりますが、フレームそのものが改修された結果でありますのでその分馬力も強化されており、機動性や柔軟性も向上されています。推力も背部のエイハブスラスターユニットにより強化され、ご希望のあった武装である槍による突撃戦法も十二分に行えるように調整致しました。

武装は、専用の高硬度レアアロイ製のハルバード。改修前のヴィダールが装備してい

たバーストサーベルの形状を一部変更し、柄が無くても使用可能となった投槍であるバーストジャベリン。膝部に搭載された炸薬式のパイルユニット。

予備兵装としてのハンドアクスを背部にマウントしており、射撃兵装は選択式の武装として牽制用のチェーンガンか、レールカノンと特殊兵装に変形する試作兵装を左腕に搭載可能です。そして……」

イクノは周囲を気にするように確認した後、小声でガエリオに続きを耳打ちした。

「……機体設計の時点で、完全な阿頼耶識対応機となっています」

『それを知っていると言うことは、貴方も……』

「ええ、マクギリス准将には個人的な恩がありまして。私も、彼の思想に賛同している側の人間です」

イクノはそう言い切って、ヴィダールの耳元から離れ、話を続けた。

「確かに、これらの技術はギャラルホルンでは賛同されない側の技術ではあります。ですが、人類にとって必要であったが故に作り出された技術である以上、それを絶やすような事はあってはならないというのが我々の……いえ、私の考えでして。その思想が許されるのは、おそらくギャラルホルン内ではおそらく准将の元だけであるでしょう。ですので、私は准将への協力を惜しみません」

これからの機体の調整はお任せくださいと、イクノはそう言って頭を下げた。
ガエリオは彼女とはこれから長い付き合いになりそうだと思いながら、装いを新たにした自らの機体を見つめた。
より一層鋭くなったその表情は、まるで悪魔の様に禍々しくすらあった。

「それでは、早速で申し訳ありませんが実機での機動テストをお願いしてもよろしいでしょうか？取れたデータから、機体の微調整を行います」
『ああ。勿論だ……そういえば機体名を聞いていなかったな。ガンダムヴィダールのままか？』
「いいえ、型番から別の名前に変更されております。機体特性からフレームまで殆ど別の機体に変わってしまっていますので。機体名はこちらになります」

そう言って、イクノが手にした端末をガエリオに見せた。
ＡＳＷ―Ｇ―ＸＸ―Ｇｕｎ　ガンダムヴィダール・ガングニール
端末にはそう書かれた、この機体の設計図の表紙が映っていた。

ヴィダール・ガングニールに乗り込み機体を慣らしながら動かした後、出されたターゲットを破壊する機動試験を行った時ガエリオはこの機体の癖の強さを理解した。

エイハブスラスターの推力が強すぎるのだと。

『ぐぅっ、なんて暴れ馬、だ……!!』

その加速速度により発生したGにより、肺が押し潰される感覚に耐えながらガエリオは機体を動かす。エイハブリアクターによる慣性制御機能が働いて尚、殺しきれなかったそれがガエリオの体を襲った。

新規搭載されたエイハブスラスターによる推力を全開にした突撃により、出されたターゲットを手にしたハルバードで貫いて両断した機体がその勢いのまま大きくターゲットから離れていく。

大推力と質量による一撃離脱。強力な急加速による一撃を与えながらも敵対者から

距離を取り、また加速し一撃を与える。単純ながらも強力な、かつてのキマリストルーパーを思い出す戦法がガンダムヴィダール・ガングニールの基本の戦闘スタイルである。

ただしその加速速度の速さも、搭乗者に掛かる負荷もキマリストルーパーのそれとは段違いである点からその操作感覚は全くの別物と化している。確かにエイハブスラスターを導入したことで、推進剤の不足による全力稼働時間の制限は解消されたものの、現在の技術で生産されたそれはガンダム・バエルのもの程に繊細な推力の調整を行える訳ではない。

設計図があっても、そのまま作り上げるだけの技術や機材が失われている為である。その為、ヴィダールガングニールのエイハブスラスターはガンダムバエルのそれと回収されたＭＡハシュマルの飛行ユニットの構造を参考に設計製造された現行技術を使用した模造品である。

その扱いづらさは雲泥の差がある。ガンダムバエルのように空を自在に飛ぶ事は不可能に近いだろう。

だが、その推力だけはこちらの方が上だ。偽装用を含め、２基のツインリアクターと一基のリアクター分の出力があるガンダムヴィダールだからこそ可能な方法であるが、ツインリアクターを主に機体の動力に使い、偽装用のリアクターのエネルギーを常にエ

イハブスラスター用に完全に割り当てるという力技により得られた推力はそれだけでガンダムバエルの推力を上回り、追加でツインリアクターのエネルギーも割り当てれば理論上は最高速度に達すれば禁止兵器であるダインスレイヴと同等の速度まで機体を加速する事が可能となる程であるという。

無論、機体は耐えれても中身である搭乗者は別であるので死なない程度に普段は速度にリミッターが掛けられているが、それでも今まで同じような機体に乗ってきた経験のあるガエリオですら扱いに梃子摺る程に扱いの難しい機体である事に変わりはなかった。

合図と共に、5つのターゲットがランダムかつ同時に展開される。阿頼耶識により接続された搭乗者の脳と機体を仲立ちするナノマシン・ホルダーの演算機能を最大稼働させ、ターゲット間の最短距離と軌道を一瞬で掌握したガエリオはそのルートを辿り、機体を急加速させた。

次の瞬間、ヴィダール・ガングニールはターゲットを一つ破壊するごとに空中で【直角】で曲がるかのような軌道を描きながら手にしたハルバードで距離の離れた5つのターゲットを一瞬で破壊した。空を自由に飛ぶ事は出来なくても、その豊富な出力で無理やりかっ跳ぶ事は可能であった。

阿頼耶識による反応速度と演算速度、ガエリオ本人のＭＳの操縦技術と判断速度、そしてヴィダール・ガングニールが持つ改良型ガンダムフレームが持った機体剛性。

どれか一つが欠ければ不可能な、神速の連撃。それはあのハシュマルとの戦いでマクギリスとガンダム・プルフラスが行った一撃にも、勝るとも劣らない高機動の一閃であった。しかし、その反動も、重い。

『ぅっ……ハッ?!』

一瞬意識の飛びそうになった頭を覚醒させて、ガエリオは機体の制御を取り戻し、体勢を立て直した。

（少し……慣れが居るな。全く、外見だけでなく中身まで悪魔のようになって帰ってくるとは思わなかったが……ああなるほど、コイツは確かに【キマリス】だ。桁違いに扱いは難しくなってはいるが……）

厄祭戦時代の頃の仕様のデータをこの機体がキマリスであった頃に見た事があったが、コンセプトはこのガングニールに近い物があった。

加速して超硬度の武器を機体の質量と共に叩きつけるという、あんまりにもシンプルな答えに先祖である初代ボードウィンも行き着いたのであろう。実際にＭＡと相対し

た身としては、先祖が出したであろうその回答は実に正しいとガエリオは感じた。アレを相手にするには、小難しい小細工を効かせた武器や機体機構よりも阿頼耶識の反応速度を活かしきれるバエルの二本の剣のような単純を突き詰めた武器とそれを扱いこなす為のシンプルな機体構造の方が遥かに勝率がある、と。

そう思い至れば、先程までは悪魔のような暴れ馬としか思えなかったこの機体も大変頼もしく思えてくるのだから不思議な物だと感じながら、ガエリオはヴィダール・ガングニールの実機テストの工程を進めていった。

友の隣に立ち続ける為に。

幾度となく見た夢だ。銀髪の少年にナイフを突きつけ、その胸に突き立てる夢。

俺はナイフを構えていただけだった。

当然だ。その少年は、自分にとって初めての、心の底から話し合える親友だったのだから。殺す気なんて、俺には無かった。

しかし、殺し合いを強要されるその場ではお互いにナイフを向けあわねば首に巻かれた爆弾が動作し、二人とも殺される。戦う意欲の無かった者は見せしめに首を吹き飛ばされたが為にそれは分かっていたからだ。

お互いナイフを構えて、どれだけ立っただろうか？凄まじく長かった気がするし、ほんの一瞬であったような気もする。その間に関しては詳しくは覚えていないが、先に動いたのは目の前にいた親友からだった。

俺はわざと動かなかった。どうしても、目の前にいる親友だけは殺したくなかったから。それなら親友に殺された方がマシだと、思ってしまったから。

だが親友は、俺にナイフを振りかぶるフリをしてわざと俺の構えたナイフを胸で受けた。

唖然としてナイフから手を放した途端、親友は崩れ落ちた。

倒れた親友の肩を抱き、どうしてと問いただすと親友……『モンターク』と名乗っていた彼は、声にならない声で俺にこう告げた。

『友達だから、殺したくなかった』と。

そう言って、彼は息を引き取った。瞳を開けたまま、俺を心配させまいと無理やり

作った笑顔のまま、彼は死んだ。
俺は彼の亡骸を抱いたまま、この理不尽な現実に対して慟哭の声を上げ――

「……キー？マッキー！大丈夫、マッキー?!」
「う……あ、アルミリア……？」

……ここは……ボードウィン家の中庭……ああ、そうだった。今日は、アルミリアと会う約束だったから来ていたんだった。
前後の記憶が曖昧だ。どうやら気が付かないうちに眠ってしまっていたようだ。
「……すまないアルミリア。眠ってしまっていたか」
「ううん、お疲れのようだったから私からお昼寝を勧めたの。だから気にしないで。でも、眠った後のマッキー苦しそうに魘されてて……疲れてるのに起こしてしまってごめんなさい」
「いや、ありがとうアルミリア。少し、夢見が悪くてね……」
「何か怖い夢でも見たの？マッキー……？」
そう心配そうにこちらを見るアルミリアに対して、マクギリスは微笑んで応えた。

「大人になっても、怖い物は怖い物なんだ。……カッコ悪い所を見せてしまったようだね」
「ううん。今ギャラルホルンが大変なのは誰だってわかるもの。それなのに、マッキーは私との約束を守ってくれた……そんな優しいマッキーが、カッコ悪いなんて私は思わないよ」
「……ありがとう、アルミリア」
そう言ってマクギリスは芝生に敷かれたシートから立ち上がり、アルミリアの髪を乱れない様に気をつけながら撫でた。
「さて、そろそろ屋敷に戻ってお茶にしようか。すこし、冷えてきたしね」
「うん……あ、そうだ！マッキー、手を出して貰っても良い？」
「ん？ああ、どうぞ」
そう言ってマクギリスはアルミリアに手を差し出した。その手をアルミリアは握った。
「お願いマッキー。お屋敷に帰るまで、こうやって手を繋いでても良いかしら？」
「……ああ勿論。行こうか、アルミリア」
握られた小さな手を優しく握り返し、マクギリスとアルミリアは中庭を後にした。

【厄祭の再演事件】から三ヶ月。マクギリスはセブンスターズ達の行っていた公務をギャラルホルンの高官達に割り振る事でなんとか多忙過ぎる状況から脱した。これにより、なんとかまともな休暇を得る事が可能な程度なまでにマクギリスとラスタルの労働環境は回復した。

更に、元々目星を付けていた実力はありながらも不当な地位に立たされていた者達……主に出身や出自で不当に扱われていた者を昇進させ、要職に用いる事で組織改革の第一歩を開始。加えて大きな穴の空いたセブンスターズが担当していた公務を職務に改め、セブンスターズ以外のギャラルホルンの高官達に割り振らせた。

これはかつてなら選民思想の強い者達による反発の声や他のセブンスターズからの非難が上がっていたであろう大胆な政策だが、マクギリスを取り巻く情勢はその時と今では大きく異なっていた。

今のマクギリス・ファリドは約三百年間、起動できる者が居なかったガンダム・バエルを蘇らせＭＡという大災害を退けた現代の英雄だ。それがどれほど大きな意味を持つか、ギャラルホルンに所属する者であれば誰もが分かる。

これがもしも『起動させたのみ』であるならば話は違ったであろう。『ＭＡを撃破した』だけであるならば、ここまで大きな影響力を得る事は無かったであろう。

だがバエルを蘇らせたという『権威』と、ＭＡを討伐した事で人々を救ったという『実

績』の二つを兼ね揃えているのであれば話は全く変わってくる。

加えて今のマクギリスは事実上二家しか残っていないセブンスターズの当主の片割れである。これに逆らうと言うことは最早ギャラルホルンという体制そのものに反抗しているに等しい。それを皆察してか反発はマクギリスが想定した物よりも少なく済み、スムーズに事が進んだという訳であった。

加えて言うなら現在のセブンスターズのもう一人の片割れであるラスタル・エリオンでさえも、現状はマクギリスの行動を止める事は無い。彼は確かに保守派だが何もかもそのまま組織を運用するべきと考えるような頭でっかちではなく、むしろその実態は蛇のように柔軟な質を持っている。現状の保守ではなく、ギャラルホルンという勢力の維持を第一に考えるという意味での保守派だからだ。

それ故、最早組織そのものがこのままであり続ける事は破滅を意味する現状において、マクギリスが組織改革という大鉈を振るう事に待ったをかける理由が無いのであった。

纏めて総評を下すならマクギリスにとって、今は追い風が乗っているかのような状況だった。

しかし、素直に喜べる状況でもない。確かにマクギリス個人にとってはギャラルホルン内で大きな実権と名声を得る形となったが、あの事件はギャラルホルン全体に対しては大きすぎる痛手である。

イオク・クジャンの行った愚行の世間への発覚により、更に活発化しつつある経済圏の武装化に対する対応や破壊されつくされた街の復興活動、失われたＭＳ用エイハブリアクター生産施設の再生や代替案の検討など、仕事に戻れば頭が痛くなる問題はまだまだ山積みだ。

しかし今だけは、そういった事を考えるのはやめて休暇を楽しむ事にした。今日はアルミリアと一日一緒に居る事を約束していたからである。

「……あのね、ずっと私の口からお礼を言いたかったの。私達を、お父様とボードウィン家を守ってくれてありがとう!!」

「当然の事をしたまでさ。君を守ると、ガエリオに誓ったからね」

「……うん！マッキーは、私の騎士様で、旦那様だもんね!!私、マッキーのお嫁さんに相応しくなれるように頑張る!!」

そう言って、アルミリアは微笑みながら小さな手で私の手を握った。
「さて、屋敷に戻ったら一緒にお茶をしようかアルミリア。実はお気に入りの店の新作のケーキを持ってきているんだ」
「本当⁉マッキーの持ってきてくれるお菓子、いつも美味しいから私楽しみだわ！」
「ああ、今日のケーキもとても美味しそうな物でね、私も楽しみなんだ」
中庭を小さな婚約者の歩調に合わせゆっくりと歩きながら、マクギリスは久方ぶりの休日をアルミリアと楽しんでいた。

【悲報】クーデリアさん、お酒の勢いで三日月を押し倒す【火星の王ェ……】

その少年には、記憶が無かった。記憶が無いにも関わらず、知識だけは何故か持っていた。まるで外部からそれを植え付けられたかのように。

一番始めに見た光景は、酷く寒いカプセルの中に自分が押し込められていた光景。そして、その足元に白骨死体が転がっているという訳の分からない状況であった。

何故か知っている知識の元にそのカプセルの扉を開き、外に出てみれば自分が入っていたそのカプセルと同じものがいくつも並んでいた。しかしその中に入っている者は自分以外、皆物言わぬ亡骸となっていた。

記憶がないにも関わらず、何故かそんな亡骸を見つめる度に涙が溢れて止まらなくなり、散々泣いた後少年は持っていた知識の元にその施設の中にある僅かな衣服や食料、拳銃などの物資を集めて、その施設から外に出た。

食料も水も、このままでは一月と持たない程度の保存食しかこのシェルターには残さ

れていなかったからである。

失われた記憶と何故かそれでも残っていた知識。この2つに疑問を懐きながらも生きる為にその施設から這い出る事を余儀なくされたその少年は記憶の中の頼りない地図を頼りに、地下に作られたシェルターから火星の荒野へと歩き出した。

目的地は、人類の生存圏であったという町だ。

この時はまだ、生きる為に自分のような子供はどんなことでもしなければならない土地であるという事など、想像すらしていなかった。

「……んん、もう朝か。また懐かしい夢を見たもんだ」

それはまだ、自分が何も知らなかった頃の記憶。

向かった先の町にたどり着いたはいいものの頼りになる相手も無く、食料も底を尽きかけ、残ったのは子供の手には重たい拳銃だけと、詰んだ状況に追い込まれた俺はその町を歩いていると自分よりも小さい子が、行き倒れていた姿を見つけてしまった。

まだスレておらず、良心も甘さも世間知らずさも抜けきってなかったその頃の俺は行

き倒れたその子を背負って裏路地の一角に連れていき持っていた最後の水と食料をその子に与えた。今思えば、とんでもなく甘い行動だと自分でも思う。

だが、その出会いと甘さが生涯の友との縁を繋げてくれたのだから、人生何が起こるかなんて分からないものだ。

（もう、忘れかけてたな……俺が目覚めたあの場所の事なんて。あの時はミカと一緒に生き残るのに必死で、俺自身が何者なのかなんていう疑問はもうどうでもよくなっちまってたからな）

あの謎のシェルターから這い出てきた少年だったオルガ・イツカは、初めから文字や計算の仕方や火星の大まかな地理について知っていた。

だがそんなもんがあった所で、火星の孤児が働ける場所なんてものは早々無い。

結局知識を悪知恵に変えて、あの時食料と水を分けた事で一緒についてきてくれる事になった三日月と一緒に盗みや悪さを散々してなんとか幼少期を生き残って来た。だが、あまりにもやりすぎたせいで俺も三日月もその町には居られなくなってしまった。そうして夜逃げ同然の形でクリュセに向かう事となり、そのときに三日月と仲の良かったアトラもあの娼館から連れ出して俺達はあの町を出ていった。

そうしてクリュセにたどり着き、ＣＧＳの募集を見つけた俺達は命がけで阿頼耶識を体に埋め込む雑な手術から生き残り、後は知っての通りだ。

「まあ、今更思い出した所で何だって話だがな。さて、シャワー浴びたら今日も頑張るか……」

疑問は絶えない。いったいあの施設は何であったのか？自分は何者であったのだろうかと。

だが、今更自分が何者であろうと鉄華団の団長であるオルガ・イツカである事は変わらない。仲間達と共に手に入れた今以上に、優先すべきルーツなど自分にある筈が無いのだから。

そう思ったオルガは自身のルーツに対する疑問に一旦蓋をし、意識を切り替えて今日の仕事は何があったか考えながら朝の支度を済ませていった。

そうしていつものスーツに着替え、社長室に着いたオルガは鉄華団のジャケットをハンガーに掛け、パソコンの置いてある机の席に座ると、一通のメールが届いていること

に気がついた。

宛先が今日の昼からの仕事の依頼主からであった事を確認すると、オルガは即座にそのメールを開封し、内容を確認していく。すると、段々オルガの表情は険しくなっていった。

「……おいおい、このタイミングで依頼ドタキャンかよ!?一体原因はなんだ?」

メールの内容を更に読み進めていくとその理由が書かれており、それはあの地球でのあの事件が関わっていると記されていた。

「……今更、上からの辞令が急にこっちに飛んできたとか向こうも災難だな。そういう事なら仕方ねぇか……キャンセル料もしっかり振り込まれてやがるし……」

とりあえずおやっさん達にＭＳの積み込みの中止を連絡して、それから皆に今日の仕事キャンセルになったことを伝えて……と、今からやるべきことを順番付けていると、オルガはある事に気がついた。

「ああ、そういや昨日ミカはクーデリアの所に泊まってたな。後で連絡しないとな……」

恋人の所に泊まっている相棒の事を思い出し、自分にもいつかそういう相手が出来りゃいいんだがとオルガはほんの少しだけ三日月のことを羨ましく感じた。

「……んっ……？……っ!?」

温かい何かを抱きしめている事に気がついて、私は目を覚した。

その手の中には、あどけない表情で眠る最愛の人三日月がそこにはいた。

（……そうだ。昨日は仕事が終わった後に三日月が作ったっていうあのお酒……『火星の王』を持ってきてくれて、一緒に自宅で飲んで……あああああっ……）

やってしまった。あまり慣れていない強いお酒の勢いに任せて、彼を……押し倒してしまうなんて、なんてはしたない事を。

いずれ、私も彼とはこういう事をしたかったと言うことは否定しない。だが、もっとちゃんとした形で最初はしたかったと思うものの時既に遅し。後悔先に立たず。

酒の抜けた頭で昨晩のことを思い返してみれば、酔った自分が三日月に対して滅茶苦茶に甘え倒した記憶ばかりが浮かんで来て――

「……おはよう、クーデリア」
「おっ、おはようございます。三日月……その、昨日はゴメンナサイ……」
「……？なんで、謝ってるの？可愛かったよ、昨日のクーデリア」
「かわっ……!!で、ですが、三日月に迷惑を……」
「……うん。やっぱり可愛い。迷惑なんて思わないよ。俺で良ければ、もっと甘えてきても良いからさ」
「は、はい……不束者ですが、よろしくおねがいします……」
気恥ずかしさから、後半はかき消えるような声でクーデリアはそう言った。その回答代わりに、三日月はクーデリアに顔を近づけ、軽く額に口づけをした。
「シャワー、先に借りていい？」
そう言ってベッドから立ち上がった三日月を、クーデリアは首を縦に振って見送る事

しか出来なかった。自分の顔が真っ赤になっているのを自覚しながら、クーデリアは潰れるまで酔う事は絶対に避けようと意思を固めた。

シャワーも浴びて、朝食もクーデリアと一緒に食べて三日月が本部に帰ろうとした所で、オルガからクーデリアの自宅に電話が掛かってきた。何かあったのだろうかと思いながら三日月はクーデリアから受話器を受け取った。

「えっ、昼からのあの依頼キャンセルになったの？」

『ああ。今朝急に連絡が来てな……困ったもんだぜ。例の地球の事件の影響で意図せぬアクシデントがあったみたいでな。まあ、その分多めにキャンセル料も貰ってるから文句は言えねぇさ』

最近定期的に行っていたその依頼のキャンセルに、軽く三日月は驚いた。なにせ依頼主はあのギャラルホルン火星支部。二年前の汚職と腐敗の巣窟であった火星支部とは異なり、今の火星支部はマクギリスが選んで送った人員によりかなり真面目に職務に取り組む者達で構成されていた。そんな彼らに依頼をこんなにも直前にキャンセルされ

たのは今回が始めてである。

最近、鉄華団はＭＳを使った模擬戦の相手をする演習の依頼を定期的にギャラルホルン火星支部から受けていた。報酬額はそこそこだが模擬戦で使うペイント弾やＭＳの運用費は向こう持ちでかつ、こちらの所有するＭＳを使用していいという好条件の依頼であった。

鉄華団には貴重な定期的な収入が入り、ギャラルホルン火星支部には阿頼耶識持ちの相手に対する知識や二年前の事件や火星を荒らす海賊の討伐等で幾度となくＭＳによる実戦を経験している鉄華団と命の取り合い無く戦える貴重な経験を得られると、お互い得をする形の依頼であった。

しかし、例のＭＡによる事件から数ヶ月立った今日になって急に火星支部のギャラルホルン隊員達にも地球からの正式な辞令が来たらしく、その関係で一度向こうに戻らなければならなくなった隊員達がかなりの数現れてしまった。それで模擬戦どころでは無くなってしまった為に、今日予定されていた依頼は急遽キャンセルとなってしまったようだ。

交代要員は用意されているとのことなので、火星の治安維持活動に支障はないとの事ではあるが、いささか慌ただしくなるので状況が落ち着き次第また依頼させてもらうと現火星支部長である新江・プロトからオルガは謝罪と依頼キャンセルの連絡を受けたの

だった。

「……あれ？じゃあ、今日の仕事無いの？」

『そうだよ。こんな急に他の仕事も入れられねぇし、まっさら白紙って訳だ。仕方がないんで今日は臨時休業って事になっちまった。他の団員たちにも今日はもう休みを出したから、ミカにも伝えておこうと思ってな。まだそっちに居てくれて良かったぜ。俺も今日は久々にやる事無いから経営の勉強でもするかな……それじゃ、またあとでな、ミカ』

「うん、またあとで」

オルガが電話を切ったのを確認すると、三日月は受話器を置いて、クーデリアの方へと顔を向けた。

丁度いい機会だと、そう思ったから。

「クーデリア、実は急に休みになってしまったんだけど、今日は仕事だったっけ？」

「いえ、今日は私もおやすみですよ」

「なら、二人で街にデートに行こうか。クーデリアと一緒に行きたかった所があったん

だ」

「デート、ですか!?はい、是非……!」

あの三日月からまさかデートに誘われるとは思っても居なかったクーデリアは、ようやく顔から引いた熱がまた吹き出る感覚を感じつつ普段は中々無い二人きりで過ごす時間に、心が高鳴った。

（……デートって、そんなに嬉しい事なんだ。アトラに教えてもらって、良かったな）

自然と笑みがこぼれだすクーデリアのその姿を見て、そんなズレた事を考えながら三日月は自身の妻から教えられた知識の元に、デートの計画を練っていった。

恐るべきは恥ずかしがる事なく好意を告げることができる三日月の肝の太さか、それともそういった行為に対して無知な三日月に女の子が恋人にしてもらえると嬉しいことを教えこんだアトラか。どちらにせよ、クーデリアは今朝から三日月に手玉を取られっぱなしである事は誰が見ようがそう思うであろう事実であった。

惚れた方が負けであるという言葉は、きっと正しいのであろう。

クリュセの街は、火星の中ではそれなりに栄えている。表通りであれば飲食店や雑貨屋、洋服屋やジュエリーショップ等も建ち並んでいる区域も存在している。火星の裕福層や中流層の需要を満たす為の店である。

無論、ここは火星。裏通りに出ればスラム街や貧困層が暮らす区域も存在している。しかしそういった者達はこちら側には早々こちらには来ない。それは暗黙の了解というものであり、関わりあってもろくなことにならないとお互い知っているからだ。たまに無謀にもこちら側へ来て盗みや恐喝を働こうとするものも出るが、そういった者は即座に巡回の警備員により無力化される。無論、そういった者達への命の保証などは無い。ここでの安全とは、ある程度の資金を持つ者達の為のものであるからだ。

裏通りや裏道に入らなければ比較的安全なこの場所はデートスポットとしても、それなりに機能している。

「昭弘、あっちの服屋見に行こうよ！」

「……あれは男物の服屋なんだが」

「そうよ？昭弘、せっかくそんな引き締まってるんだから色々似合うと思うんだよね」

「俺の服を見る気なのか？いや、折角の休暇なのに悪いって」

「だって昭弘、いつもその格好だし。私服の1つや2つ位、持っててもいいじゃん。アタ

シが選んであげるね!!」
「ああ……それもそうだな」

もうデブリじゃないしなと、野暮な事を言いかけた口を閉じて昭弘は腕を組んで一緒に歩いているラフタの歩調に合わせながらクリュセの街を進んでいった。

先日、ラフタは昭弘へ告白をする為に歳星にいる名瀬とアジーに連絡を取り、タービンズを抜ける意思を告げた。

タービンズは名瀬を愛し、一夫多妻である事を認められる者だけがいられる居場所だからである。他の人と一緒になる覚悟を決めた者は、当然タービンズを去らなければならない。名瀬も多くの女を愛すると覚悟した以上、去る覚悟を決めた者を名瀬は追うことはない。

ただラフタの場合、幼い頃にあまりにも酷い環境で肉体労働をさせられていた姿を見たアミダと名瀬に拾われタービンズに入ったという経緯もあり、名瀬からしてもアミダからしても祝福の心の方が大きかった。半ば娘のようにラフタの事を思っていたからだ。境遇故に愛は知っていても恋を知らず、する機会も無かったラフタが誰かに惹かれ、恋をするようになって綺麗になっていく様を見て二人は我が事のように喜んだとい

う。

そんなラフタの思いを知っているアミダと名瀬はそれを容認し、無事タービンズを抜けたラフタは、昭弘に対して一世一代の告白を行った。

全てを賭したその告白に、昭弘は応えた。元々、昭弘も自分がラフタに惹かれている自覚はあったもののラフタは鉄華団の兄貴分であるタービンズのリーダーである名瀬の婚約者。

元とはいえデブリ出身の自身など到底手の届かない存在であり、血迷えば恩人達全員に迷惑を掛けることになる。その為当然昭弘は自身の好意に蓋をする。我慢する事は慣れていたから。

しかしそんな天上の女がわざわざ自分の為に自分と同じ場所にまで降りてきて、家族から一人抜けてまで好意を告げてくれたとなれば、話は別だ。当然昭弘はその告白に応え、晴れてこの二人は恋人同士となった。

そうしてタービンズを抜けたラフタは正式に鉄華団に移籍。知らない仲ではない相手であるが故に他の団員達からも歓迎され、今では団員達に阿頼耶識無しでの正しいMSの操縦技術を教える教官として活動している。

そんな経緯を経てカップルとなった二人であるが、今日まで同じ日に休みが取れる事

が無かった。仕事が潰れた事自体は残念だが、そればかり気にしていても仕方がないと気分を入れ替えるためにもクリュセの街に繰り出して初デートとなった訳である。

「似合う服で着れるのあって良かったー。よく考えたら、昭弘に合うサイズの方を気にするべきだったかもね。昭弘おっきいし」

「選んでくれてありがとなラフタ。俺一人じゃ、服なんて選ぶの初めてだったもんだから自分に何か似合うかなんて分からなかったな」

「いいよいいよ。さ、次何処に行こっか？結構ぶらぶらしてたけど、以外と賑わってて治安良くてびっくりだね、クリュセの街って」

「最近ハーフメタル事業で火星全体が潤ってるからだ。前はもう少し閑散としてたんだがこういうのを見ると、二年前俺達が踏ん張った事に意味があったんだなって実感出来るな。まあ、俺達は仕事をしただけで本当に凄いのはクーデリアのお嬢なんだろうが……」

「良いんじゃない？私達も命かけてやり遂げたんだしさ。じゃ、次どこを見よっか？」

「そうだな、今度はあっちに……ん？あれは」

ラフタの選んでくれた服の入った紙袋を手に持ち、服屋から出てきた昭弘は向かい側のジュエリーショップに目が止まった。

その店自体は昭弘自身の興味を引く店と言う訳では無かったが、その出入り口から出てきた人物は先程口にした昭弘も良く知る者達だったからである。
「……三日月？それにクーデリアのお嬢も」
「え、ウソ?!ホントだ、三日月にクーデリアじゃん！もしかして、私達と同じようにデート？意外とヤるじゃん三日月」
「確かに意外だとは思うが……ん？」
恋人繋ぎで街を歩いていく二人の後ろ姿を眺めていると、二人の同じ指に見慣れない銀色に輝く何かが見えた昭弘はそれが何かを察した。
「ラフタ、邪魔したら悪いから向こう側へ行こうぜ」
「……そうだね、私達は私達で楽しもうか。なんかすっごい、二人とも幸せそうだったし」
そう言って、再び手を組んだラフタと昭弘はクリュセの街中を歩いていった。
二人の左手の薬指に光るそれを見た昭弘は、いつか自分もそれをラフタに贈りたいと、そう思うのだった。

これがガンダム！悪魔の力よ!!

青い閃光のような何かが通り過ぎる度に仲間達のＭＳが刺し貫かれ、もしくは両断されていく。

その光景は海賊達にとって正に悪夢としか言いようがなかった。

「な、なんなんだよ、なんなんだあのＭＳはぁ!?」

マン・ロディに乗った海賊は手にしたマシンガンの弾丸をバラまくもののその青い異形のＭＳの影すらも撃ち抜く事が出来ず躱され、次の瞬間には細長い針のような槍が装甲の隙間に投げられ串刺しにされた挙句、槍自体に仕込まれた爆薬により内側から破壊された。

「かっ、敵うわけがねぇ!!おいお前ら、逃げ……う、うわあああぁ!?」

逃げようとした次の瞬間には手にしたハルバードを加速力と共に叩きつけられ、胴体を無理やり引き千切られた海賊のＭＳがその動きを止め、ぷかりと宇宙空間を漂った。

地球がＭＡの被害を受け、ギャラルホルンの地球への防衛網にスキが出来た事を好機とみたその海賊達は地球圏周辺の交易船を圏外圏のように襲っていた。圏外圏とは比べ物にならない額の戦利品に喜び勇んでいたその海賊達はすっかり引き際を見誤り、その場所が誰のものなのか忘れ略奪行為に励んでいた愚か者達である。

そんな無謀な者達に対して、本来の業務に戻ったアリアンロッド艦隊が黙っている訳がなく、即座に居場所を割り出し精鋭たちを送り込み海賊共に襲撃を仕掛けた。

それだけでも彼らにとっては致命傷であったが、より運の無いことにとある計画により作り出された異形のＭＳとそのパイロットが機体の宇宙空間でのテストを兼ねてアリアンロッド艦隊に出向していた事が、この蹂躙と呼ぶに相応しい光景を産む原因となったのであった。

（……恐ろしい加速力の機体だとは思っていたが、いざ使えるようになるとここまで一方的に戦えるようになるとは……これでは戦いですらないな）

「ちょっと、速すぎませんかその機体!?なんて推力してるんですか。レギンレイズでも追いつけないなんて……!?こっ、これは……」

『すまない、結果的に独断先行になってしまった。問題なく動かせるようにはなって来たが、まだ自分もこの速さに慣れていなくてな』

遅れて援護にやってきたジュリエッタが、その凄惨な光景に息を飲んだ。突き刺さった槍により内側から爆破された機体。コックピットのある胴体部からハルバードで真っ二つにされた機体。コックピットだけを的確に貫かれた機体。攻撃を受けたであろう武器ごと無理矢理真っ二つに引き千切られた機体。理由は様々だが破壊され再起不能となった海賊達のMSの残骸がざっと見渡しただけで二桁は浮かんでいた。

「出撃して、たった三分間で……何機撃墜してるんですか、これ」

『今落としたので11機目だ。大した腕のある相手は一人も居なかったとはいえ、恐ろしい機体だよ、こいつは』

ガンダムヴィダール・ガングニールと、その搭乗者であるヴィダールは、出撃してたった3分間の間に海賊達のMSを11機ほどスクラップへと変えていた。

別に無理をしたわけでもなんでもない。むしろエイハブスラスターの出力に制限を設けて機体性能的には六割ほどの稼働率だ。

だが、その程度でもこの光景を生み出すには足りるほどの性能がガングニールにはあり、それを効率よく行える能力がヴィダールにはある。阿頼耶識が齎す力は、何も機体を自分の体のように扱えるというだけではない。接続された搭乗者に対して機体越しに取得した様々な情報をナノマシンを介して感覚的かつ瞬時に取得させる事も可能なのだ。

これにより、海賊達のＭＳの位置を知覚したヴィダールは効率的に敵対者を無力化させる戦闘プランを脳内で構築し、そして実行した。人と機械を繋ぎそれらを超えた戦闘力を発揮させるマンマシーンシステム、阿頼耶識とは本来そういうものである。

人の持つ取捨選択を行う能力と、機械が持つ情報収集力を高度に融合させることで擬似的に少し先の未来の結果すら知覚することが可能となるのだ。

高度なＡＩを持ち合わせていたものの、あくまで機械でしか無かったモビルアーマーが得られなかったその力によりかつての人類はモビルアーマーの脅威を打破したのである。

『それよりも見つけたぞ。アレが海賊達の旗艦だな』

「……戦っていた仲間を見捨てて、逃げようとしているのか!!」

『思い切りだけは随分と良いな。逃しはしないが』

そう言ってヴィダールは手にしていたハルバードをサブアームに渡し背中のラッチにマウントさせて、腰からバーストジャベリンを引き抜き左腕部のレールガンを変形させると、それを装填した。エイハブツインリアクター由来の膨大なエネルギーが一気に蓄電されることで、余剰電力がバチバチと輝き出す。

『お前達はやり過ぎた。ここで刈り取らせてもらおう』

次の瞬間、機体名の由来となった試作変形兵装『ガングニール』からバーストジャベリンは放たれた。逃げようとしていた海賊の船の推力部をナノラミネートアーマーで覆われた装甲すらも無視するかのように貫通し突き刺さった後、槍に仕込まれた火薬が点火し爆発した。これにより海賊の艦は推力を失ったのか、その動きを止めた。

ダインスレイヴという禁止兵器がある。高硬度レアアロイ製の槍を電磁投射砲で放つ代物で、ナノラミネートアーマーを容易に貫く過剰な威力からギャラルホルン内でも使用には多大な制限がある。

このガングニールもまたそれに類似した兵器だ。ただし、弾丸であるバーストジャベリンは高硬度レアアロイ製では無い最近開発されたカーボン由来の新開発の素材で作られている事や、それ故に本来のダインスレイヴほどの貫通力を持たない点とあまり長距離で放ってしまうと摩擦熱で燃え尽きてしまう欠点などをあえて持たせた部分からダインスレイヴとして認められるような条件を満たしていない。それ故に、グレーゾーンの通常兵器として扱われているという代物だ。

これも、もしもに備えた代物だ。ガンダムヴィダール・ガングニールは対ＭＡ用の切り札として開発された機体。忘れかけていたＭＡに対する恐怖の現れでもあり、その対抗手段としてこのような多少グレーな装備も採用されていた。場合によってはこの計画で生産されるであろう制式採用型の第二期ガンダムフレーム機にも搭載される事となるだろう。

『ヴィダールより旗艦へ、目標は沈黙した。追撃は……了解。これより帰還する……ジュリエッタ、ついてきて貰って悪いが、どうやら俺達の役割はここまでのようだ。残りは他の部隊に任せて一旦帰還するぞ』

「……はい。その機体、色々ととんでもないですね。これが……ガンダム」

味方にすれば絶対的なまでの頼もしさがある事まで含めて、恐ろしい程の力。まさしく悪魔のようだと、ジュリエッタはその機体を見て思った。

【厄祭の再演事件】から、数ヶ月。あの地獄を経験したジュリエッタはかつて程、ギャラルホルンの掲げた正義のような綺麗事を信じられはしない。それでも、パイロットとして戦う他に自分に何か出来る事がある訳でも無い。

だからせめて、次は間に合うようにと彼女は再びパイロットとして戦場に立っている。それが今、地上で事実上二人だけしか残っていないセブンスターズの片割れとしての役割を果たしている恩師にして主人であるラスタルに対し自分が出来る事であると信じて。

そして、そんなジュリエッタに対して新たに与えられた任務は少し変わった内容の任務であった。

「……ようやく見慣れてきましたね、その仮面」

『意外と快適なんだぞ?ノーマルスーツのヘルメット代わりに酸素も供給してくれる上、MSの搭乗時にはディスプレイ上の任意の情報を視界に投影してくれる素敵な代物さ』

「ああ、だから出撃時でさえもその仮面付けてるんですか……てっきり変なこだわりでもあるのかと」

『俺自身にはそんな趣味は無い。ただこれは、生命維持装置も兼ねてるので人前では外

せないだけさ』
「訳ありだとは思ってましたが、そんな大怪我を負っていたのですか?それにしては……」
『大したことじゃない。単に身体は治せたが顔の分の再生治療の費用が払えなかっただけだ。自分への戒めとして傷跡を残している面もあるがな』
「そう、ですか」

仮面の男、ヴィダールのその返答に少し疑問を感じながらもジュリエッタはMSパイロットをやっていればそういうこともあるかと納得をした。
再生治療は高い。特に顔等の繊細な部位であれば尚更だ。地球圏ではあまり好かれていないが機械により機能を代替する治療の方が安価で済む。この仮面もそういったものなのだろう。
フルフェイスのヘルメットを身に着けた大柄なその男は、今から一週間前に新型の機体の宇宙での動作と実戦でのデータを取る為に技術者と共にアリアンロッドへと期限付きの出向をしてきたよそ者である。だがそんな見た目の割には案外気安い性格で話しやすく、同じように戦場に出るアリアンロッド艦隊のパイロット達とは既にそれなりに打ち解けていた。顔こそあわせなかったが共にあの地獄を走り抜けた相手であるこ

とも大きかったようだ。
　そしてジュリエッタは、一時的にアリアンロッド艦隊へ出向してきたヴィダールの僚機兼案内役としての任務を与えられていた。

「あの機体、初実戦だったそうですけど全く問題なさそうですね。しかも全くの無傷じゃないですか」
『いや、そうでもない。薄々気がついてはいたが今回の実戦でアレの欠点がはっきりと分かった』
「というと？」
『僚機が追いつけんし、色々と加減が効かん……重ねて言うが、置いていってしまって本当に済まなかった。次は気をつける』
「別に気にしてませんよ。まあ、流石にここまで規格外とは思っていませんでしたけど」

　ヴィダールもガングニールを扱えるようにはなったが様々な意味で馬力があり過ぎるこの機体を持て余してもいた。
　グレイズ・アインの手足を強化発展させたフレームはとてつもない破壊力を容易に生み出し、搭載されたエイハブスラスターは地上であれ宇宙であれ関係なく過剰なまでの

推進力と速度を与えてしまう。

結果生み出されるのは恐ろしいまでの暴力だ。ＭＳだろうと戦艦だろうと早々この機体を止められる存在は居ないだろう。だが裏を返せばどんな相手でもこの機体では徹底的に破壊する事しか出来なくなる程に力加減に関しては苦手な機体でもあった。

全力稼働となれば阿頼耶識を持ってしても機体の制御で手一杯となり、しっかりとした対Ｇ訓練を受け、専用のパイロットスーツを着込んだヴィダールでなければとてもでは無いが扱えない。下手にヴィダール以外が乗り込めば機体に殺されることとなるであろうじゃじゃ馬だ。

そしてこの機体について行ける機体は、現状ではガンダムフレーム位となるであろう点が運用上でもこの機体の扱いの難しさを高めていた。

そんな欠陥機と言っても差し支えない代物ではあるが、現状の技術力でＭＡに対抗できる手段はこういった力技に頼るしかないのもまた事実。後に開発されるであろう正式採用機も流石に此処まで尖りきった仕様にはならないだろうが、それでも運用には腕利きのパイロットが必要となるであろう。まあ、それでも問題はあるまい。

第二期ガンダムフレーム計画の機体に求められている役割は、かつてのガンダムフレームと同じく兵隊ではなくもしもの時に脅威を打開する為の銀の弾丸なのだから。一般的な機体ではＭＡには勝てないと、誰しもがあの事件で痛感したのである。

「まあ、そうですね。そこまで言うのでしたら、シミュレーターで模擬戦の相手になってくれませんか？貴方ほどの腕前のＭＳパイロットとの戦いなら、私も得られるものは大きいと思いますので」

『ああ、ガングニールのシミュレーターのデータは機密上まだ明かせないのであの機体の前身となる機体のデータを使用することになるが、それでも良ければ喜んで相手になろう』

「では、お相手よろしくお願いしますね、ヴィダール」

そう言ってジュリエッタは模擬戦用のシミュレーターへと向かっていき、ヴィダールはその後をついて行った。

着いていくと決めた者は違えども、その者の為に強くなろうとする戦士たちの姿がそこにはあった。

幕間『火星の王、歳星にて』

「ふむ……これを本当に火星で、あの三日月の坊主が作ったのか？いい意味で予想外だ……強くて美味い、いい酒じゃないか」
「気に入ってくれたようで何よりです。アイツらもオヤジが気に入ってくれたと言えば喜ぶでしょう」
「『火星の王』なんざ、随分と吹いた名前をつけたもんだと思ったもんだが……こりゃ油断して飲み過ぎたらもってかれるおっかない酒だな。ある意味でアイツらしい……で、これはどの位の量作れるんだ？」

名瀬が後継者として明言されてから、その周囲へのアピールのため、そして会長職は辞したもののマクマードは健在である事の証明の為にこうして平時は定期的に時間を設けて名瀬と飲む機会を設けていた。
名瀬へ会長職の引き継ぎはほぼ済ませているが、テイワズは圏外圏という無法地帯で成り立ったが故に会社としての顔を持ちながらもマフィア組織でもあるという少々特殊な形式が成立している。その為まず名瀬が引き継ぐのは表側の役職の会長であることをテイワズ全体に知らせており、マフィアとしてのテイワズの長は相変わらずマクマードである。その上で、名瀬は次期後継者として若頭に就任した。
現トップと次期トップの仲が良いと言うことを見せつける事で、組織内の無駄な諍い

を無くす事が狙いである。

無論、二人とも純粋に酒が好きであるが故にこうした理由を作って飲もうという魂胆もある。そんな二人であるが故に、鉄華団が作り出し名瀬に贈り物として渡された『火星の王』も独り占めするのは勿体無いとこの場に持ち出され、話の伴にされているという訳だ。

「材料の収穫量の目安から割り出した生産量を考えると、流石に穀物酒程の量は確保できなそうではありますが……ある程度流通させるには問題ない程度にはなるかと」

「ふむ……だがそれだけだと味気ないな。このシロップといいこの酒といい、そのままでも金になりそうな良い商品になりそうではあるが……ここにひと捻り加えるのも面白そうだ。例えばだが、この酒を樽に入れて熟成させたらどうなると思う?」

「……!?それは、作るのに時間は掛かるでしょうが、いい酒が生まれそうですね」

マクマードも名瀬も、宇宙を股にかけて商売をしてきた中で良い酒も悪い酒もそれなりに嗜んできた酒飲みだ。故に酒に対する知識もそれなりにある。火星の王が『若い』蒸留酒であるのは飲めばすぐに分かった。そうなれば次に思いつくのは樽による熟成だ。

「だろう?こりゃそれなりにいいシノギになりそうだ。今度小僧達にミーシャを紹介し

てやってもいいかもな。あいつなら樽のノウハウもあるだろうしお互い得のある話になるだろう」

「お嬢をですか……そういえば独立して酒造会社を立ち上げていましたね」

「ああ、俺以上の大酒飲みが高じて、とうとう会社まで立ち上げやがったのももう6年前か。そろそろ上の娘達のように良い相手を俺に紹介してくれても良いと思うんだがなぁ……まあ酒以上に熱を上げる相手なんざアイツにゃ居ねーか」

ショットグラスに注いだ酒を煽る。クセのないクリアな味わいが、何故か先程よりも染み渡るようにマクマードは感じた。

些細なきっかけにより、繋がった小さな縁。それは後にテイワズにも鉄華団にも多大な利益を与えることとなるとある酒の、復活の第一歩であった。

『孤児』への涙

夢を見る。親友を手にかけるいつもの悪夢を。
夢を、見る。刺すつもりなど無かった向けただけのナイフが、モンタークの腹に突き刺さるあの感覚が、手から染み付いて離れない。
彼の顔でさえ朧気になりつつあるのに、そこだけはどれだけ時間が経とうとも消える事は無かった。

「……これは、いかんな。疲れている証拠だ」

あの館に来た頃は毎晩のように見たこの悪夢も、今となっては疲れきって眠ったときにたまに見る夢になりつつある。問題はここ数日、それが連続して続いている事である。
たとえ医療用ポッドを使い肉体的疲労を短時間で抜いたところで、精神は疲弊するのだ。本来なら十分な睡眠時間を確保する所であるが、どうしても外せない予定が少々立

て込んでいた為無理をした。
その無理の反動を今体が受けているのだろう。

「とはいえ、流石にセブンスターズとしてイオク・クジャンへの裁判に席を外す訳にはいかなかったからな。全く、最後の最後まで忌々しい男だった」

裁判の結果は無論有罪。ＭＡの無断所持と、その管理の不備によって起きたその他諸々全てがイオク・クジャンの罪となった。

『ＭＡの無許可の所持、製造は如何なる者であろうと極刑相当の重罪』という厄災戦時代から変わらぬ古き法が決め手となった裁判であるが、事が起きてしまった以上先人達はこういった事態を危惧していたのだろうと思わざるを得ない。

クジャン家は取り潰しの上で、現当主であるイオクは死刑が決定した。せめて、この決定が犠牲になった人々への慰めとなる事を祈る。

……ようやく、ある程度は手を休める時間が作れる程度にはギャラルホルン内の統制も取り戻せた。だからこそ新型機のテストに託つけてエリオン公との融和をアピールする為に片腕であるヴィダールをアリアンロッドに出向させることが出来たのだ。ここで一休みを入れても良いだろう。

普段の私なら時間を惜しみ行動することを優先しているだろうが、この状態ではまともな仕事を出来るか些か怪しい。そう自己判断すると、今日は仕事を休む事を部下に連絡し、ボードウィン家に今日はそちらに向かうことを伝えると出掛ける準備をした。

無性に今はアルミリアの顔が見たかった。

甘えているのは、自覚している。

わたしにとって、マッキー……マクギリス・ファリドとはどういう人なのかを説明するのはとても難しい。

亡き兄の親友であり、わたしの婚約者であり……とても強くて優しくて……その弱さを知っている人でもある。

まだマッキーと私が婚約者になる前、単純に兄の親友である憧れの人として接してい

た頃にわたしはあの人の脆い所を見たことがあるのだ。

あんな姿のマッキーを見たのは一度だけ。でも、私はその姿を忘れることは無いだろう。それほどまでにその時のマッキーの姿は衝撃的だった。

とても悲しそうに、泣くことすら出来ずにただ耐えていた。その日は親友の様子がおかしいと感じた兄が気晴らしになればと私達の家に連れてきたのだけど、憧れの人のその姿を見たわたしはとても悲しくなって、わたしの方が泣いてしまった。自分でも理由は今でもわからない。でも、そうしなければこの人はきっと壊れてしまうと思って、わたしはマッキーにしがみついて泣いた。

それからどれくらい経ったか、暫くして泣き腫らしたわたしの顔を心配そうに覗くマッキーは、何処か普段のマッキーと違っていて私とそう変わらない年頃の少年のように思えた。

何故君が泣くのかと、そう聞かれてわたしは上手く答えることが出来なかった。支離滅裂で、昂る感情のままにその時の思いをマッキーに伝えた記憶はあるけども、その後泣き疲れた私はマッキーにしがみついたまま寝入ってしまった。

そして、ソファの上で目を覚ました時にはマッキーはいつものマッキーに戻っていた。夢だったのではないかと一瞬思ったが、時計の針と自分の腫れた目はそれが現実

だったのだと伝えてくれた。

マッキーがただの憧れの人から私が誰よりもどんな人なのか知りたいと思う人になったのは、その日からだった。

もしも、出来ることならば。いつかわたしとマッキーが婚約者から夫婦になれたのならば。

その時には、わたしはあの人が耐える苦痛を少しでも背負いたい。今は無理かもしれないけれど、大人になった私なら出来ると信じて立派なお嫁さんになる為に勉強やお稽古を頑張るのだ。

頑張り屋さんで、子供の私にも目線を合わせて話してくれる優しいマッキーのお嫁さんが、今のわたしの夢だ。

悲しくても泣くことすら出来なかった不器用なあの人の背を、支えられる人になりたい。

その夢を思いながら、今日も一日を頑張ろうと自室の鏡の前で立っていると、ドアのノックの音が聞こえた。

どうぞと答えると、私の身の回りのことを担当しているメイドさんが自室に入ってき

た。

「アルミリアお嬢様、マクギリス様がこちらにおいでになるそうです」

「本当?!」

その言葉を聞いて、私は今日を良い一日にしようと思った。忙しくて中々会えないけれど、その分お互いに会える一日一日を大切にすることを約束している。

マッキーは約束を守る人だから、今日も素敵な一日になるだろう。ドキドキする気持ちを胸に、私はマッキーを出迎えるのに相応しい服を決めるためにメイドさんの意見を聞きながら、今日のコーディネートを決めた。

かわいいと、思ってくれると嬉しいな。

マクギリス・ファリドにとって、アルミリアの存在は一種の救いであった。

当時、自らの心の拠り所としていたアグニカ・カイエルとガンダムバエルの真実を偶然にも実家の書斎の中で見つけてしまった資料により知ってしまったマクギリスは、その事実に打ちのめされそれが信じきれず嘘であることを願い、事実の詳細を洗いざらい読み尽くした。

そうして見つかったのはその真実が間違いなく事実であるという答えと、養父が自分を買った違法組織とのやり取りであった。

自分の根底が崩されるかのような衝撃と、今尚忘れられない友を手にかけざるをえなくなったあの悪意の極みのような催しはあの男が仕組んだという事実に、流石のマクギリスも打ちのめされかけていた。養父の悪趣味さには気がついていたものの、せいぜい幼い頃の自分の容姿が好みだったが故に囲いこんだのだろうと思っていた程度であり直接の原因だったとは流石に思っていなかったがために流石のマクギリスも心が追いつかなくなってしまったのだ。

世界すべてが灰色になったかのような錯覚とおぼつかない足元。そんな憔悴しきったマクギリスを見たガエリオは、事情は聞かなかったものの随分と参っている親友の様子を見かねて共に有給を取り、自分の家へと招待した。少しでも気分転換になれば良いとそう思いながら。

纏まらない思考の中、ただぼんやりとボードウィン家の中庭で空を眺めながら深い悲しみを耐えることしか出来なかったマクギリスに、当時5歳だったアルミリアはいつものようにマクギリスと会話しようと近寄ってきた。

こんな姿を見せてしまえば、彼女は私に失望するであろうかと何処か他人事のように思いながら、マクギリスは彼女の言葉を待った。

だが、いつまで待っても言葉は掛けられる事はなく。

アルミリアはマクギリスの様子を見てただ涙を流した。

彼女の目からとめどなく溢れてくる涙と溢れてくる悲しみの声に、マクギリスは困惑しながら何故泣くのかとアルミリアに聞いた。

普段、取り繕っている仮面すら被ることなく素顔のままで。

『マッキーが、泣きたいくらい悲しそうなのに泣けないから私が泣くの!!』と、彼女はマクギリスの腕にしがみつきながら泣き続けた。

彼は孤児だ。それも、ただ一人で生きるしか無かった孤児だった。やっと仲良くなれた人生初の友も自らの手で殺す羽目になり、自分を引き取った養父には虐待を受け続け、ただ一人耐え続ける事しか選択できなかった孤児。泣くことに意味なんてない。泣いた所で何も解決などしない。どんなに悲しくても辛くても耐え続ける事しか出来な

い。

そんな環境で生きてきた彼は、いつの間にかどれだけ自分が辛くとも悲しみの涙を流すことすら出来なくなってしまっていた。無論、悲しくないわけではない。ただ耐えて繕うのが得意になっただけだ。だがより悲惨なのは、彼にそういった仮面を被る才能があったことだ。

仮面を被り、優秀なファリド家の後継者としての在り方を演じる事で誰もがそれを疑う事のない程に。

誰もが、そんな彼が強く優秀で完璧な人物であると錯覚させるほどに。彼の親友でさえも、この日のことがあり後に心中を打ち明けられるまではそうであると疑わなかった程に様になっていたのだ。

だから誰も、彼が助けの声を押し殺して生きる名も無き孤児であるとは気が付かなかった。誰もが彼を『マクギリス・ファリド』として見ていた。その名前さえも与えられた偽物であるというのに。

その事実に耐えきれずそのまま壊れてしまえば、彼は真実から目を背けたまま偽りの錦の御旗を掲げ都合の悪くなった者達の手によって殺される事となったであろう。

だがそうはならなかった理由を一つ上げるとするのであればそれは、アルミリア・ボードウィンが『彼自身』を見続けていたことに気がつけたからだ。理屈も何もない、子

供らしい純朴さが産んだ共感がどうしようもなく彼を救った。完璧な仮面ではない、自分自身を見てくれる人がいるという事実に彼は救われたのだ。

そうして彼はほんの少しだけ、欲張りになった。どんな形であれ幼馴染達を絶対に失いたくないと自覚した。養父への復讐とあのような悲劇が起きることのない今よりはマシな世の中へ変える事を亡き友へ誓った。そしてアルミリアの隣にいるのにふさわしい者で在れるように自らの意思で『マクギリス・ファリド』という仮面を被り続ける選択を取れるようになった。今のマクギリス・ファリドを作り上げた原点は、この時だ。崩れた積み木を積み上げ直すように、彼は自身を再構築したのだ。

縋り続けた英雄譚を閉じ、逸し続けた現実へと目を向けた。たとえ痛みが伴っても、もうその視線を逸らすことはないだろう。

アルミリアの隣に居続けられるならば、どんな重荷であろうと背負いきってみせるという気概が、今のマクギリスにはあった。

これが愛だとするのであれば、自分は随分と度し難いものだとマクギリスは自嘲する。

ただ彼女の笑顔さえ見れれば自分は報われてしまうのだ。惚れた側の負けとはこの

事かと思いながら、マクギリスはボードウィン邸へと向かった。

「マッキー!!おかえりなさい」
「ただいま、今日も可愛いねアルミリア」
「……ありがとう!!」

可愛らしく着飾ったアルミリアを褒めると、彼女は向日葵のように笑顔を向けてくれた。これだけは誰にも渡すつもりはない。

俺だけの、宝物だ

覚悟を決めた先に希望はある

マガジンを入れ、スライドを引き構え、引き金を引く。弾が入っていないがゆえにスライドストップが働くのを確認すると、再びスライドを戻しマガジンを抜き、拳銃を布を敷いた床に置いた。
「ハッシュ、次」
「はい、三日月さん。こちらをどうぞ」
「ん」
三日月は慣れた手付きでピンを引き抜いてスライドを引き抜き、次の拳銃の整備に取り掛かった
「分解するのも組み立てるのも早いッスね三日月さん。早すぎて、俺じゃ何をどうしてるのか見てるだけじゃ分かんないっす……」
「あ、ごめんハッシュ。つい無意識でいつものように整備してた。手順教えながらやるから次の拳銃渡して」

組み立て終えた2丁目の拳銃を先程の拳銃の横に置き、三日月は何でもないように3丁目を渡すようにハッシュへ手を差し出した。

「……言っておくけど、今の俺は団員の中だとバラして組み立てる速さに関しては普通の方だよ？腕が動かなくなってからあまりやれてなかったから鈍ってる」

「ま、マジっすか!?」

「オルガはもっと丁寧にやる癖に腕が動かなくなる前の俺より早かったな。ユージンに至ってはその倍くらい手早くポンポン分解して整備終わらせてたよ。ただ、この手の仕事が一番得意だったのはビスケットだったな……」

今はもう居ない戦友のことを思い出しながら、三日月は拳銃をバラしていった。何度も何度も叩き込まれた動作だ。手違いなど起きるはずもなかった。

「だから、ハッシュも回数を重ねればこれくらい出来るようになると思う」

そう言いながらも三日月はハッシュから渡された3丁目の清掃と油差しを終えた。

「聞くより慣れろだ。まずはこれを組み立ててみて」

「はい！」

ハッシュも小銃の取り扱いに関しては入団後に習っていた。なのである程度銃の取

り扱いについては分かる。しかし拳銃に関しては鉄華団においては古参の団員以外は基本的に所持を制限されており、必要な時になるとその他の装備と共に配給される形となっている為あまり馴染みが無い。今整備しているのはそういった共用の拳銃だ。

普段は銃の扱いに手慣れたＣＧＳ時代から居る年少組達が整備しているが、最近彼らはマクマードから任されたハーフメタル鉱山の発掘調査に駆り出されている。その為今日は腕のリハビリがてら三日月が整備を引き受け、部下であるハッシュもそれを手伝う事になったのが今２人が武器庫にいる理由であった。

ハッシュはぎこちないながらも言われた手順通りに拳銃を組み立て、それを受け取った三日月が確認する。油を馴染ませる為にスライドを数回動かし、滲んできた油をぼろ布でゴシゴシと拭き取る。

「うん、組み立て方はこれでいい。次は清掃と油の刺し方だね。ちゃんと覚えてよ？いざって時にジャムったら、当然のことだけど死ぬことになるし」

「き、肝に銘じておきます……!!」

そうして少しづつ作業に集中して無言になりながら、何丁もある拳銃を分解して、整備を繰り返していく。作業を始めた二人の両手が煤と油で真っ黒になる頃には、整備の終わった拳銃がぎっしりとケースに詰まっていた。

「そろそろ昼時か。手を洗って、昼飯にしようかハッシュ」
「はい。ご指導、ありがとうございました！」

ここ最近、三日月は時間がある時に自分が教えられることをハッシュに教えている。舎弟に色々と教えてやるのも兄貴分の仕事なのだと、名瀬がオルガに色々な事を教えている姿を見て自分もそうしようと思ったからだ。

今度は射撃場で整備したこれの撃ち方を教えるのも悪くない。自分の撃ち方は我流ではあるが、ＣＧＳ時代に散々正しい撃ち方を叩き込まれたので他の人に教えることも出来はする。そんなことを考えながら、三日月はハッシュを連れて食堂へと向かった。

ＬＣＳによる長距離通信。今日は電波環境が悪いのか若干チラつく画面越しに、オルガ・イツカは歳星にてテイワズの会長となった自身の兄貴分と対話していた。

「クワシールカンパニーって、あのクワシールビールで有名なあの……？」

『ああ、そのクワシールカンパニーで間違いねぇ。親父と共に飲ませてもらったお前んとこの【火星の王】の味を鑑みて、必要になりそうな縁になるだろうという判断の元そこの社長を紹介する事になった。ありゃ美味い酒だった。親父も俺も気に入ったよ』
「っ、あ、ありがとうございます!!そう言ってくれると、あれを作った三日月も喜ぶでしょう」

我が事のように通信越しに喜びを隠せない弟分の姿に、思わず名瀬も顔が綻びそうになった。が、これは仕事の話でもある。緩んだ雰囲気でやる訳にはいかないと気を引き締め、話を続けた。

『でだ、兄弟。紹介しようっていう社長さんなんだが……テイワズに大変縁の深い人物でもあるんだ』
「と、言いますと」
『親父の、末の娘さんだ。ミーシャのお嬢は昔俺がまだ見習いの若い衆だった頃、護衛をやらせて貰ってた人でもある……だから、失礼の無いように、な?』
「はい、親父と兄貴のご期待に応えられるよう、尽力します!!」
『よし、よく言った。ま、向こうもあの土座周りをしてたお前を見てただろうから悪い印

象ではないと思うぜ？さて、火星までの通信料も中々馬鹿にならん。話す事も終わったしお開きにさせてもらおう。またな、兄弟。一緒に『火星の王』を飲めるその時を楽しみにしてるぜ』

そう言って、歳星からの通信は途絶えた。急に来た歳星からの連絡に身構えたが、思っていた以上の順調な結果にオルガはガッツポーズで喜びを表した

「やったな、オルガ!!クワシールカンパニーっていや火星でも有名な酒造会社じゃねーか!!」

「ああ、あそこのビールは初めて飲んだ時火星産の合成ビールが全部泥水だと一口で分かっちまった位にはうめぇんだよな……その分、火星じゃお高いんだが。歳星での値段を見たときは思わず2度見したよ。どんだけ火星じゃぼったくられてるんだってな」

社長室でオルガと共に仕事をしていたユージンと共に、その喜びを分かち合う。何せ、念願の戦う以外での大きな収入となりそうな財源となり得る事業だ。火星の土木作業を行う『鉄華組』の仕事も鉄華団の収入の足しになりつつあるが、それでも最近導入したＭＳの数もあってか当然のことだがそれだけでは足りていない。

その為遠征を行い火星に害を与える海賊等を討伐する仕事を火星の政府から受けて

いるのだが、やはり夜明けの地平線団を倒したからかここ最近はその頻度は落ちつつある。居ないわけではないが、ガンダムフレームを二機、試験運用中の辟邪が予備機含めて三機、ブルワーズからの戦利品を改修したランドマン・ロディが五機、そして先日購入した分を合わせて十二機の獅電という火星では他にはギャラルホルンの部隊位しか持っていないやり過ぎなほどのＭＳの数を保有する鉄華団が相手をするには小粒な相手が殆どである。

何故これ程の数のＭＳを今の鉄華団が保有と維持が出来ているのかと言えば、それ程までに火星の流通を狙う海賊が多かったのが原因であった。ハーフメタル規制が解除された今、海賊にとっては火星の流通経路はとても美味しい獲物となりつつあったのだ。

そして、それを狙おうとした海賊は絶望に叩き落とされた。火星政府から経路の護衛の為に海賊の討伐を依頼された鉄華団の手によって。

ＭＳを使い略奪を行おうとしたものはそれよりも強い力と練度を持った鉄華団のＭＳ隊により叩きつぶされ、戦利品として手に入った多量の海賊が使用していたＭＳが溜まったらエイハブリアクターごと歳星で売り払い、新しい装備やＭＳに変えてまた海賊の討伐を行う。アーブラウでの決戦後の二年間鉄華団は暁の育児に追われながらもそうやって規模と火星での信用を大きくしてきた。その結果がこのＭＳの保有数という

形で現れているのである。
しかしそれによって新たな問題も出てきた。その解決策として打ち出された側面があるのが鉄華組や此度の酒造事業であった。

「この事業が軌道に乗りゃ、海賊から助け出した新入りの団員たちにも安定した仕事が与えられるようになる……!!今みてーに、危険な鉱山採掘をチビ共にさせなくても良くなるんだ!!頑張ろうぜ、ユージン」
「ああ……!!戦いでも忙しい中三日月がここまですげーチャンスを作ってくれたんだ。ぜってー不意にはできねぇ!!」

現在農作業や土木作業、そして鉱山の採掘を行っている新参の団員の大半は、鉄華団が拿捕した海賊にいいように扱われていた元ヒューマンデブリ達であったりする。戸籍のあったものは送り返したが、そうでない孤児達を捨てる選択をするのは憚られた為に拾い上げた形である。
酷い環境下で生き残った彼らの大半は、鉄華団の年少組やそれよりも小さい子供が大半であり、そんな彼らのリーダー役を今は務めているのがタカキやライド達古参の年少組であった。

　ＣＧＳ時代からの面々は戦いの中で生きる覚悟が決まっている。だが海賊から拾い上げた彼らはその大半が阿頼耶識こそ施されているものの暴力で無理やり言うことを聞かされて戦わされていた者達だ。自分から鉄華団と共に戦いたいというのであれば拒否はしないが、そうでないなら可能な限り戦場で直接戦わせないようにしたいと思うのが人情であった。ましてや暁が生まれた事で自分たちよりも小さい子供に対する優しさというものを自然と持ち始めている団員たちは多い。その為に戦わなくても食っていける仕事を用意する必要があったのだ。鉄華団の、自分たちが居たいと思えるこの場所の未来のために。

「なら早速、火星の王のプレゼンの仕方を考えようぜ。よっしユージン、三日月とデクスターさんと、後チャドとメリビットさんも呼んできてくれ!!その間に俺はこの兄貴が送ってくれた資料を読み込んでおく」
「おう!!こりゃ今日も忙しくなるな！気合い入れていこうぜ団長!!」

　まだ未来はどうなるか分からない。だが、今向かっている先にこそ希望はあると思いながらオルガとユージンは今日も仕事に取り掛かった

圏外圏で最も酒を愛する女、来たる

【厄祭の再演事件】による余波で、今地球圏は大いに荒れている。ギャラルホルンの弱体化を疑った海賊達による派手な襲撃が増えたからだ。そうした弁えない者達は見つかり次第アリアンロッドの精鋭たちにより狩られ、その愚行の代価を命で支払う羽目になっているのだが、その余波がついに火星まで伝播したのか夜明けの地平線団討伐後落ち着いていた海賊による略奪行為が目撃された。

　が、そのボヤ騒ぎとも言うべき状況は即座に冷水を掛けられるがごとく鎮火することとなる。その翌日に火星の政府から依頼を受けた鉄華団の手により海賊達は発見され、更に戦力を高めた彼らの手によって蹂躙されることとなったからである

「……コレで久々の実戦ってマジ？」

「？ああ、ここ数ヶ月は割と平和だったからからな……だからって腕落とすようなヤワな鍛え方はしてねーよ」

「そーいうことじゃなくて、三日月ヤバすぎない？って話なんだけど……」
「……あー……」

そう。蹂躙である。戦いにすらなっていなかった。ナノマシンホルダーを搭載したことで可能となった全力稼働を試す機会だとして、今回三日月はバルバトスのリミッターを外しての戦闘を行ったのである。無論ナノマシンジェルの消耗が激しい為制限時間は設けられているもののその挙動はとんでもないものであった。エドモントンでの戦い以来久々に手にした刀を持ってでの立ち回りは、それまでのバルバトスの戦い方とは一線を画すものであったのだ。

具体的に言えば、グレイズ・アインとの戦いでやっていたあの動きを常時しているようなものである。

「モビルスーツの装甲ってあんな簡単にサクサクぶった切れる物じゃないでしょ……しかも敵の撃ってきた銃弾とか刀で切り払ってたり、流石にあんなの見たの初めてなんだけど」

「何でも、三日月曰くあの状態のバルバトスを動かしてると『ほんの少しだけ先』が見れる、って話だ。メネリクさん曰く、阿頼耶識システムの本来の力の真髄はここにあるって話だが……」

「……やっぱ阿頼耶識ってずっこいわね。あの三日月にそんなのあったらどーやって勝てばいいやら……っていけないいけない!!そんな事よりも私達は私達の仕事をしなきゃね!!」

「ああそうだな!!くらえ!!」

そう言ってラフタは鬼神の如き三日月の立ち回りに恐れをなし逃げ出した敵機の推進機をライフルで撃ち抜くと、それに続くように昭弘も両手に持ったライフルでそれとは別の逃げ出した敵機のスラスターを撃ち抜いた。

少し前に正式に結ばれた二人だが、戦場でもその息はピッタリと合っているようだ。

会敵して数分足らずでありながら最早掃討戦に移行しているが、その分消耗は少なくなる。嬉しい誤算だと考えて二人は逃げ回る敵機を追い立てた。

「正直、この感覚は慣れないな……」

ナノマシンにより形作られた副脳は、三日月に思考の並列演算を可能とさせた。ほんの少しだけ未来を見ながら、目の前の敵にどう対処すればいいのか直感的に分かるのだ。

これこそガンダムフレームがＭＡ相手に対等以上に戦えた理由であり、機械の演算処理能力と人間の頭脳の状況判断能力を高度に融合させた戦闘支援インターフェイス、そ

れが阿頼耶識の本来の形である。

　ＭＡのＡＩは恐ろしく高性能で、ただ高性能なＭＳがあれば対処ができると言う程生半可なものではない。ならばその先を行くしかないと生み出されたのが生体脳と機械の融合によりただの機械では不可能な領域の高度な未来演算により敵の行動を先読みして動く事が可能な兵器であった。

　元々ＭＳが人の形をした兵器なのも人の頭脳に合わせた形というのが人体であるからであり、後期のガンダムフレームが人型から外れた機体が数多く存在している理由は阿頼耶識に慣れきった、本来の形での全力稼働を可能とするパイロットの育成がＭＡとの戦いが長引くにつれて間に合わなくなっていった為である。搦手や奇抜な兵装に頼らざるを得なくなっていったのだ。初期型のガンダムフレームほど人体に近い構造をした機体が多く、その限界性能は高いとされている。

　それ故に、数々の激戦をくぐり抜け、本来の性能を取り戻した今のバルバトスと三日月は人機一体より更に一歩踏み出した領域の存在へとなりつつあった。

　胴から真っ二つに泣き別れになった海賊のＭＳや、手足をもがれて行動不能に陥ったＭＳが無数に散らばる宙域にて、片手に持った刀と固定兵装のみで出撃したバルバトスルプスは妖しく輝く赤い目を滾らせながら、次の標的を探しにその場を離れた。

そうして海賊の討伐とその戦利品の回収は滞りなく終わったのだが、問題はその後にあった。

火星支部のギャラルホルンの司令から、その戦利品の一部について取引したいという連絡があったのだ。

「初めに聞いておきたい。海賊から回収したＭＳのエイハブリアクターを購入したいって話だが、なんでだ？あんたらなら新品を生産できる筈だろ？」

『例の事件は知っているな？』

「ああ、流石に少し前に火星でもニュースになってたからな。それで？」

『その影響で、どうもＭＳの生産に影響が出ているようでな……部品生産は問題ないが、どうも新品のＭＳの配備は暫くの間滞るとの事だ。なので今のうちに予備機の為のリアクターを確保しておきたいのだよ』

「……良いのか？ギャラルホルンは装備品の規定やらなんやらで結構煩いと聞いたが」

『何、買うのは私のポケットマネーでだ。リアクターの生産はともかく再調整や整備は

我々の施設でも出来るからな。フレームや装甲部品の補充申請は可能だからリアクターの都合さえつけばグレイズ位ならでっち上げることも出来よう……上の事情で私の部下が割りを食うのは我慢ならんのでな。これくらいはしたいのだよ』

「そういう事なら……今回手に入れたリアクター5基のうち三基はそっちに売っても構わない。二基は先約があるから売れんが、それでも良いか？」

『助かる。値段は……このくらいで宜しいかな？』

「ああ。その額なら問題ないな」

相場より2割ほど多く書かれたその額を見て、オルガはそれを個人で支払えるあたりなんだかんだで火星に居る彼らもギャラルホルンの名家なのだなと思いながらもそれを了承した。お得意様であるし、何より過不足ない金額だ。値段交渉をする相手を弁える位の常識はこの二年で頭の中に叩き込んでいた。

『ではリアクターの回収は後ほど部下を向かわせよう。それでは失礼する』

火星支部の司令はそう言った後、イサリビのモニターに写った通信は途切れた

「……妙だな。ギャラルホルンが中古品のリアクターを求めるなんて」

「ああ、確かにそうだな。こんな事初めてだ」

今まで幾度となく鉄華団は火星周辺の海賊を退治してその戦利品を溜め込んでは歳

星に持ち運び売りに出していたが、ギャラルホルンとは海賊との戦闘で鉢合わせる事はあっても戦利品に関して何か言う事は一切無かった。

ＭＳやリアクターを新品で作り出せる彼らにとってはガラクタの山に過ぎないのだろうから当然と言えば当然だ。だがその当然は今回破られた。

「こりゃ、俺達が思ってるよりも例の事件の被害はひどいのかもしれんな……下手すりゃ、エイハブリアクターの生産にも影響あったんじゃねーか？」

「いや、まさかなー……だが、備えておいて損はないか。本来の売り先のエウロ・エレクトロニクスの担当の人にも今度それとなく伝えておこうぜ」

ＭＳとエイハブリアクターの製造技術はギャラルホルンの屋台骨である。結局の所権威を維持するのには力が必要であり、その力の源がこれらだからだ。

現在地球圏の治安は悪化しつつあるが、それでもまだ一線は踏み越えていない。だが、もしもギャラルホルンがそれらを本当に失っていたとしたら――嫌な想像にオルガは思わず冷や汗が流れた。

そうではない事を祈りつつ、オルガはイサリビを帰路に向けることを指示した。

火星での鉄華団の立ち位置は現在絶妙な位置に存在している。

火星の政府からすれば治安維持を行うギャラルホルンとも協力しあえる火星に根付いている数少ない信用できる戦力であり、火星を荒らしに来た犯罪者からすれば自分たちを狩りに来る非常に凶暴な猟犬であり、クーデリアと敵対的な火星の権力者からすれば目障りだが手を出せばテイワズやギャラルホルンに目をつけられかねない非常に厄介で危険な武装集団、という具合に見る者によってその評価は変わる。

ならそれらと関係が程遠い火星の住人から恐れられているのかと言ったら、そうではない。むしろ大いに頼られている程である。

確かに彼らは2年前の戦いではギャラルホルンを相手に、それ以降は海賊を相手に鬼神の如き戦いを見せつけてきた。だが先に手を出された場合を除き、彼らが火星の勢力を相手にその力を振るったことはない。それどころか海賊に襲われた商人や人攫いに攫われそうになった者など資財や命、尊厳を奪われる所を助けられた者達が大勢いるのだ。

無論ただで救った訳ではなく、依頼の一環であったり海賊退治のついでであったりするがそれでもこの火星でそういった時に助けてくれる存在は数少ない。そうした物珍しさもあって火星での鉄華団の名声は揺るがぬものとなりつつある訳だ。

鉄華団にとってのこの二年間はこの自分たちの立ち位置を確立するための戦いの日々であったと言っても過言ではない。誰が敵で、誰の味方かをハッキリさせた上で味方でいてほしい者達に対しての信頼と信用を積み重ねた。ただでさえ前身となったＣＧＳは子供を使い捨ての手駒にする火星内でも評判のよろしくない組織であったのだ。ほんの少しでもそれを知られているものからしたら印象は０どころかマイナスからの印象のスタートである。それを払拭し鉄華団はＣＧＳとは全く別の組織であるということを印象付けさせるために、火星に害を齎す海賊達を狩り尽くす勢いで討伐しその治安改善に貢献してきた。

ギャラルホルン相手に大立ち回りをかましてクーデリアをエドモントンへと送り届けた大仕事を果たしたとはいえ、そんな浮ついた評判だけでは何かあった時簡単に崩れてしまう。アトラの妊娠が発覚しての大騒ぎと混乱、そして暁が産まれた事に心境の変化により彼らは自分たちがどう思われているのかに対して少しずつ敏感になったのである。

それを防ぐ為の積み重ね、土台固めの時期は絶対に必要だと判断した結果が蒔苗に持ちかけられたアーブラウ防衛隊へのＭＳ操縦技術の教導依頼を名瀬に持ち掛けるとい

う選択であり、ほぼ火星に篭って活動をし続けてきた理由でもあった。

そうした活動の中、鉄華団はとうとう近辺の海賊の頭目となっていた夜明けの地平線団を撃破し、そのリーダーを捕まえた事により今では火星に向かう輸入業者や火星から輸出されるハーフメタルを乗せた船を襲おうとする海賊は劇的に減った。『火星は鉄華団の縄張りだ』という新たな認識を周辺に与えることに成功したのである。

それでいて、治安維持を執り行っている火星支部のギャラルホルンとの関係も稀に合同のＭＳの訓練を依頼されるほどと悪くないのだから端から見れば出来すぎていると言わざるを得ない程だ。これに関しては2年前の火星支部を監査したマクギリスによる指摘から火星に居るギャラルホルンの隊員へメスが入り人員転換が行われ、マクギリス派の隊員が多くを占める状態になったからであるがそんな事を知る由もない鉄華団の面々からもやけに紳士的な隊員が多いことに疑問に思われてはいる。

だが、以前までの自分たちを毛嫌いする態度を隠す気もないギャラルホルンの隊員たちよりも遥かに好感が持てる相手である為この関係性が長く続いていくことを願いながら友好関係を取っているようである。

総じて纏めると、『将来有望な新参組織』と言ったところであろうか。今は根を下ろしてそれを伸ばしている段階であるが、それが終われば大きく伸びていくであろう事が簡

単に想像できた。

そんな部下の纏めた鉄華団の現在の総評の書かれた資料を見ながら、その女は灰皿に煙草の灰を落とした。

「なる程ねぇ。評判だけが御大層な訳では無いようだ」

「どうやらそのようです。テイワズ内でも彼らの評判は悪くないどころか、かなり良いですからね」

「エウロ・エレクトロニクスは彼らが持ち込んだ戦利品のＭＳ用のリアクターや部品のレストアでかなり儲けているようだからな。あそこからはそりゃ好かれるだろうが……あの会社以外もか？」

「はい。私達はその時期は歳星に居なかったので顔合わせはしておりませんでしたが、どうも彼ら歳星の会社全てに一度団長自らが挨拶回りをしていたようでして、その影響からか最近の若者の割には礼儀を知っている者だと知られているようですな。我社の対応担当からも大変礼儀正しい若者であったという話を聞いております」

「ああ、名瀬の航路に相乗りさせてもらってアーブラウにうちのビールを輸出する商談があった時か」

「ええ、あの時ですね。加えて、亡くなる前のジャスレイ殿も鉄華団の運営している建設会社に依頼をして、その仕事ぶりに満足していたとの情報もありますね」
「……へぇ、あのジャスレイ叔父さんが？彼ら、名瀬の舎弟だろう？なのに難癖付けないでそういう対応ってことは、余程実直な仕事ぶりだったのだろう事が伺えるな。そうかそうか」

父親譲りの不敵な笑みを浮かべながら、灰皿に煙草を押し付けで火を消した。
圏外圏で最も恐ろしい男――その末娘であり、テイワズに所属する企業『クワシールカンパニー』を立ち上げた若き女社長ミーシャ・バリストンは今、自らが所有する船に乗り火星を目指していた。

「話を聞いたときはてっきりとうとう親父も老いたかと感じていたが、どうやらそうでは無いらしい。例の酒、味わうのが楽しみになってきた」

一番美味い酒の飲み方は、生産されている現地で飲むことだという信条を持つが故に彼女は妥協しない。故に本来なら鉄華団側が赴く側である筈にも関わらず、彼女は自ら火星に向かっていた。

今でこそフィクサーとしての立ち位置に座りドンと構えて居るが、かつて木星圏を取りまとめた頃のマクマードは名瀬やジャスレイに近い自分自身がまず動く行動派の人間であった。そんな若い頃のマクマードの気質と酒好きとしての血を濃く受け継いだミーシャは15歳の頃から自分の納得するビールの研究を開始し、5年の歳月を掛けてそれを完成させ、そこから僅か1年であれよあれよと言う間に準備を整えて酒造会社を起業したという異色の経歴を持つ人物である。そして起業して数年で酒を愛する情熱から木星の多くの酒造会社を口説き落とし、今では木星の酒の多くを輸出する酒造関連の大企業へと『クワシールカンパニー』を発展させた。ここまでやった理由は単純明快で、木星には良い酒がここまであるのだと世界中に知らしめたかったからである。

一言で言えば酒に情熱を捧げた酒狂い。父にあやかり、彼女を知るものからはこうとも言われる。

圏外圏で最も酒を愛する女、とだ。

木星から急な来客が来るという連絡を受けた鉄華団の面々が慌てて会合の準備を整える事になったのは、そこから数日後のことであった。

『火星の王』と酒神の女主人

透き通るような白い肌。意思の強さを宿す父親譲りの青みがかった灰色の瞳。高いヒールの靴を履いているとはいえ自分達の中でもかなり身長が高い方のオルガに並ぶほどの背丈。端正な顔立ちにメリハリの効いた女性的な体型。

男所帯の鉄華団ではあまり近くには居ないタイプの美女がそこにはいた。キレイな大人の女性、という意味ではメリビットも該当するが、明るく穏やかな彼女とは明らかにタイプが違う。

「遠路はるばる、火星までおいで下さりありがとうございます。ミーシャ社長……!!」

「はは、そう固くなるな。名瀬の弟分なら私にとっても弟分のようなものだ。こちらこそ急に訪問して悪かったな。前もって連絡をしようとも思ったのだが、ＬＣＳがアリアドネと上手く繋がらなくてな。結局火星周辺の宙域についてようやく連絡が出来た次第だ」

「いえ、本来なら我々が伺うべき所をこちらまで向かって来て頂いた訳ですからこれ程

有り難い事はありません。なので気にしないで貰えると助かります」
「そうか。ふむ……では、早速だが本題に入らせて貰うとしようか」

名瀬やアミダから聞いた通りの人柄の、真面目で勤勉な褐色肌の少年を相手に悪戯っぽい笑みを薄っすらと浮かべて、彼女はこう切り出した。

「君達が作り出したという新しい酒……名前は『火星の王』だったか？それを私に飲ませてくれ」

未知の新しい酒と出会えるこの時が一番楽しい瞬間なのだと、ミーシャ・バリストンは今日が良い一日になるだろうとを彼らを見定めつつも確信した。

オルガは内心物凄く緊張しながらも何とかそれを表に出さないように振る舞うことに必死であった。
何分急な話である。まさか今度紹介すると名瀬や親父から言われていた人物が態々

木星から火星に出向いてまでやってくるなどとは思っていなかったのだ。それもテイワズの先達であり、自分たちも良く知る大企業の社長であり、盃を交わした自分たちの親――マクマードの実の娘であるという色々な意味で失礼があったら大変なことになるのが容易に想像がつく人物が相手だ。固くなるなと言われる方が無茶である。

「承知しまし…」

「固くなるなと言っただろう？普段通りの喋り方で構わんよ」

「わ、分かりました。では、用意させてもらいます。ミカ、用意した火星の王を持ってきてくれ」

「分かった」

やりづらい。オルガはそう思いながらも指示を出すと、オルガの席の後ろで立っていた三日月は3本の『火星の王』が詰まった瓶を持って、それをテーブルに並べた。

「む？3本も既にバリエーションを作っていたのか？」

「いえ、中身に関してはどれも同じものです。ただ、違うのはその温度ですね」

「……ああ、そういうことか」

一瞬疑問が浮かんだものの、即座にその理由が思い浮かんだのは彼女が様々な酒を飲んできたが故の経験からであった。度数が高い酒というのは温度によってもかなり味

が変わるものであり、これもそういった酒かと得心を得たのである。
「では、常温の物からいただくとしようか」
そう言って彼女は1本目の常温の瓶から試飲のために用意した小さなグラスにそれを少し注ぎ、舐めるように少量口に含んだ。無色透明なその色からは想像がつかない程の、強い酒精が口の中で広がる。そして同時に、ハーブや花のような、華やかな香りと優しい甘さが共に口の中を駆け巡った。
これ程の物を初の酒造りで作り上げたことに対してミーシャは心の中で賞賛した。ましてやここは木星とは異なり酒に関しては技術が四散し、流通している酒ときたらまともな方の物で飲めるだけ工業用アルコールよりはマシとしか言いようがない合成品が殆どを占める火星である。そんな環境下でこれを作り上げた苦労は並大抵のものではないだろう。
しかし、何かがミーシャの中で引っかかった。この香り、味こそ全く異なるが何処かで飲んだことがあるような……？
「美味い。良い酒を作ったものだな」
「そう言ってくれると、ミカ……ッ、三日月も喜んでくれるでしょう」
「ほう？この酒を作ったのは後ろに居る君なのか」

「うん。戦いの合間や、息子の相手をしてる合間の時間を使って勉強しながら、何とか作り上げた」
「……そうか。やはり君も、独学でこの酒を作り上げたのか。苦労しただろう？実は、我社のビールのレシピもそうなんだ。色々と生産しやすいように、改良はし続けているが元々は私が納得するビールを作ろうとして作り上げた物だ」
「え、そうだったんですか!?あっ、スイマセン。自分もあのビール、大好きでして……歳星で初めて飲んだ時以来、歳星に行く用事があったらいつも買わせて貰ってます」
「……ふふ、そう言ってくれると私も嬉しいよ」

親父や名瀬が気にいる訳だとミーシャは思った。圏外圏では珍しい気持ちの良い若者達である。
いくら父親がマクマードと言っても女だてらに社長をしている関係で、舐められることも良くある彼女からしたら素直に尊敬の念を向けてくれる相手は社員以外では珍しかった。
それも、父親が自分達のボスだからという理由でも無く、自分の作り上げたビールの味を好きだからという理由でここまで目を光らせてくれる相手なのもミーシャにとっては心地よかった。

良い出会い、良い酒。試し飲みとはいえ、こういう状況では杯も進むというものだ。度数が高いとはいえ、少ししか注いでいなかったグラスの中の酒は間もなく飲み干された。

「さて、では次の瓶も試させてもらおう。どちらもとても冷えているようだが……」
「片方が冷蔵庫で冷やした物で、もう片方が冷凍庫に一晩置いたものになります」
「では、冷蔵庫で冷やしたものから味見させてもらう……ふむ、こうなるのか」
冷やした影響で強かった酒精が落ち着き、まろやかな味に変わっていたその酒の味をミーシャは楽しんだ。窓の外の赤茶けた大地を見ながら、こんな荒れ果てた大地でよくもまあこれだけの酒を作り出せる原料を見つけた物だと思いながら、冷やされたことで変化したその香りの良さに舌を巻く。
その変化はこの酒に『火星の王』と名付けた者には満点を与えたいと思う程であった。このような酒がまさかこの地で産まれることがあろうとは脱帽ものであった。
「この飲み方もいいな……では、最後の瓶。冷凍庫で冷やした物の味はいかがかな?」
最後の瓶を手に取ると、先程とは比べ物にならないほどの冷気を手から感じ取れた。キンキンに冷えているその酒を注ぐと、先程までの酒にはなかったとろみが付いてい

た。

　度数が高い酒を冷凍庫などに入れると起きる特有の現象である。液体であるが水と違い家庭用の冷凍庫程度の冷気では凍る事はなく独特のとろみがついた状態になるのだ。

　口に含むと、これもまた格別の旨さがあった。先程までと比べて舌触りがとても良いのだ。独特のとろみが舌を楽しませてくれる上に、先程よりもさらに飲みやすく変化していた。

　そうして飲んでいると、またミーシャの中での何かが引っかかった。この香り、この酒精の高さ……自分はこの味を一度何処かで似たようなものを飲んだ記憶があるのだ。だがそれが何なのか中々思い出せなかった。

　確か……物凄く高い酒だったような……

（ああそうだ。この酒――今は亡きテキーラに似ているんだ）

　かつて世界四大スピリッツと言われていた酒であったテキーラ。だが厄祭戦の影響で気候変動が起きてしまった結果材料の植物が絶滅し、それ以降かつて醸造されていたものを好事家が保管していたもの位しか残っていない惨状であった。

　多くの酒好き達がこの事実に嘆き、悲しみ、再生を試みたものの気候そのものが変

わってしまった地球ではその植物を再び根付かせる事は出来ず、完全に絶滅してしまったのである。

そんな貴重なテキーラであるが、ミーシャは一度だけ幸運に恵まれ飲む機会があった。

特筆すべきはその価格でありミーシャはオークションにかけられた物を購入したが、なんと一瓶で新品のＭＳが三機は購入できる程の金額であった。しかもそれが相対的に高い訳ではなく、現在のテキーラのだいたいの相場の価格である。

そんな超高級品であるため滅多に圏外圏に流れてくることはなく、大体は地球圏の金持ち共の間で取引されているのが今の残されたテキーラの現状であった。

「素晴らしい香りの酒だった。なぁ三日月少年、この花やハーブのような香りは何か香り付けに使っているのだろうか?それとも、この酒の材料そのものによるものかな?」

「後者だね。この『火星の王』には火星に生えているアガベっていう植物を使っているから、それが由来になって――」

「ちょっと待て。今、アガベといったか?!」

「え?うん。アガベがこの酒の一番の材料だけど」

この酒ならば、その代用になるかもしれない。果たしてどのような材料をつかっているのだろうかという疑問が湧き、それを聞いてからこの酒をどのようにさらなる改良を施せる余地があるのか判断しようと考えて材料について質問をしたが、流石に代用品ではなく『そのもの』である事に関してはミーシャも想定外であった。

「ということは、これはまさか分類としてメスカルなのか……？ははは、まさかこんな事があるとは信じられん!!」

「あの、ミーシャ社長……？何か、俺達が作ってる酒に問題があったんでしょうか？」

「いやいや、酒自体はとても素晴らしい物だったよ!!ただ、一介の酒好きとしてこの幸運を天に祈りたくなっただけだ。君達、テキーラという酒を知っているかね？」

「テキーラ、ですか。初めて聞く名前ですが」

「そうか。だろうな……いいか、よく聞けオルガ団長。君達の作る『火星の王』は……ハーフメタル利権以上の利益を与えられるかもしれない代物だぞ？」

そう言って、試飲を終えたが為に少しずつ飲む必要が無くなったグラスに、ミーシャはキンキンに冷えきった火星の王を注ぎ、それを一口で飲み干しにっこりと笑った

「無論、上手くいけばだがな？なあオルガ団長、我社と手を組まないか？資金援助は勿論、技術支援も視野に入れて行おうと思うのだが」

「……何故、そこまでしてくれるんですか？御宅のクワシールカンパニーに比べたらウチは零細も良いところでしょうに」

目の色を変えたかのように急に良い話を話す彼女に対してオルガは警戒した。美味い話を持ち掛けられるということはなにか裏があるものだ。そうで無くても何かしら理由がなければいくら酒を気に入ってくれたとはいえ初対面の相手に対してここまで破格の条件で協力を要請する訳がない。

目の前にいるのは女手一つで一つの会社を立ち上げ、それを圏外圏でも有数の大企業にまで育て上げた女傑なのだから。

「何、この程度で『あの』テキーラが蘇るかもしれないなら安いものさ。ああ、テキーラという酒は君達が作り出した『火星の王』と同じ種類の酒の一つでね。地球のある土地でかつては作られていたんだが、厄祭戦の影響で起こった環境変化のせいで材料のアガベが絶滅してそれ以来幻の酒と成り果ててしまった悲劇の銘酒だ」

今の相場は瓶一本で新品ＭＳが三機は買えてしまう程の額だと告げると、思わず軽い頭痛を感じてオルガは頭を抑えた。確かに儲かるのは助かるが、いくら何でも桁が違い

過ぎる。無論今の希少価値が故の価格であろうが、それでもこの酒を作る原料が生えているのは火星だけなのだ。今ほど暴利な価格になることはないだろうが、希少価値は保ったまま売り出せることは間違いない。

　彼女の言う通り上手くやればハーフメタルの採掘利権並に儲けられるかもしれない鬼札が、意図せず手に入ってしまったと言う訳だ。現段階ではあくまで皮算用でしかない訳だが、だとしても話が良すぎた。

「……だとしても何故なのかがわからない。言わなければその利益を独り占め出来る状況で、それを知らない相手に対してこうして話してしまっているのは、何故なのですか？」

「我社、クワシールカンパニーの社是は『素晴らしい酒を作り出した相手に対して敬意を』だからさ。良い酒を作り出す者に対してそうあれる人間で私はありたいのだよ。それにだ。一人で、一つの会社でやれることなんてたかが知れてるものだろう？」

　人一人でやれる事なんて精々自分が理想とする酒のレシピ一つを作り上げる位だと言って、ミーシャは火星の王を煽りながら言葉を続けた。

「確かにやろうと思えばこの酒の利権を合法的にこちらのものにしてしまうことは今なら簡単にできる。だがな、それをやればこれだけ美味い酒を作り上げた君達の新作を飲

めなくなってしまうではないか!?私は嫌だぞそんな事は」
「え、それだけの理由で?」
あまりにも単純なその理由に、オルガの毒気が抜かれた。当然であろう。なにせ規制が解除されたあとのハーフメタルの採掘利権は今や火星の主産業である。それに匹敵するほどの儲けが得られる金の卵を態々切り分ける理由としては欲がなさ過ぎた。
「ああそれだけだ。それだけで十分だ!!何より私がこの会社を立ち上げた理由の一つがソレだからな。木星にも代々酒造を受け継ぐ小規模な会社が数多く存在していたのだが、ただ売れるからという理由で大きな企業にそれらの銘酒の利権と製法を奪われた者達が当時は数多く居てな?彼らの作り出す酒の味をどーしても守りたくて、そういう行く先を奪われた職人達を匿って立ち上げた会社だぞ我社は」

まあ、そういう意味では君達と成り立ちは似てるかもしれんなと言い、グラスをテーブルの上に置いた。そして気に入っている銘柄の煙草にライターで火を着け、吸い始める。

「まあ、ここまで好条件を突きつけてる一番の理由は美味い酒を独学で作り上げたという事実を評価してのものだ。誇りたまえ、自分で言っていて何だが私は酒の味に関して

はうるさいのだぞ?」
「それに関しては私も散々苦労させられてきましたからね。保証しますよ?」
「まだまだ苦労をかける気だから覚悟しておけよガルシア」

ミーシャの後ろに侍るかのように立っている部下から、初めて声が発せられた。
彼も今は秘書としての仕事についているが、元々は会社を奪われ酒造を続けられなくなった所を彼女に拾われた最初期の社員である。それ故に、彼女の酒の味に対する拘りの深さはよく知っていた

「まあ、我社と手を組むか組まないかはじっくり考えてもらった後で答えてもらうとしてだ、オルガ団長」
「は、はい?」
「出会いを祝う為に、まずは共に乾杯しようじゃないか。まあ、私は大分先に飲んでしまっているがね?」
こんな美味い酒一人で飲むには勿体なさ過ぎるとミーシャは言い、そういう事ならばと三日月はオルガへもう一つのグラスを用意した。
からんっ、というグラスが重なる音が会談に使われている団長室の中で響く。

「さあ、私の事は先程少し話した。今度は君の番だぞ？自己紹介代わりにお互いの事を話し合おうではないか。この酒を飲みながらな？」
「……そう、ですね。まずは、お互いがどういう人間なのか話し合うのは大事ですからね。じゃあ、2年前の大仕事の始まりからで、良いでしょうか？」
「おお、例のギャラルホルンに一発かましたあの事件の時の話か！当事者から聞けるとは貴重な経験だな」

酒が入れば口は緩む。オルガは酒精の強い火星の王を一口、二口と手をつける度にその気が増しているようであり、ほんのりと顔が赤くなっていた。
その様子を見たガルシアは表情は変えなかったものの自分のボスの悪癖であり最も大きな才能をまた発揮しているなと感じた。クワシールカンパニーの始まりも、これであった。
ミーシャ・バリストンが最も得意とすることは、共に酒を飲んだ相手と友人になってしまうことである。人に夢を見せることが得意な、大酒飲みのうわばみであり、天性の人たらし。
人の上に立つ能力という意味では、彼女は父から大いにその資質を引き継いでいるのである。

「ユージン、飲みすぎてたらオルガ止めるの頼む。俺、アトラに頼んでおつまみ貰ってくる」
「お、おう。なんか、想像とは違う人だったな……」
「いや、案外似てるよ。　あの人と。酒の味に満足してくれたからよかったけどそうじゃなかったら……いや、なんでもない。行ってくるね」
　自分と同じくオルガの座る椅子の後ろに立っていたユージンにそう言って、三日月は団長室から外に出た。
　圏外圏で成り上がった会社の社長が、ただ優しいだけの相手ではない事など誰の目から見ても分かる。そうであるにも関わらず実際に会った者にそれを感じさせないグラス片手に笑う彼女から、三日月は確かにマクマードの面影を感じていた。

「お仕事お疲れ様三日月。お酒、社長さんには気に入って貰えた？」
「うん。そっちは問題ない。アトラの作ってくれたおつまみも好評だったよ。おいし

かったって」

「なら良かったー……私、まだお酒飲む訳にはいかないから、三日月の作ったお酒に合うかちょっと不安だったんだ。雪之丞さんやメリビットさんも合うって言ってたし、団長さんも好きだからタコスにしたんだけど、美味しいって言ってくれたなら一安心だね」

年齢的なものもあるが、暁に母乳を与えているアトラはまだ火星の王を飲んだことはない。その為どんな物が合うかは飲んでいる人の意見を聞いて何が合うのか聞いてそれに合わせるしかなかった。だが偶然というものは侮れないもので、テキーラを知っているミーシャからすればそのツマミにタコスを食べるということの贅沢も当然のように知っており、鉄華団に対する彼女の中の好感が更に得られていた。アトラは知らぬ内に夫の仕事に一つ貢献していたのであった。

「ただ、オルガが飲み過ぎちゃってさ……流石に社長さんを送り出すまでは何とか保たせてたけど、終わったらフラフラだったからベッドに連れて行ったよ。アレじゃ明日は二日酔い確定だと思う」

「団長さんそんなに飲んじゃったの？普段はあまり飲まない人なのに珍しい」

「あの女社長、凄いうわばみでさ……そのペースに呑まれちゃってたね」

別段オルガも酒に弱いというわけではない。酒精の強い『火星の王』をカパカパ飲んで尚ほろ酔い程度のミーシャがおかしいだけである。

「それはちょっと心配だね……明日に差し支えなければいいけど」

「その時は皆でフォローすればいいさ。というかオルガは働き過ぎだし、なんなら明日オルガは休みでも良いや。いい機会でしょ」

「そうだよね。そうしなきゃいけない気持ちも分かるけど、普段から夜遅くまで仕事してるもんね団長さん。一日くらい休んだって良いって私も思う」

暁が眠る揺り籠をゆっくり揺らしながら、アトラはそう言った。

こうして三日月と共に、仕事を終えたあとの自室で暁の寝顔を見ながら今日の出来事を語り合う事が、最近のアトラの一番の楽しみになっていた。自身が母親に少しずつなっていくのと同じように、少しずつ父親になっていく三日月を見ていくのが、何故だがとてもアトラにとっては安心できて、今の幸せを実感できる時だった。

楽しい時間はあっという間に過ぎていくもので、そうして語り合っているといつの間にか消灯時間に近づいていた。暁をベビーベッドに寝かせると、二人は同じ布団に横になった。

「そろそろ寝る時間だね。おやすみ、アトラ」

「ん……おやすみなさい。あなた」

三日月がアトラの額にキスをすると、アトラはお返しに三日月の頬へとキスをして、目を閉じた。

尚、オルガはその日の夜悪夢を見たようであり、ベッドの上でうつ伏せで倒れながら寝言で『だからよ、止まるんじゃねぇぞ……』と呟いた後完全に熟睡してしまった。朝になって飛び起き、夢であったことを安堵するも目覚めたらどんな悪夢を見ていたか忘れてしまったようだ。夢としてはよくある事だが、記憶には残っていないのに妙に印象に残る悪夢であったようだ。

後日、クワシールカンパニーと手を組む事をオルガは皆とともに話し合って決めたが、その光景を見て何故か分からないが泣きたくなるほどに嬉しくなったようだ。何故かは、分からないが。

土建戦士グシオンリベイク（鉄華団建設部門、鉄華組社歌）

「昭弘ー!!皆のお昼持ってきたよー!!」
『昭弘さん、ラフタさんが昼飯持ってきてくれましたよ』
『っと、もうそんな時間か。皆、作業はキリの良い所で終わらせて休憩するぞー!!』
グシオンのスピーカーから発せられる昭弘のその声に、鉄華組の面々は声を上げた。
『火星の王』を作る為の醸造所の基礎を作る為に、ＭＳを使用しての整地作業の最中だった昭弘はグシオンが手にしていたＭＳ用の整地用ローラーの持ち手をその場に置いてグシオンを座らせた。
阿頼耶識の接続を解除し、椅子の横に置いておいたジャケットを羽織ると昭弘はグシオンのコックピットから外に出た。
「昭弘お疲れ。お水飲む?」

「ありがとう、丁度喉が乾いてた所だった」
　ラフタから受け取った水筒から外蓋にもなっているコップを取り外して水を注ぐと、昭弘はそれを一気に飲み干した。
「それにしてもあんな器用なこと良くやれるなっていつも思うわ。確かに私も荷物の詰め込み作業程度ならＭＳでやってたけど」
「そうか？人型の機械なんだからそれくらい誰だって思いつくだろうに」
「思いついても実際にやれる精度で動ける人材とＭＳがこんなに集まってるのがおかしいのよ。阿頼耶識使いなら身体の延長線上の感覚でＭＳを動かせるけど、普通はそうじゃないんだからね？それに護衛用のＭＳとは別にこういう作業に使うＭＳを用意できる勢力なんて、火星じゃ他はギャラルホルン位じゃない？」
「まあ、そりゃそうだな。それも戦闘用の奴を流用してるならまだしも、完全な作業用のグレイズなんて使ってるのは火星じゃ鉄華団位だろうし、阿頼耶識使えるやつがこんだけ集まってるのもそうはいないか」
　ＭＳで作業する人員のローテーションが組める程度には、鉄華組には阿頼耶識持ちが多い。昭弘が率いる鉄華組のメンバーは自身がそうであったがゆえに事情を考慮して接することが出来る為、元ヒューマンデブリ組の割合が高いからである。先程作業用グ

レイズから通信でラフタが食事を持ってきてくれた事を伝えてくれたデルマや、海賊討伐の際に無理矢理働かされていた者を拾い上げた新入り等、かつて同じくヒューマンデブリであった経験を持つ昭弘に様々な形で手助けを受け鉄華団での生活に馴染めるようになった者達が昭弘を慕って自然と形成されたグループが元となっているからだ。

それを活用して細かい調整が必要となるＭＳを使った建設作業をローテーションを組んで行う事で集中力を途切れさせることなく行えているのだ。メネリクの手により作業用グレイズに施された阿頼耶識用のセッティングが癖のない万人向けの調整である為可能な方法である。戦闘以外でのＭＳの有用性を再認識した団員達の案で更に２機ほど作業用のＭＳを余っているジャンクパーツで組み上げてしまおうという声が上がる程度には、作業用グレイズは重機として非常に便利な存在だった。

尚、失伝している阿頼耶識の技術の専門家が居てその細やかな調整まで行えるという事自体が異常であるのは言うまでも無い。更に言えば資材の運搬や整地作業程度ならともかく建造までＭＳによる手作業で行うのは昭弘達が思ってる以上ハードルが高い作業であり、真似なぞ出来るものでは無い。

例え阿頼耶識が使える者であっても、正しい建築の知識が無ければ出来上がる建物はハリボテにしかならないし、何よりそのようなＭＳの精密動作が出来るのであれば圏外圏ならどこの勢力でも欲しがるような練度のパイロットであるのだから態々その技能

を建築になんぞ使おうという発想に至らないのである。

普通の操縦方法でのＭＳの搭乗歴の長いラフタの総評は正しい。いくらセンサー類による情報補助があるとはいえそれは本来戦闘用の物であるためこのような作業には対応している訳がないのだ。その為巨大な体を持つＭＳを使いながらほぼ誤差の無い精度の作業を行っている昭弘達の作業は職人技というべきか、曲芸の類とすら言える技能であった。

（ま、色々ツッコミたい所はあるけど、昭弘達は今の所これで完璧に熟してるから問題ない、か）

そのような細やかな作業を繰り返しているが故に、気が付かないうちに鉄華組のメンバーのＭＳの操縦技術が上がっているのも事実。それはリーダーである昭弘も同じであり、２年前までは阿頼耶識の照準補正に頼って当てていた射撃を、今では弾道計算を自分の頭でしっかり行い、ほぼマニュアルで当てているほどだ。建築設計に使う為に磨いた計算の勉強で得た知識の流用である。

さらに言えばＭＳを使った建築作業は他の火星の建築会社にはない明確な強みでもある。火星は厄災戦の影響で中途半端にテラフォーミングされた状態で開発が投げ出されている為、手を加えられている市街地ならともかくハーフメタルの眠っているような採掘所候補の場所は戦場跡であったり、根本的にどうしようもない荒れ地であったり

する為建設機材の移動もままならない事も多々あるのである。だがＭＳであれば通路の整地をしつつ移動も楽だ。巨大な2本の脚を持つ機動兵器なので、よほどの地割れでもない限りは地形に関しては歩いて対処可能なのだ。

　ハーフメタル採掘の利権を得たことで輸出制限が緩和された事で多くのものが採掘の規模を拡大している火星において、建設や整地の需要は高まるばかり。多くの仕事が鉄華組に依頼され、その業績は現在右肩上がりであった。

「ま、折角休憩なんだから今は仕事の話は置いておいて、一緒にご飯食べましょ？そうだっ、アタシ、三日月とアトラがやってたアレを昭弘にやって欲しいんだけどー?!」

「あ、アレをか……分かった。ただまぁ、出来れば二人きりで、頼む」

「おっけ。それじゃ休憩場所にいこっか」

　ラフタは悪戯っぽい声で昭弘に甘えながら、当たり前のようにその隣に立ち腕を絡ませ、もう片方の手に持った昼食の入った包みを持ち昭弘と共に現場を去っていった。

　その光景は見るからに熱々のカップルそのものであり、今ではそれを見慣れた鉄華組の面々はいいなぁと憧れの声を浮かべながら彼女の持ってきた昼食のサンドイッチを口に運ぶのであった。

ちなみに、三日月とアトラがやっていたアレというのは三日月がアトラを膝に座らせながらするサンドイッチの食べさせ合いである。鉄華団ではたまに見る光景であるのだが、その姿を羨ましく感じたラフタもまた恋人である昭弘にそれを要求するのであった。

クワシールカンパニーと手を組む事が決まり、そのための資金提供と技術指導を受けることになった鉄華団は少々忙しくなった。

三日月率いる酒造担当の面々は火星の王の改良に必要な酒造に使う器具や施設を扱うのに必要な資格の勉強に取り組み、昭弘率いる建設担当の鉄華組の面々は酒造を行う建物の建造を行うために設計の図面を引き、建設作業に取り掛かっていた。幸い現在の鉄華団はマクマードからの仕事である例の鉱山の調査以外は仕事が入っておらずそこの担当以外の手は空いていた為それらは滞り無く進んでいた。

肝心の材料であるアガベの生育も順調で、前に開墾した畑に植え替えてきたアガベの

子株は順調に大きく成長しておりこの調子なら後3ヶ月程後には収穫できるだろうという話である。本来のアガベならありえない成長速度であるが、この火星に生えているアガベ達は元々厄祭戦以前の火星開拓を行おうとしていた企業が遺伝子改良を施して作り出した物の子孫であるが故だ。その為育ちがとてもよく、それでいて火星の痩せた土でもよく育つのである。

　このように順調に物事が進んでいる中、三日月はある物を荷車に乗せて運んでいた。

「なあミカ、なんだその樽？そんなに沢山何に使うんだ？」

　荷車に大量の木製の樽を載せて運ぶ三日月に、オルガはそう尋ねた。どうやら中を火で炙っているようであり、近づくと木が燻された独特の良い香りがしている。

　荷車を止め、三日月はオルガの疑問に答えた。

「今作ってるものより高級な『火星の王』の熟成に使うんだよ。クワシールカンパニーの職人達から聞いた方法なんだけど、こういう蒸留酒は樽に入れて熟成させるともっと美味しくなるんだってさ。ただ……」

「何か問題があるのか？」

「うん。この樽を作るの時間が掛かる作業なんだ。今回は昭弘達に手伝ってもらってなんとか数を用意できたけど、いっそのこと樽を作るの専門の団員を用意したほうが良い

かもしれない。今は手空きの時期だからいいけど、昭弘達や俺も、こればっかりに手を向けてる訳にもいかないし……」

「そりゃそうだな。ミカも昭弘達もうちの戦力的にも稼ぎ的にも主力だからなぁ……新入りにそういうの得意な奴を募ってみるか」

「それがいいかもね。外注しようかとかも一瞬考えたけど、こんなの使うの火星だと俺達位だろうからいくら取られるか分からないし」

「だよな……外に頼んだらぼったくられそうだ」

ワイン等の他の酒に使った樽を使う方法も三日月は聞いていたものの、そっちは早々と諦めていた。火星の酒事情は正直言ってあまり良くない。市場に出回るのは厄祭戦以前の工場をレストアさせて作り出された合成品が殆どで、悪所に行けばそれよりも酷いものが平然と流通しているのが現状だ。

合成品ではない天然の酒も一応無いわけでは無いものの、金持ち向けに少量が作られている程度であり一般的な市場に出回ることは滅多にない。

その為必要な樽を自分達で調達する事に決めたのである。

「それじゃ、俺はこの樽持ってくから。オルガは今日は休暇だっけ？ゆっくり休んでて

よ」

「ああ、わかってら。流石にあんだけ皆に言われたら俺だって休暇中位は休んでるさ」

久しぶりに赤いスーツでは無く団員服に袖を通したオルガは、そう言ってその場を離れていった。

漸く事務仕事が出来る団員の育成が一段落した事と、この前ミーシャとの酒盛りの後ぶっ倒れた事を理由にたまには休めと鉄華団の団員たちに詰め寄られた事をきっかけにオルガもたまには休暇を取るようにしていた。

（とはいえ、何をしたものか。最近は仕事が楽しかったもんだから、そっちにばかり注意を向けてて他にやることが思いつかねぇな……）

とりあえず、基地の中にいては自然と他の団員の仕事を手伝ってしまいそうなのでオルガはクリュセの街に出向く事を決め、手空きのメンバーから護衛を兼ねてとライドとチャドを連れて行く事を決めた。

「久しぶりだなミーシャ。で、話ってなんだ?アイツらとは直接顔を合わせたと聞いたが」

鋏を手に盆栽の手入れをしながら、マクマードは目の前に立つ末娘にそう尋ねた。ミーシャが自ら火星に赴いた話は耳にしており、まあコイツならそうするだろうなとは薄々思っていたのでそれについてはそこまで驚いていなかった。

「鉄華団については、良い目をする奴らだと思ったよ。親父、ああいう奴ら好きだもんな。気に入った理由もよく分かった。それで、話については例の酒についてなんだ」

「おう、美味い酒だったろう?お前ならありゃ気にいると思ったんだが」

「ああ、気に入ったよ。だが親父、やっぱり気がついてなかったんだな。あれ、テキーラと同じ種類の酒だぞ」

サクッと言う音と共に、マクマードの手が狂った。盆栽の枝が落ちる。だが、それに気を向けることなくマクマードはミーシャの方を向いた。

「……マジか?あれと??」

「酒について私は嘘をつかんぞ 」

「いや知っとるよ……だからこそ、聞き返しただけだ。そうか……そりゃ……良いシノギになりそうじゃねぇか」

数年前の誕生日に、この末娘が共に飲もうと持ってきたその酒の事はよく覚えていた。覚えてはいたが、流石にミーシャ程酒狂いと言う訳ではないマクマードは『火星の王』とテキーラの関連性に気がつく事はなく、見逃していたのである。

「だろう?だから私も彼らと手を組む事にした。そのものではないとはいえ、テキーラが蘇るとなれば……世界中の酒飲みが買い求めるに違いない」

「そして昔の物はそれはそれとして価値が保てるから資産家たちの機嫌を損ねることも無い、か。いやテキーラを買ってるような資産家でも『火星の王』を歓迎するだろうよ。お前みたいにアレの封を開けるのに躊躇しない奴の方が少ないだろうからな!!」

自分よりも蟒蛇で、文字通り酔狂な末娘にそう言ってマクマードは鋏を机に置いた。

「これは吉報だ。久しぶりに一緒に酒でも飲んでゆっくり話し合おうぜ。色々と夢が広がるなぁ」

「是非とも。失われた銘酒の事実上の復活だ。これ程素晴らしいことは滅多に無いからな」

そう言ってミーシャとバリストンは、盆栽の置いてある部屋から出ていった。

枝の絶たれた盆栽は、意図せぬ形ではあったものの以前よりも良い形に変わってい

た。それは彼らにとっての吉報の知らせであったのかもしれない。そう思わせてくれるくらい、この二人の酒好きは筋金入りであった